

研究

二〇一九年 第八十八号

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.88 2019



## アメリカ力議会議会図書館蔵

## 伊能大図52号部分（仙台周辺）

会誌86号で松島周辺を紹介したが、忠敬にとつて縁の深い仙台が含まれなかった。今号で仙台周辺を取り上げる。伊能測量での仙台北下通過は第一次測量の往復路と第二次測量の帰路の三度である。

伊能忠敬の出身地旧下総国と仙台は水運を通じて密接な関係にあった。忠敬は伊能測量の23年前、妻（達）を伴い松島遊覧をした際、分浜（現宮城県雄勝町）に戻る途中だという秋山惣兵衛と銚田（茨城県銚田市・水運の要所）で出合い同行している。秋山は「：交易のため銚子、東都へ幾度となく往来し：」と言い、忠敬らは仙台北下国分町で名所の案内や飲食の饗応を受けている（測量日記）。忠敬の後妻（信）は仙台藩医桑原隆朝の娘で義父隆朝は伊能測量のキーマンの一人である。また伊能測量の元締めともいえる若年寄堀田正敦は仙台藩6代藩主伊達宗村の8男で桑原とは旧知の仲であったと推測できる。

表紙右上に松平政千代居城と記された城が描かれている。政千代とは仙台藩9代藩主伊達周宗の幼名である。政千代は寛政8（1796）年3月2日に生まれたが生母は産後の肥立ちが悪く死去し、同年に祖父と父が死去したため一歳にも満たない政千代が仙台藩主を相続することになった。そのため親戚筋による補佐体制が敷かれ、堀田正敦は後見役を務めている。伊能測量時の政千代の年齢は5歳、6歳（一次、二次）である。

この伊能測量のルートは概ね国道4号線（奥州街道）に沿っている。伊能大図52号から測線を取り出し、仙台周辺の川、天体観測場所などを参考に測線を国土地理院地図に重ねたものが図①である。第一次測量は寛政12（1800）年間4月19日深川を出立、古河城下、宇都宮、白河城下、福島城下を経て4月27日仙台北下国分町に着き宿泊した。

復路は8月9日西別を出立、釧路、函館、三厩、盛岡を経て10月7日仙台北下に着き2泊した。享和元（1801）年の二次測量の帰路は、一次測量の止宿地と同じ盛岡城下、吉岡を経て11月22日に仙台北下に着き2泊している。

左の写真①、②は筆者家蔵で恐縮だが、①は十数枚あった目録の一枚で松平政千代と記されている。いっどのような目的で出されたものか不明である。②は拝領品と書かれた箱にあった漆器の一部で笹雀の家紋が描かれている。当時の仙台は佐原・潮来・銚子にとって身近な存在であったようだ。宮内 敏

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）



図①：地理院地図に測線（赤）を加筆



写真①：松平政千代の記載のある目録



写真②：伊達家の家紋笹雀のある拝領品

## 目次

88号

## 表紙解説

アメリカ力議会議会図書館蔵

伊能大図52号部分（仙台周辺）

宮内 敏

## 研究と話題

●伊能大図に記載されている寺社について

●国宝紹介「下利根川沿実測図」

●『量地伝習録』を読む①

●平山郡蔵宛て伊能忠敬書状

●「天文方御役人巡行巻巻 稲舟様方御触留帳」

河崎 倫代

## 資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十二回

渡辺 一郎・井上 辰男

## 忠敬談話室

●土佐の伊能測量1 甲浦く赤岡編

●伊能図フロア展に魅せられて

福田 仁  
馬場 良平

ニュース・会員便り・新入会員紹介・お知らせ

石川県支部ニュース

「加賀藩測量の足跡をたどる」（越中2）

室山 孝・河崎 倫代

## 会員便り

「伊能忠敬・五国の足跡フォーラム in 笹山領」

開催される！

会津藩校日新館、日新館天文台遺跡訪問記

新入会員自己紹介

兵庫県豊岡市 加賀見省一

## お知らせ

2019年度「総会」報告・他

64

63

61

57

50

44

39

29

23

17

9

5

1



## 伊能大図に記載されている寺社について

星 埜 由 尚

伊能大図には、多数の寺社の名称が記載されている。特に西日本において寺社の記載は多く、測量日記においても地図に表示されている寺社のほかにも寺院の宗旨、神社の祭神など詳細に記述されている。何故、このように全国測量の次数を重ねるに従い寺社の記載が詳細になっていったのか、「伊能大図総覧」に記載した伊能大図の検討により、筆者の推測を交えて述べてみたい。

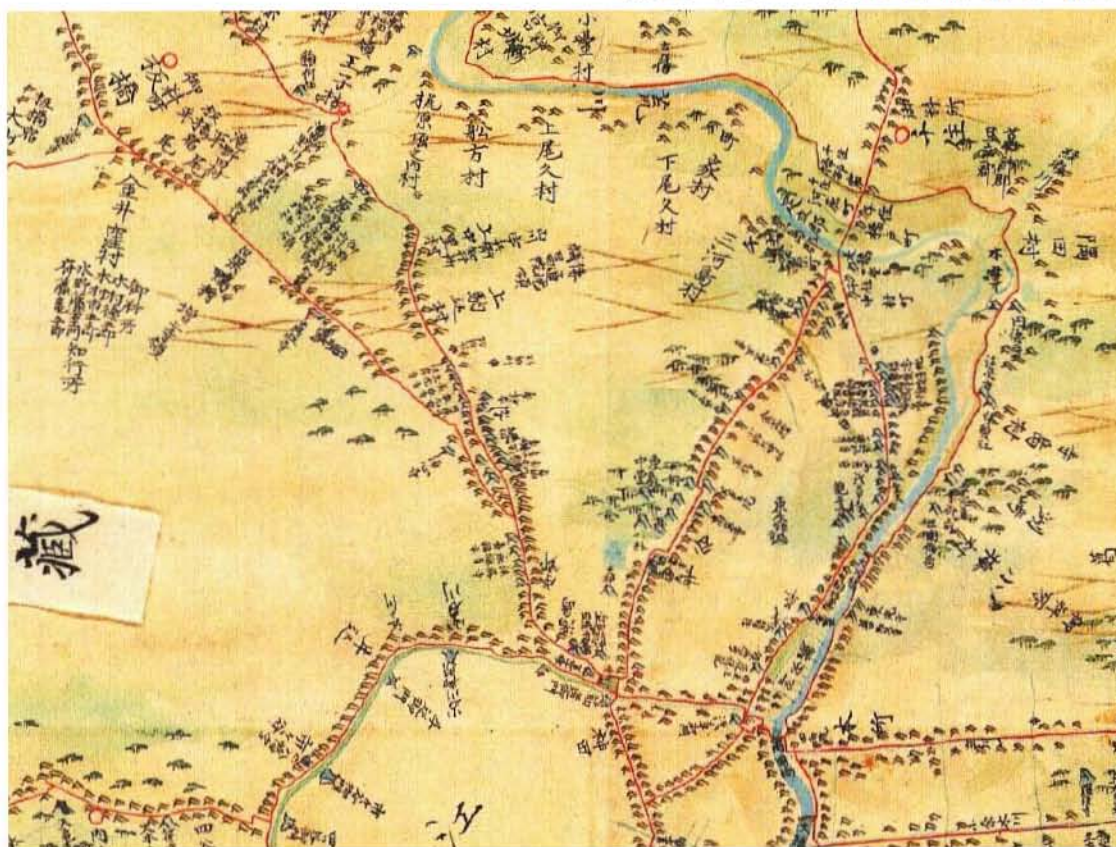
「伊能大図総覧」に記載した伊能大図は、彦岐、平戸、山口など一部の図を除き、文政4年に幕府に提出された「大日本沿海輿地全図」の控図から明治初期に陸軍、内務省などにより模写されたものである。従って、「大日本沿海輿地全図」の控図

に記載されていた各種の注記から模写の際に誤記、脱字等を生じた可能性があり、また、模写した機関、担当者により、注記の採用、筆写などの内容、精粗に差異のある可能性が高い。そのため、「伊能大図総覧」に記載した伊能大図に記載されている注記から検討する各種の議論には限界があるが、他に検討するための資料も見当たらないので、「伊能大図総覧」に記載した伊能大図に基づき伊能大図に記載されている寺社について検討してみたい。

「伊能大図総覧」に記載した伊能大図において記載されている寺院は四八二、神社は五五八、計一〇四〇である。記載

図幅番号	図幅名	寺院数	神社数
88	熊谷・浦和・川越	21	7
90	東京	125	27
93	横浜・横須賀	10	5
94	高崎・秩父	29	11
95	軽井沢・富岡	8	8
99	小田原	10	7
100	富士山	29	12
101	熱海・三島	9	12
118	岐阜・大垣	7	15
123	宮津	5	25
124	豊岡		17
127	福知山	3	18
128	和田山		3
129	桑名	4	13
133	京都	52	40
134	奈良	30	12
135	大阪	12	6
155	松江・米子	2	25
162	出雲	3	40
187	福岡	3	13
191	壱岐	1	27
192	対馬	1	26

寺社が多数注記されている図幅(寺社数15以上)



大図第90号江戸浅草・本郷周辺(内務省模写・国立国会図書館蔵)

に記載されていた各種の注記から模写の際に誤記、脱字等を生じた可能性があり、また、模写した機関、担当者により、注記の採用、筆写などの内容、精粗に差異のある可能性が高い。そのため、「伊能大図総覧」に記載した伊能大図に記載されている注記から検討する各種の議論には限界があるが、他に検討するための資料も見当たらないので、「伊能大図総覧」に記載した伊能大図に基づき伊能大図に記載されている寺社について検討してみたい。

数の多い図幅は、圧倒的に第90号江戸の図幅が多く、一五二の寺社を数える。次に多いのは、第133号京都の九二ヶ所で、第162号出雲四三ヶ所、第134号奈良四二ヶ所、第100号富士山四一ヶ所、第94号



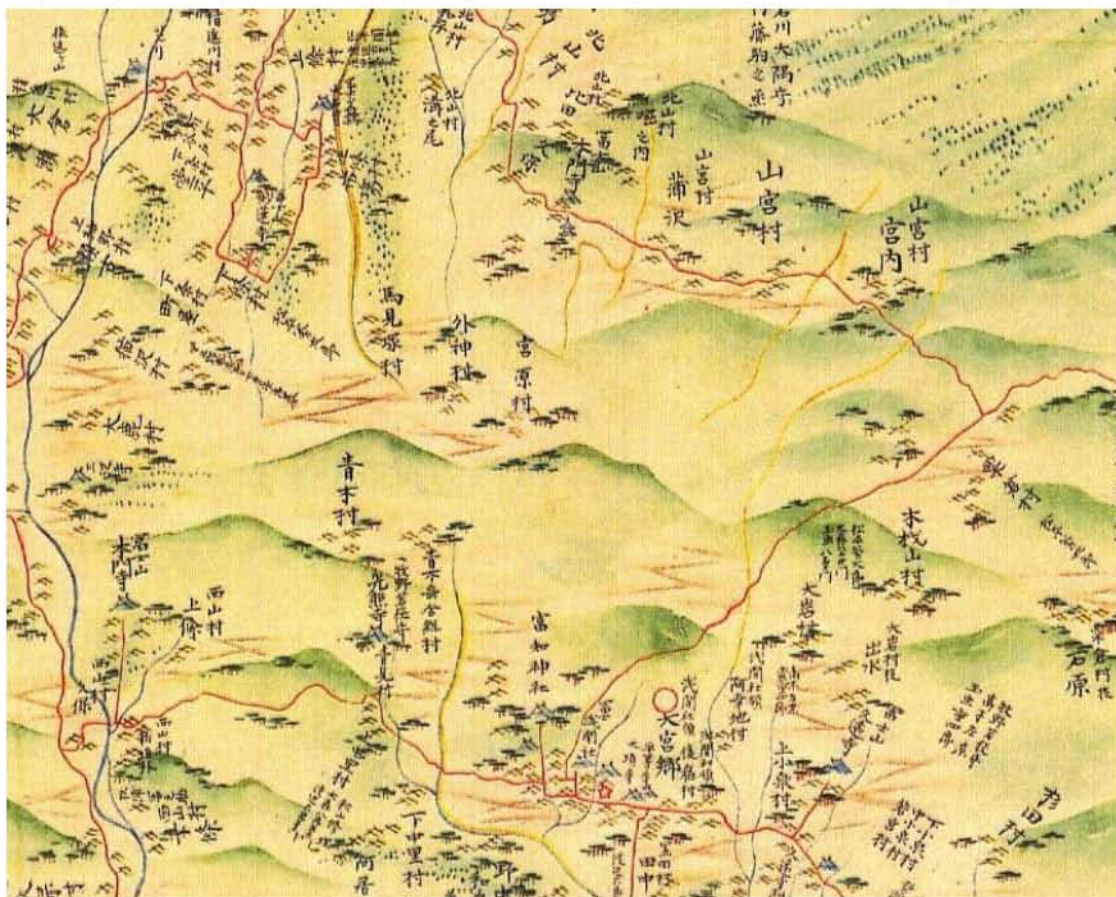
高崎・秩父四〇カ所と続く。その他寺社数の多い図幅は、第123号宮津三〇カ所、第88号熊谷・浦和・川越二八カ所、第191号老岐二八カ所、第155号松江・米子二七カ所、第192号対馬二七カ所、第118号岐阜・大垣二二カ所、第101号熱海・三島二一カ所である。

江戸の寺社の記載の多いのが目立つが、江戸の鬼門に当たる浅草、本郷のあたりには多数の寺社の名称が表示されている。現在も、この界限は、寺社の多いところである。品川には、品川寺門前、妙國寺門前、海雲寺門前、海晏寺門前の町名が記されている。寺院名の表示ではないが、それぞれの寺院の門前町を示している。

京都、奈良の古都の有名な寺社の多くがその名称を記載されており、京都、奈良の寺社名の多いことは常識的に納得がいくが、江戸の市中の寺院名を多数記載したのは、江戸府内図の測量が行われたことによるのであろう。江戸府内図には六〇〇を超える寺社が記載されている。

意外に多いのは、第100号

富士山の図幅である。これは、富士山の周辺に記載されている寺社が多いからである。富士信仰との関連があるのであろう。富士山麓の駿河側、富士宮の周辺は第九次の伊豆七島測量の帰途に詳し



大図第100号富士五山(内務省模写・国立国会図書館蔵)

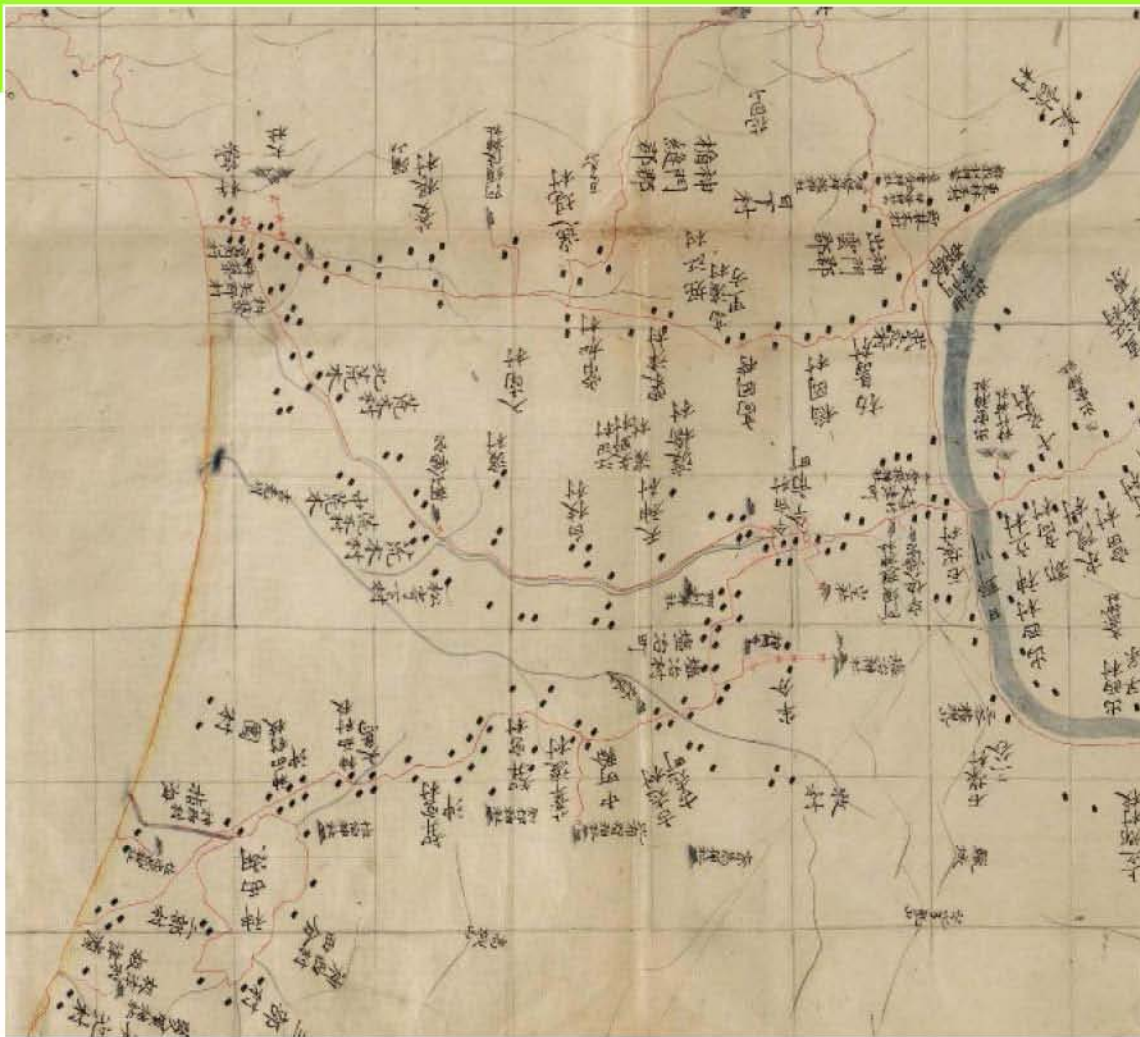
く測量されている。各地の富士浅間社、日蓮宗の富士五山が漏らさず記載されている。これらの寺社を図上に示すため、これほどまでに測線を多数設けたのではないかと思われる。富士五山を巡るように測線が設定されているように見える。富士五山とは、上条大石寺、北山本門寺、西山本門寺、小泉久遠寺、下条妙蓮寺を指し、いずれも日蓮の高弟日興の門流寺院である。これら富士五山には、すべて測線が延びていて、測線の設定もこれらの寺院の位置を明示することが目的で測量したと考えざるを得ない。

富士浅間社も、大宮の富士浅間社を始め、村山浅間社、須山浅間社、須走浅間社、北口浅間社などが描かれており、その位置を測量している。測線も各地の浅間社を巡るように設けられており、富士講を組んで富士山に多数の人々が御師に先導されて登拝した江戸社会の慣習と関係があるものと思われる。

第162号の出雲の図幅と第155号松江・米子の図幅も寺社が多数記載されている。特に神社の数が多く、これは、出雲大社を中心とした「神の国」出雲の特性によるものであろう。出雲大社は、「いずもたいしや」と呼ばれるのが一般的であるが、古くは杵築大社（きづきのおおやしる）と呼ばれていた。明治四年に出雲大社と改めたが、正式には「いずもおおやしる」である。伊能大図には、杵築の地名があり、単に「大社」と記されている。注記のある寺院は少ないが、浮根（浪）山鰐淵寺は、一時は出雲大社の別当寺としても盛んな古刹であったが、現在は往時の隆盛を偲ぶ静かな伽藍が残るのみである。

第191号老岐及び第192号対馬も多数の神社の注





大図第 162 号出雲大社周辺(陸軍模写・アメリカ議会図書館蔵)



大図 187 号太宰府周辺(陸軍模写・アメリカ議会図書館蔵)

記が見られる。浅学の私にはその理由はよくわからないが、「魏志倭人伝」に記されるように古代からの大陸との交流や国生みの神話などの影響があ

るのであろうか。

第 187 号福岡の図幅には、宝満宮竈門神社の注記があり、そこまで測線が到達している。現在、宝

満宮竈門神社は、下宮が宝満山山麓に、上宮が宝満山の山頂(八一九㍎)に鎮座する神社であるが、大図には宝満山の山頂に注記が添えられている。



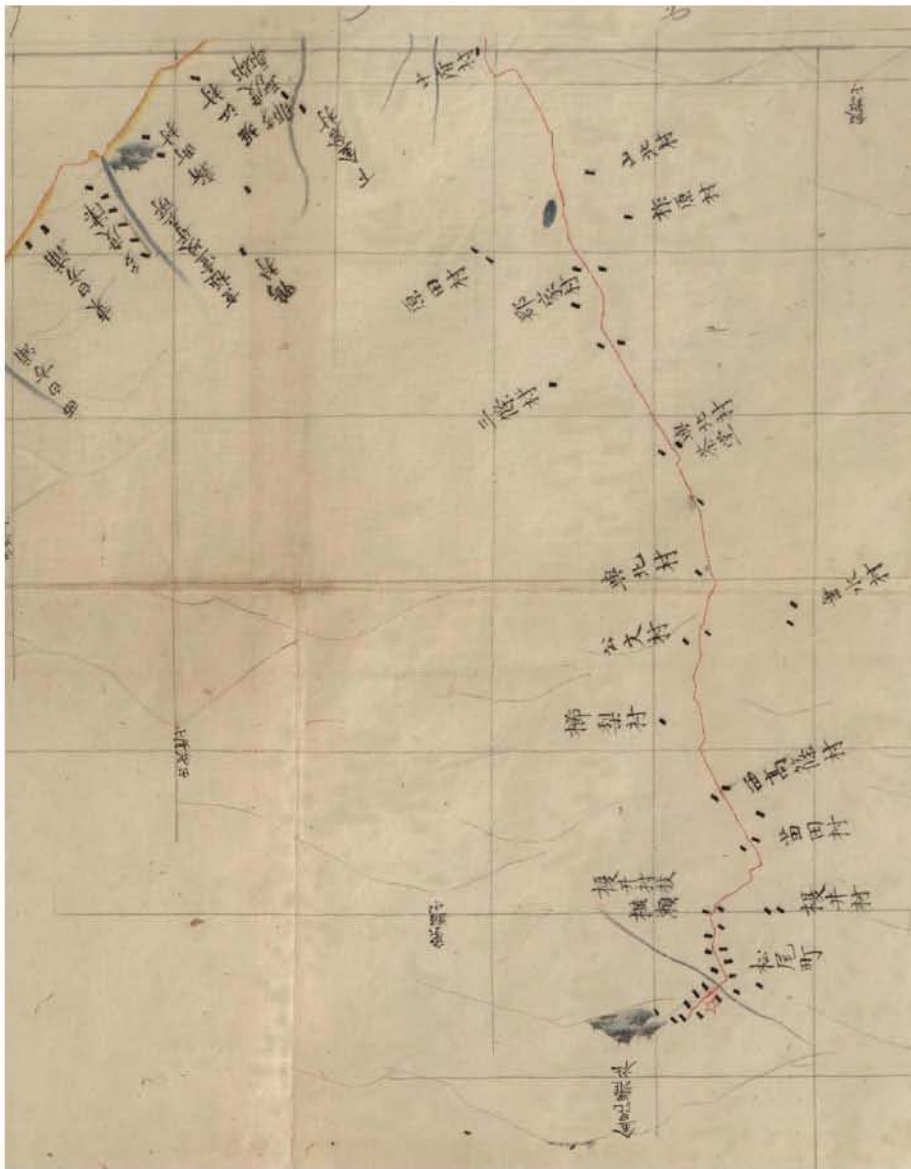
伊能忠敬自身は宝満山には登らなかったが、測量隊は山頂まで登り、開放された測線が描かれている。宝満宮竈門神社は玉依姫命を主祭神とし、伊能測量当時には神仏が習合し、修験道の聖域として信仰を集めていた。測量日記には、行程が詳しく記述されている。伊能測量隊は、何故宝満山に登ってまで宝満宮竈門神社の測量を行ったのであるのか。比高八〇〇を越える山を登って山頂の神社まで測量した例は英彦山、高尾山などに見られるが、いずれも宝満山ほどの比高はない。

宝満山の位置を地図上に描画したのであれば、富士山などの顕著な山のように交会法により明らかにすればよい。しかし、導線法により社前まで測量しているのは、神社の位置を明示しなかったからである。伊能測量が幕府直轄の事業となつてから、測量隊の態勢も充実し、作業実施も余裕ができ、元来信心深かった忠敬は、神社仏閣に参詣する機会も増えたと通説では言われてきたが、それだけであろうか。

伊能忠敬の神社の測量は、主要な測線から短い距離を派生して測量した場合も多いが、開放した長距離の測線を設けて神社の門前・社前まで測量している事例も多い。吉野山、当麻寺、播磨一宮、兵庫県香美町村岡の黒野神社、讃岐の金比羅社宝満山の近くの宇美神社など長い距離の測線を門前・社前まで延ばしている。それほどの距離がなくとも、寺社まで分岐した測線は数多くある。このような開放した測線は、本来の測量の目的である海岸線の形を明らかにするためには不必要な測線である。従って、精度は必ずしもよくないが、対象の神社の位置を地図に示すことが目的で寺社まで測量されたと考えられる。

西日本の測量では、各藩の城下には必ず訪れ、城下まで開放された測線が描かれている例も多い。伊予大洲、福井では、長い分岐測線が城下まで到達している。測量日記には、城下には必ず寄り、忠敬が藩の役所に必ず挨拶に出向いていることが窺われ、また、藩からも藩の役人が訪ねてきて藩主からの贈り物などを渡している。藩の協力を謝すとともに藩領の地理情報にも意を配ったことが推測される。

伊能忠敬の全国測量は、回を重ねるごとに測量日記の記載も詳細になり、特に幕府直轄となった第五次測量以降の西日本測量では、測線密度も増大し、寺社や城下へ向かう開放された測線の測量も増加し、寺社や城下の記載も地図上、測量日記ともに詳細になる。このことは、単に伊能測量隊の測量が詳細になったのみでなく、幕府の意思が働いていたと考えるのが至当ではあるまいか。



大図 152 号金毘羅社周辺(陸軍模写・アメリカ議会図書館蔵)



## 国宝紹介

## 「下利根川沿実測図」

玉造 功

## 一 はじめに

香取市佐原の伊能忠敬記念館が所蔵する国宝二三四五点のうち地図・絵図類は七八七点で三分の一を占める。国宝地図・絵図類番号五三二の「自飯島村至篠原村下利根川沿実測図」（以下「下利根川沿実測図」と略す）は、伊能忠敬が隠居して江戸に出る前に、佐原の地で実測した地図である点に特徴があり、独自の価値を持つ。

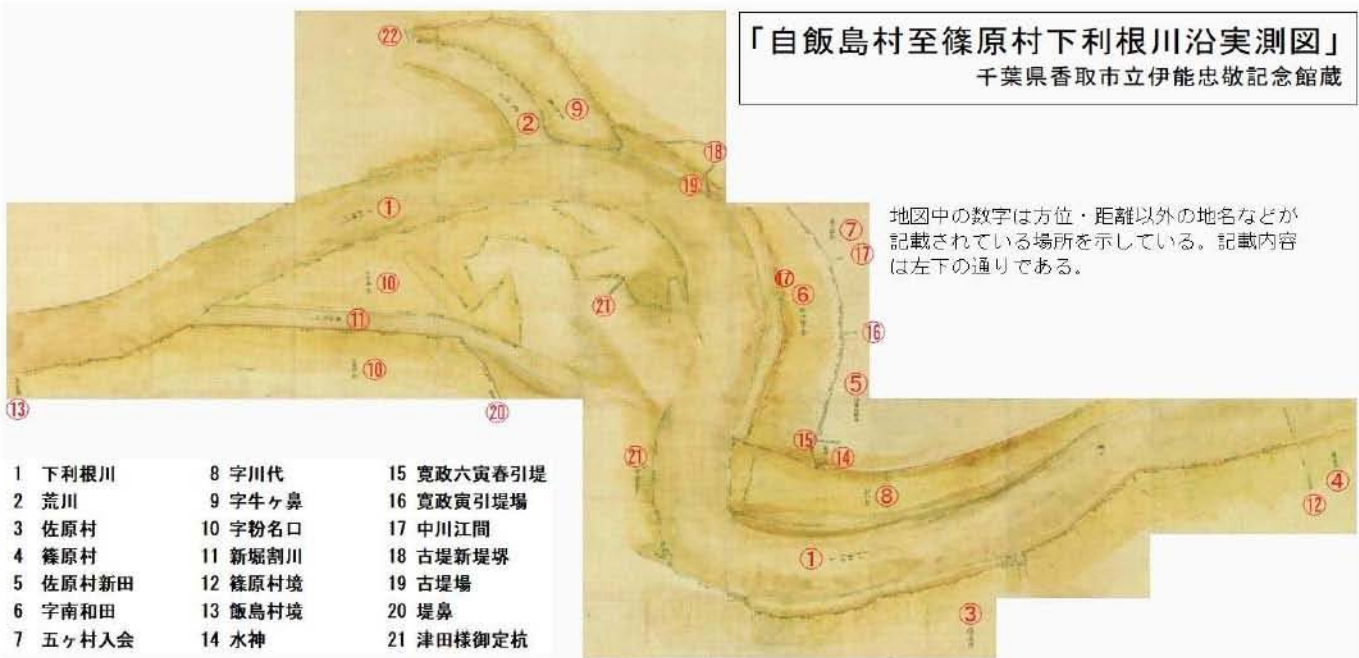
そのために、この実測図は、江戸に出る前の腕試しとか、江戸に出る前から測量の練習をしていた証しとして位置づけられることもあった。ここでは、この実測図の全体図と細部を紹介するとともに、実測図が作成された背景についても検討してみたい。

なお、この実測図については、会報四二号で佐久間達夫氏が紹介しており、本稿も佐久間氏の論考に負うところ大である。

今回の図版は、国土交通省の利根川下流河川事務所が作成した実測図の複元パネルを用いた。これは十六枚の原図からデジタル処理をして一枚の地図として精密に復元したものである。「川の駅 水の郷さわら」に隣接する「川の駅 水の郷さわら」の二階の防災教育展示の一角に実測図の複元パネルは置かれており、月曜日などの休館日を除き、いつでも見ることが出来る。

## 「自飯島村至篠原村下利根川沿実測図」

千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵



## 二 「下利根川沿実測図」について

この実測図は縮尺がおおよそ一二〇〇分の一で、横幅が220cmというかなり長大なものである。本来は一鋪の地図であったものがバラバラになつてしまい、現在は十六枚に別れて残存しているが、失われてしまった部分もあると思われる。幸いなことに主要部分が残っており、検討するに支障は少ない。

実測図の中央に利根川が乙字に蛇行しており、二ヶ所に①「下利根川」の文字が書き込まれている。②「荒川」は現在の横利根川であろう。利根川の河道は、図1の明治十八年七月の陸軍参謀本部による迅速測図でもあまり変わっていない。明治三十三年に始まる利根川改修工事によって、青色で加筆した現在の河道となった。



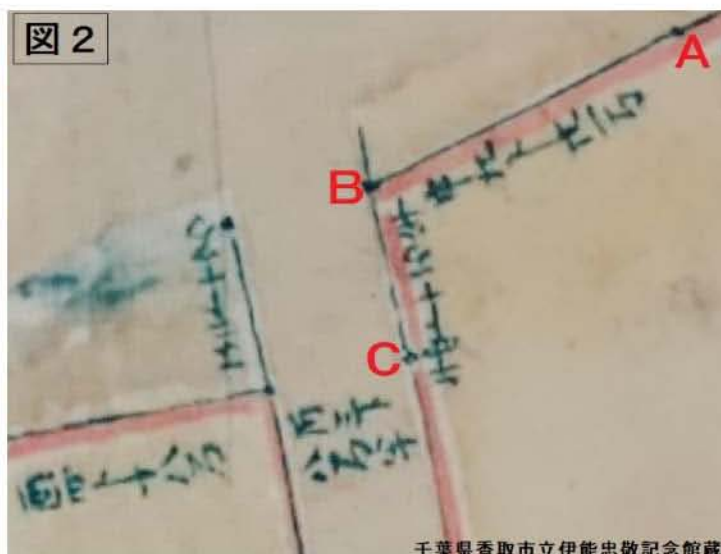
出典：農研機構農業環境変動研究センター



### 三 実測について

「下利根川沿実測図」の測量方法は導線法によるものである。図2の利根川南岸の佐原村の部分を見ると、

**A**から**B**の方位と距離が「申九分 廿一間」、**B**から**C**の方位と距離が「午四分 十間半」と



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

各区間の方位と距離が記されている。「申」は西南西、「午」は南である。その上、文字の向きが進行方向から書かれているので測量の経路も判明する。方位と距離を記した黒の測線とともに、朱の線が引かれている。これは堤防の部分を示していると思われる。

図3 実測区間

朱線は方位と距離が記録されている  
青線は方位だけが記録されている



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

図3は実測した区間を示している。

⑫篠原村境から⑮津田様御定杭の先まで

⑥南和田の周囲、

⑨牛ヶ鼻の周囲、

⑩粉名口の周囲、

⑳堤鼻から㉑飯島村境まで

また、実測区間には青線で示したところを

始めとして点線で方位だけが記載された箇所

がある。図4の佐原村と篠原村の境界⑫から、

図4

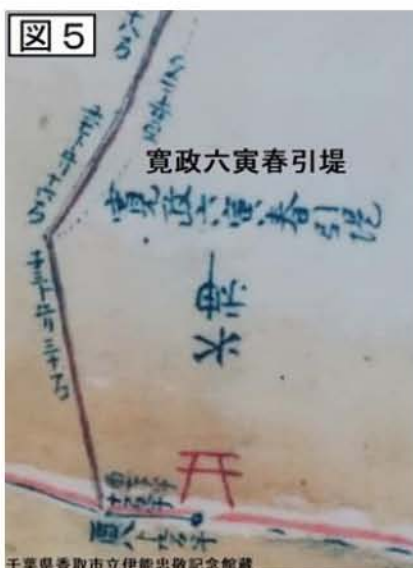


千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

対岸の佐原村新田と篠原村新田の境界に向つての方位は「子午老分新田堺見込」と記されている。「子」は北、「午」は南である。また篠原村から⑫の方位は「申十分」としている。利根川の川幅は測量していないが、青線の三ヶ所で位置関係を確認している。

### 四 実測図作成の背景について

「下利根川沿実測図」の作成年代については、図5の「水神」付近に「寛政六寅春引堤」



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵



と、その北方にも⑩「寛政寅引堤場」との記載があることから、寛政六年のことと推測される。

寛政六年（1794）は忠敬が伊能三郎右衛門家の当主であった最後の年である。同年十二月に忠敬は隠居して勘解由を名乗った。翌寛政七年三月には妻ノブが江戸の桑原邸で死去し、五月に忠敬は江戸深川黒江町に居を構え高橋至時に入門した。

この実測図を作成した背景と考えられる出来事が、伊能家代々の功績を記録した『旌門金鏡類録』【注1】の第二巻に記されている。

「寛政六寅春引堤」と同じ時期の寛政六年の春二月二十七日、幕府の勘定奉行柳生主膳正の一行五十人程が佐原村に到着した。目的は「荒地起し返し御見分」のためである。「荒地起し返し」とは、放棄された耕地を復旧することであり、荒廃した農村の復興を目指した寛政の改革において、農政の重点であった。その見分のための勘定奉行の来訪である。

翌二十八日の勘定奉行の視察には、忠敬が名主・組頭などの佐原村の村役人をひきつれて案内にあたった。

忠敬の身支度も記されている。青梅嶋の綿入で絹裏を着用し、脇差を帯びたと記されている。贅沢禁止の時代にあつて、経糸の綿糸に絹糸を忍ばせた青梅嶋（縞）に絹裏とは、忠敬さんもなかなかおしゃれである。

勘定奉行の一行が先ず船で向ったのは南和田の「川欠け潰れ地」である。「川欠け潰れ地」とは河川の氾濫などで耕作できなくなった田畑のことである。続いて、粉名口に向か

い「荒地御見分」をして視察を終え、上流側の村に向った。佐原での勘定奉行の目的地は南和田と粉名口であった。

## 五 南和田について

図6の南和田は利根川の水流が直撃する場所であり、利根川北側に広がる新田開発地域にとって水上の要所である。そのため、南和田周辺には地名や測量データ以外の情報が書き込まれている。南和田の「寛政六寅春引堤」「寛政寅引堤場」の「引堤」とは、洪水対策として堤防を後方に移動して川幅を広くすることである。南和田のBの堤を矢印のようにAの寛政六年の堤まで引堤をすると、その間の帯状の地域は耕作できない「川欠け潰れ地」となり無年貢地となってしまう。

伊能淳家文書の『傳家』【注2】には、安永六年（1777）十二月に佐原村など五ヶ村が代官所に宛てた文書があり、南和田について次のように述べている。

南和田は佐原村・篠原村・津宮村・大倉村・岩ヶ崎村の五ヶ村の入会地としてこれまで堤を維持してきたが、「至つて難場」であり、出水のたびに水底より欠け崩れるので、毎年のように引堤などを行なつて防いできた。これまで百姓の住居などで失われたものが凡そ二十軒余りである。このままでは恐れ多いことではあるが年貢を負担する田地が亡失してしまう。また、南和田の堤防が失われると、天

図6 南和田引堤関係



図7

領の新島領のうち九ヶ村までが水害により稲作が出来なくなつてしまつて訴えている。水防の要地であり「至つて難場」の南和田ではこれまでも引堤がなされてきたという。確かに図6にも寛政六年以前の引堤の痕跡がうかがえる。Aの寛政六年の堤とBのこれまでの堤には忠敬の測線が記されている。その西側に並行するCは昔の堤の痕跡と思えるような描写がなされている。

図7の南和田の北端を見ると、方位と距離を「戌九分卅五間」記したBの従来の堤（新



堤)から昔の堤(古堤)が分岐して一部残存して「古堤残」と記されており、**C**は古堤の跡であることがわかる。

南和田の引堤は新田地域を洪水から守るといふ水上やむを得ないことではあるが、引堤は潰れ地を生じさせてしまう。それは年貢地の減少という、幕府にとって負の側面をも意味するものであった。これが勘定奉行一行の南和田の視察の背景であったのであろう。

文政七年八月四日、忠敬の嫡孫忠誨は出水の後で、佐原村新田の土手を見廻った。そして「新田土手即ち南和田へ、むすびにて五斗、十四ヶ村人足へ遣す。」と日記に記している。

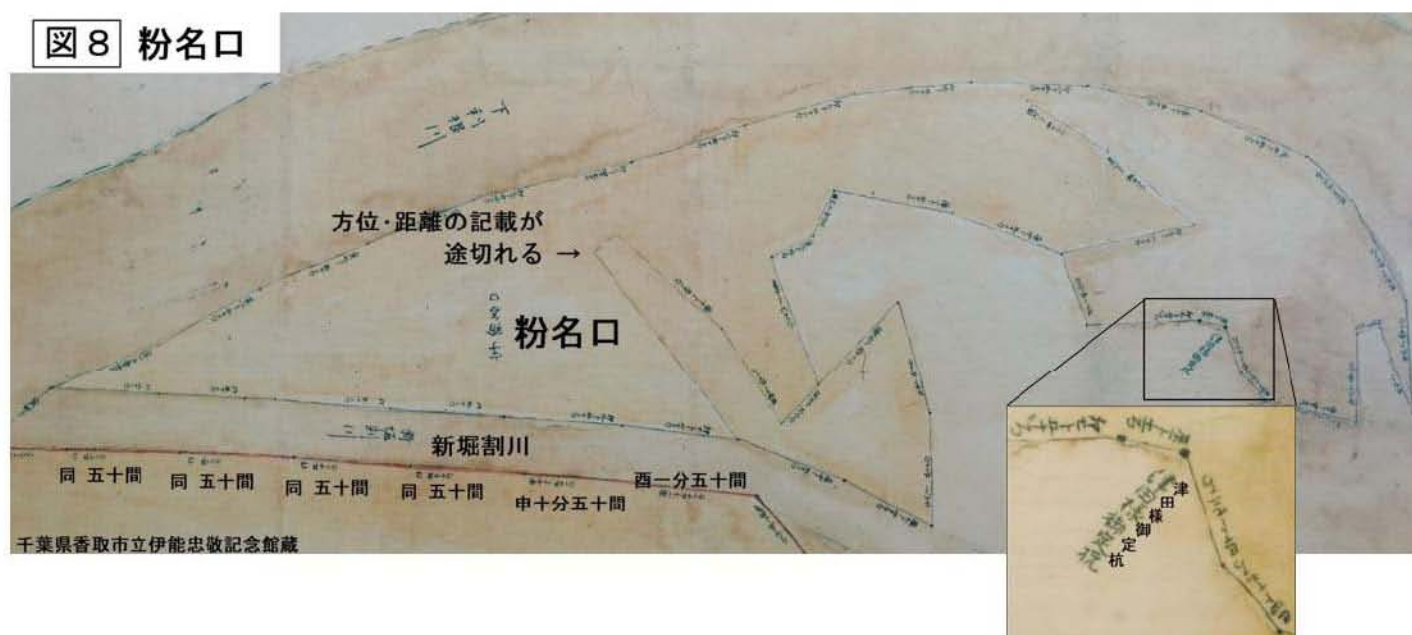
佐原村新田さらには利根川北岸沿いの新田集落にとって、相変わらず「新田土手即ち南和田」は水防の要であった。

## 六 粉名口について

勘定奉行一行が「荒地御見分」に向った粉名口は、利根川の土砂が堆積して生じ、所有関係や耕作が不安定な場所であった。図8にも方位や距離が測れなかった個所が見られる。

この実測図作成にあたって忠敬が使用した測量器具は不明であるが、距離については五十間縄が用いられたと考えられる。図8の新堀割川は利根川の曲流部に開鑿された放水路とみられ、直線状の測線が続く。南岸の堤の測量データも「西一分五十間」「申十分五十間」「同五十間」「同五十間」と繰返される。直線的な部分では間縄を最大限伸ばして五十間を測ったのであろう。

図8 粉名口



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

図8の「津田御定杭」については『傳家』

や『旌門金鏡類録』にその経緯が記されている。佐原村が天領から旗本津田家の知行所となったさい、引渡す側の代官所の手代と引継ぐ側の津田家の家臣の両者が立会って、粉名口に「御定杭」を打って津田家知行地の佐原村に引渡した。これに対し、粉名口附洲は三ヶ村入会であるとして篠原村、津宮村が納得しなかった。名主たち村役人では収拾がつかず、結局伊能忠敬と永沢治郎右衛門が仲裁しておさめた。勘定奉行の見分の十五年前のことである。実測図に「津田御定杭」を記載することは佐原村としては不可欠であった。

この実測図には佐原村の中心部が描かれていないが、それは今回の勘定奉行の視察に関係が無いからである。伊能忠敬が下利根川沿いを実測したのは、「荒地起し返し」を目指す寛政の改革の中で、勘定奉行による「南和田川欠け潰れ地」「粉名口荒地」視察のために準備した実用本位の目的によるものであった。

注1 伊能淳家文書『旌門金鏡類録』については香取五郎氏翻刻の私家版によった。

注2 伊能淳家文書『傳家』については佐原古文書学習会が解説を進めており、それによった。解説の成果は『伊能忠敬記念館年報』第九号から掲載している。内容は元文四年から寛政五年までの伊能家を軸とした佐原村の村政記録であり、『部冊帳』と『旌門金鏡類録』の間をつなぐものである。



## 『量地伝習録』を読む①

## 伊能先生地理ノ術ハ天学ノ余力ナリ

前田 幸子

はじめに

伊能忠敬の測量法を伝える資料として『量地伝習録』がある。忠敬の高弟だった渡辺慎が自らの体験に基づいて測量機器や製図法等について具体的に解説したもので、伊能流測量技法を記した書物として唯一のものと言われる。名前の通り量地のみで天測については言及がないが、伊能測量を知るための重要な資料である。今号、次号と二回にわたり『量地伝習録』を紹介してみたい。今回は上巻の前半である。

## 『量地伝習録』の概要

本書は渡辺慎（尾形慶助、顕次、他）（一七八六—一八三六）が門人として習い覚えた忠敬の測量法を書き記したものである。したがって題名を「伝習録」（伝習＝師から教えを受けて復習する）とし、本論である測量技術の解説部分には「伊能東河先生流 量地伝習録」と内題を付し、「渡辺啓次郎慎子言述」（述＝先人の言説を受け伝える）としている。これに対し、自序は「渡辺啓次郎慎子言撰」、序文は「渡辺啓次郎慎子言誌」として自身の著作であることを明示して区別している。書名は王陽明の『伝習録』を意識したとも考えられ、自序等も渡辺慎の漢学的素養が感じられる内容となっている。巻頭に付された自序および序文は本書の成立

の経緯を述べる中に、忠敬の人間性がにじみ出ていて興味深い。伊能測量の偉業が技術面だけで達成できたのではないと感じられる。

## 成立の事情と経過

序文によれば、この書は忠敬の臨終時の遺言に依って、忠敬の没後七年目の文政七年（一八二四）に著述したものである。比較的小規模な書物であるが、渡辺慎が普請役として多忙な生活を送るなかでやっと成立させたものであることが書簡等で知られている。著述にあたっては書きためていた備忘録を基に執筆した。公刊の要請もあったが、渡辺自身が断り続け、写本として伝来した。その後、天保二年（一八一三）に出版が企図されたらしく、新たに自序が付された。しかしこの企ては実現しなかったようである。現在のこの書の刊本は見当たらない。

## 写本について

現在、本書の写本は多数存在し、それぞれ少しずつ字句の異同があるほか、目次の項目立てや記述内容にも差異がある。多くは上巻（本文）下巻（附録）の二巻構成であるが、上巻のみ、あるいは下巻のみ伝わるものもある。ウェブサイトで公開されている写本もあり、国立歴史民俗博物館、東北大学図書館、早稲田大学所蔵のものは自宅で閲覧できる。

そのほか国立国会図書館、日本学士院、東京国立博物館、静嘉堂文庫、明治大学、東京都立中央図書館、山形大学、茨城県歴史博物館、九州大学にも所蔵がある。一館で数種類所蔵する例もあり、需要が多かったことがわかる。

## 気象庁旧蔵の写本

多くの写本がある中で今回原本画像として採用したのは国会図書館所蔵の気象庁旧蔵本である。採用理由はこの写本の筆跡が特に美しく読みやすいこと、大谷亮吉が『伊能忠敬』を編著するにあたりこの写本を採用し、かつ論評を加えていること、その来歴から幕府が所持していた可能性があること、の三点である。

この写本は昭和四〇年代に気象庁の図書館の蔵書から『測地度説』等とともに発見されたもので、その経緯については『伊能図に学ぶ』等でも紹介されてよく知られている。「地理局測量課」の角朱印があり、明治政府内務省地理局が幕府から引き継いだ資料である可能性があるが、幕府が公式に所持していたものか、あるいは地理局が他から入手したものかは不明だという。ただし筆跡は明らかに職人の手になるもので、渡辺慎が筆工に清書させて幕府に献上したものか、あるいは幕府自身が清書させて利用していたものであろうと考えられる。

この写本を他の機関から取り寄せた数種類の写本と比較校合してみたところ、筆写された年代が最も早い国立歴史民俗博物館所蔵の写本（天保二年三月筆写で天保二年五月の自序より早く、したがってこの写本には自序が付いていない）と記述がほぼ一致している。後年に筆写された写本は書き直されたらしく、文章が長くなっている箇所があるが、その点、この気象庁旧蔵本は原著の記述を伝えていると考えられる。本稿では気象庁旧蔵本を基本にしつつ、他の写本の記述も適宜参考にしながら読んでいくこととしたい。



◆『量地伝習録』の構成◆（気象庁旧蔵本）

上巻と下巻の二冊構成である。上巻は自序、序文および測量技法を記述した本編からなり、本編の冒頭に「伊能東河先生流量量地伝習録」の内題を付す。下巻は附録として三角法を収録する。筆写した年月、筆者等についての記述はない。

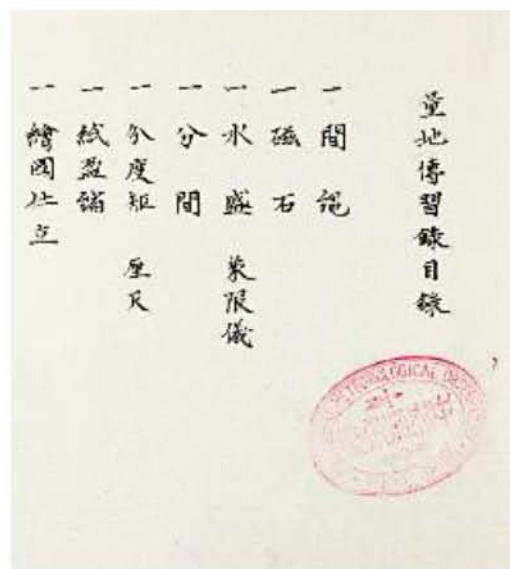
上巻



下巻（附録）



上巻（本文目次）



下巻（附録）



本稿の画像は全て国立国会図書館蔵

『量地伝習録』の構成

◎上巻

量地伝習録自序

天保二年五月 渡辺啓次郎慎子言 撰

量地伝習録序

文政七年四月 渡辺啓次郎慎子言 誌

量地伝習録 目録

伊能東河先生流量量地伝習録

渡辺啓次郎慎子言 述

一 間縄

一 磁石

一 水盛 象限儀

一 分間

一 分度矩 厘尺

一 紙盈縮

一 繪圖仕立

一 町見

一 測器繪圖

◎下巻

量地伝習録附録三角法

渡辺啓次郎慎子言 述



## ◆『量地伝習録』上巻の内容◆

## 『量地伝習録自序』渡辺慎撰（原文①）

本書の巻頭に収録されたこの「自序」は天保二年（一八三一）五月に渡辺慎（啓次郎、字は子言）が撰文したものである。文政七年（一八二四）三十九歳で『量地伝習録』を書き上げて序文を付したが、七年後の四十六歳のときに出版の話があったらしく、そのために再度自ら序文を書いたものと考えられる。

自序は通例にしたがって著述の趣旨や成立の由来などを記している。測量の重要性から書き起こし、量地と天測との密接な関係、その両者を兼ね備えるのが真の量地学であることを述べ、「伊能東河先生はこの学の鼻祖（創始者）なり」と断言している。そして忠敬の全国測量に従って自身も測量を習い覚え、その備忘録に基づいて本書を書いたこと、このたび要請を断り切れずに刊行に応じたことを記して文を結んでいる。自序ながら全て漢文で、かつ漢籍の知識を披瀝しつつ記述している。文中の「彈丸」「鶏卵」の語は、中国の古典（13頁註）に言う渾天説の比喻をふまえたものであろう。

この自序が書かれたのはシーボルト事件で高橋景保が獄死した文政十二年（一八二九）の二年後、事件の影響がまだ色濃く残っていた時期である。それ以前、慎は文化十二年（一八一五）に渡辺氏に養子に入り、その後も高橋景保の手付として忠敬に師事していたが、文化十四年、三十二歳のときに養父が没すると、その跡を継いで普請役となった。このあと多忙で苦勞の多い日々を送ったことは伊能家に遺された

書簡によって知られている。そのような中で『量地伝習録』は執筆されたのである。この書は実用的な技術解説書ではあるが、その背景を知ると単なるハウツー物としては読めない。渡辺慎の渾身の書として読むべきであろう。

## 『量地伝習録序』渡辺慎誌（原文②）

この序文は文政七年（一八二四）四月に本書が出来た際に付され、漢字カナ交り文で成立の由来を記している。まず冒頭で「伊能東河先生地理の術は、天学の余力なり」と、忠敬の本務が実は天文暦学であり、測量は天文暦学を修めた後の余技として行われたという事実を述べる。それについて全国測量の経過を辿り、結果として測量技術が高度な段階に達したことに言及する。その技術を次世代に引き継ぐべきことを忠敬が臨終に際して渡辺慎に命じ、それにこたえてこの書を著した、という『量地伝習録』成立の興味深い逸話が語られている。忠敬は「天文暦学には各流派があるが、測地術の分野にはまだそのようなものがない。もし将来、私の測量術を習得したいと志望する者がいたら、お前がそれを伝授しなさい」と渡辺慎に語ったという。この書が伊能測量の特色であるはずの「測天」の部分の欠き、「量地」のみで終わっている理由がここにある。忠敬は天文方に遠慮したのか、あるいは渡辺慎の力量を考慮したのか、「測天」を省略してしまった。しかし「量地」のみでは伊能測量の解説書としては不十分である。あるいは忠敬の真意として渡辺慎に著作を遺させるのが目的だったようにも考えられる。渡辺慎自身も「先生終二臨テ吾レヲ

戒テ曰」と、忠敬の言葉を「依頼」ではなく「戒テ」すなわち「教導」と捉えている。もし伊能流の技法書を依頼するのであれば、いまわの際ではなくもつと早くに申し渡す筈である。忠敬は学問好きだった慎が学者を諦め、普請役で終ることに心を痛めていたのかもしれない。結果として渡辺慎は貴重な著作を遺すこととなり、忠敬が「世に伊能一流を広めたい」と望んでいた測量法を現代に伝えることとなった。

なお、筆写年代が下る写本では、最後の部分により詳しく書き直されている。「先生常ニ吾ヲ誘クユエンノ意ヲ思テ、潜然トシテ涕襟ヲ沾シ、終焉之命ニ黙スルコトヲ得ズ。」すなわち「先生が常に私を導こうとするお気持ち pensando につけに應えないわけにはいかなかった」とあり、師弟間の情愛が深かったこと、忠敬が厳しいばかりの先生ではなかったことが理解される。

## 『伊能東河先生流量地伝習録』渡辺慎述

ここからが「伊能東河先生流」量地論である。

## 『間縄』（原文③）

測量に使用する間縄の解説である。実際に使われていた間縄には様々な種類があり、湿度や摩擦等による伸縮が問題だったことがわかる。

## 『磁石』（原文④）

磁石は羅針、方位盤等のことで、彎窠羅針などの解説である。機器の保守管理、正確な方位を得るための様々な工夫など、実体験に即した具体的な解説が興味深い。



①【原文】「量地伝習録自序」 渡邊慎子言撰

量地傳習録自序 我邦之於地也。地之於天也。彈丸耳。我邦之於地也。粒米耳。自大視小。自小視大。則其所視者各不同也。我邦之幅員。不為狹矣。限之以江海。障之以山岳。而田野村落。無所不充也。夫島國之形象者。無缺於量地也。量地之術。自古有之。雖然。其法迂遠疎濶。而不足用焉。何則。六藝後世。唯數學而已。為長於古。是以算數曆術之徒。日益精矣。量地之為法也。出於曆術。而與曆術相表裏。焉不測天。則無得地之理。不量地。安能得天之文。如維印之裏。黃測天量地。兼用者。此之謂真。之量地學矣。伊能東河先生者。此學之鼻祖也。寬政中稟命以來。十有七八年。天下之海濱官路。無所不測量。及國成也。其郡國之大小。廣狹長短。遠近可指計。而辨矣。矣。可謂閭閻以來之良法也。余雖從予先生。尊銳而不能得其要。然耳聞之所存。粗記之。備遺忘。竊命曰。量地傳習録。以藏於家。焉同志之者。請梓之以公於天下。余梓之再三。而不得於是乎言。

天保二夏五

渡邊慎子言撰

【書き下し文】地の天に於けるや弾丸のみ、我が邦の地に於けるや粒米のみ。大より小を視、小より大を視る、則ち其の視る所の者は各々同じからざるなり。我が邦の幅員は狭しとなさず、これを限るに江海を以てし、これを障るに山岳を以てす。而して田野、村落、充たらざる所無きなり。夫れ國の形象を画く者、量地より能くするはなきなり。量地の術は古よりこれ有り。然りと雖も、その法は迂遠疎濶にして用を足さず。何となればすなわち、六芸、後世ただ数学のみ古より長たり。是を以て算數曆術の徒、日に益々精たり。量地の法たるや曆術に出でて、而して曆術と相表裏す。天を測らざれば、則ち地の理を得ること無く、地を量らざれば、安んぞ能く天の文を尽すを得ん。鶏卵の黄を裹むが如し。(※13頁註) 測天量地を兼ね用いる者、此れこれを真の量地學と謂う。伊能東河先生はこの學の鼻祖なり。寛政中、命を稟けて以來十有七八年、天下の海濱、官路、測量せざる所なし。図成るに及んでや、その郡國の大小、広狹、長短、遠近、指計して弁ずべし。實に開闢以來の良法と謂うべきなり。余、先生に従うと雖も、魯鈍にしてその要を得ること能わず。然れば、耳これを聞いて存するところ、これを粗記して遺忘に備え、窃かに命じて曰く量地伝習録と。以て家に藏す。同志の者、之を梓して以て天下に公にせんことを請う。余、之を辞すること再三なれども得ず。是に於いてか言う。

天保二夏五

渡邊慎子言撰

【大意】広い大地も天と比べたら、ほんの弾丸ほどにすぎず、我が國の国土が大地に占める大きさはほんの一粒の米ほどにすぎない。大から小をみるのと、小から大をみるのと、それぞれ見方は同じではない。我が國の国土は広く、河や海、山岳で区切られ、田や野原や村落で充たされている。そもそも國土の姿を表すには、土地を測量するのが最良の方法である。測量技術は古くから存在するが、その技法は迂遠かつ粗略で実用には不十分である。六芸（礼・樂・射・御・書・數）のうちで数学だけは昔より現在のほうが進んでいる。それゆえ算數曆術を学ぶ者たちは日々精密になっている。量地の技法は曆術から派生し、曆術と表裏の關係にある。天を測らなければ地理がわからず、地を測らなければ天文の法則を究めることができない。鶏卵が黄身を内包しているようなものである(※13頁註)。天測と量地と両方を併せ用いるのを真の量地學という。伊能東河先生はこの真の量地學の創始者である。寛政年間に幕命を拝受して以來十七、八年間、全國の海濱と官道はすべて測量した。地図が完成してからは國々の大きさや遠近を指さして識別できるようになった。まことに天地開闢以來の優れた技法と云うべきである。私は先生に随従してきたが、頭が鈍いので測量の要点がよく理解できなかった。そこで耳で聞いたことを忘れないようにメモ書きしておいた。その書き付けに「量地伝習録」と命名して家に保管していた。同志の者がこれを公刊することを請い望んだ。私は再三断ったが、断り切れずに刊行することになり、この序言を述べる。

天保二年夏五月

渡邊慎子言撰文



【註】「渾天如鶏子。天体円如彈丸、地如鶏中黄、孤居於内。天大而地小。天表裏有水。天之包地、猶殼之裏黄。」（渾天は鶏卵のようなものだ。天体は弾丸のように円く、地は鶏卵の中の黄味のようにで内部に孤り居る。天は大きく地は小さい。天の表裏には水が有る。天が地を包む様は卵の殻が卵黄を包むのに似ている。）『渾天儀』張衡（後漢の政治家、天文学者、文学者、他）

## ②【原文】「量地伝習録序」

渡辺啓次郎慎子言誌

量地傳習録序

伊能東河先生地理ノ術ハ天学ノ餘力ナリ寛平ノ頃

帝ヲウケテ蝦夷地東海ノ辺ヲ測量シ國成テ後復日本國中地圖ノ命ニ及ヘリ南ハ隅薩ヨリ北ハ奥羽ニ至リ東ハ兩總ヨリ西ハ肥前五島ノ隅ニ至リ九ノ海アル國至ラズト云フナレシカノミナラズ東海東山ソノ外諸侯入勤往來ノ諸道ヲ計ルテ總テ十七ハヤ道途ニ刻苦シテソノ

オサマル所ノ術イヌク微妙ナリ先生終ニ臨テ吾レヲ戒テ曰天父啓學ハ各其家アリ地理ノ術ニ於ハ未タナリモレ後未吾術ニ志ス者アラハ汝ヨロシクコレヲ傳フヘシト然レモ吾先生ニ隨テ其術ヲ學フイ久シト武臣武臣ヨリ家ニテソノ圖奥ヲ同ハザレバ今記録スル所ノ傳習録此謬ノ責ヲ免レザル事ヲ知ト云

文政甲申孟夏

渡辺啓次郎慎子言誌

【活字】伊能東河先生地理ノ術ハ、天学ノ余力ナリ。寛享ノ頃、

命ヲウケテ蝦夷地東海ノ辺ヲ測量シ、図成テ後、復日本國中地圖ノ命ニ及ヘリ。南ハ隅薩ヨリ北ハ奥羽ニ至リ、東ハ兩總ヨリ西ハ肥前五島ノ隅ニ至リ、凡ソ海アル國、至ラズト云コト無シ。シカノミナラズ東海、東山、ソノ外諸侯入勤往來ノ諸道ヲ計ルコト、總テ十七ハヤ年。道途ニ刻苦シテソノオサマル所ノ術、マスタ微妙ナリ。先生終ニ臨テ吾レヲ戒テ曰、天文曆学ハ各其家アリ。地理ノ術ニ於ハ未タナリ。モシ後來吾術ニ志ス者アラハ、汝ヨロシクコレヲ傳フヘシト。（※註）然レドモ吾、先生ニ隨テソノ術ヲ學フコト久シト雖モ、素ヨリ昏愚ニシテソノ圖奥ヲ同ハザレバ、今記録スル所ノ伝習録此謬ノ責ヲ免レザル事ヲ知ト云。

文政甲申孟夏

渡辺啓次郎慎子言誌

※註 筆写年代の新しい写本は（※註）以降の太字部分を左の文言に作る

然レドモ吾、先生ニ從テ其術ヲ學ブコト久シト雖モ、素ヨリ昏愚ニシテ、其門ニ入レドモ未ダ其奥ヲ同ハザレバ、其習トコロヲ人ニ伝フルコトアタハズ。先生没シテコニコニ七匝。先生常ニ吾ヲ誘クユエンノ意ヲ思テ、潜然トシテ涕襟ヲ沾シ、終焉之命ニ默スルコトヲ得ズ。聊聞スル所ヲ録シテ、以テ其責ヲ塞ト云。

文政甲申孟夏

渡辺啓次郎慎子言誌

【大意】伊能東河先生の地理の術は、天文曆学の余力である。寛政・享和の頃、幕命を受けて蝦夷地や東日本の海辺を測量し、地図完成後、また日本全国の地図作成の命令が下った。南は大隅・薩摩から北は奥羽まで、東は上総・下総から西は肥前五島の端まで、およそ海がある国々にはすべて行った。そのみならず東海道、東山道、そのほか諸侯が参勤交代で往来する諸道を測ること計十七、八年間。道路の測量に苦勞して測量の技術は次第にますます精妙となった。先生は臨終に際し、私にこう言われた。「天文曆学には各流派があるが、測地術の分野にはまだそのようなものがない。もし将来、私の測量術を習得したいと志望する者がいたら、お前がそれを伝授しなさい」と。（※註参照）しかしながら私は先生に随從して測量技術を長い間学んだものの、元来暗愚で学問の奥底を究められなかった。そのため伝習録の記述内容に間違いがあるのは避けられないことと思う。

文政七年四月 渡辺啓次郎 慎子言誌す

※註 筆写年代の新しい写本は（※註）以降の部分を左の文言に作る

しかしながら私は先生に随從して測量技術を長い間学んだが、元来暗愚で入門したもの未だ奥義を極めておらず、習ったことを人に伝授することが出来ない。先生が没して七年になる。先生の常に私を導こうとするお気持ち pensando 私にはひそかに涙を流し、先生の臨終のいにつけに黙することとはできなかった。少しばかり聞きかじったことを書き記してその責任を果たそうと思う。

文政七年四月

渡辺啓次郎 慎子言誌す



間  
繩

問題

門人邊慎子書述

一古ヨリ濃樸管絃竹篴ノ外サマ々ノ間能アレヒ皆子濃  
ニ隨テ各盈縮アリニハニ胡篴タ篴ノ託ハアレヒ其盈縮  
大ニ不同ニレテ折中シ難シ仍テ先生鉄ハリカ子ヲ求メ  
長サ一尺四五寸許ニキリテ末末兩端ヲ鏤ノゴトク凡ク  
造リ其内添長一尺ニ定メ數六ホヲ繫ヤ十間ノ鉄鑢篴  
一同ゴト印ヲ刻シニトスコレヲ用ヒルニ傳水ノ間篴ニ勝リテ魚  
鰭ノ憂モ無ニ似タリサレヒ數十里ノ行程ヲ引ケバ石ニ

毛 筋レテ一本ヅトニ曲折モイデキツギテ入極モ入ハ自  
 ラ相軋テ膏滅無クシバアラズ凡一本ノクサリ河端ニテ  
 四七ノ膏滅アレバ悦長十間ニレテ二分四厘ノ縮トナル  
 且重キ鉄鎖ヲ引ハルトキニハ両端ノ鎖モ自然ニ摺圓ト  
 ナリテ盈縮モコレニ從テ生ズナレバ魚アリテ縮ナクフ  
 レニ依テ度々アラタメテ其平均ヲ用ユレハ害ナシ然レ  
 推算ニ及テ奇零ノ數生テ圓ヲ引ニ至テ毛重ノ差ハ無シ  
 バアラズコレニヨツテ又藤ロレ<sub>ハ</sub>松ロ<sub>ハ</sub>少<sub>シ</sub>數<sub>ニ</sub>救<sub>フ</sub>木ヲ繁<sub>キ</sub>  
 ツナキチハ凡ニ寸程<sub>ノ</sub>入<sub>ル</sub>ハカニ<sub>ハ</sub>コレヨシ<sub>ニ</sub>所<sub>ノ</sub>ハカリ<sub>ニ</sub>雖<sub>モ</sub>  
 テ大テアリキナリ然<sub>レ</sub>ト通シ<sub>テ</sub>間<sub>ノ</sub>ヲラゲルナリ

テコレヲ用ニルニ鉄鎖ヨリ、カルクレテ盈縮モヤク希ニ  
テ曲折磨滅ノ憂モナレ又線ノヒレヲ求メ幅五分徑二挽  
キブリ又數十本ツキ合テコレヲ用ニ朝夕中改ルトモ益  
幅アル一ナレ実ニ正通繩ト云ヘシ又五六寸廻リノ竹ヲ  
求メ長一丈三又二切り、笹竹ノ如クハ二割リ木束五寸宛  
ハレタカニ二繋キ長サハ其ヨロレキニ從ヒテ用シテ  
リ是モ亦正レテ基ヲ使判ナリ

門人渡辺慎子言述

【大意】古来より漆縄、管縄、竹縄、その他様々な間縄があるが、どれも湿度によって伸縮する。ゆえに朝縄・夕縄の説があるが、その伸縮の度合いはそれぞれ大いに異なり、正しい値をとるのは難しい。そこで先生は鉄の針金を長さ一尺四、五寸程に切つて両端を輪のように丸く作り、内法長さ一尺と決めて六十本をつなぎ十間の鉄鎖縄（一間ごとに印を付ける）とした。これは従来のものに比べ、ほとんど伸縮しない優れたものだったが、曲折、（つなぎ部分への）砂入、摩滅を免れなかった。およそ一本の鉄鎖の両端に四毛の摩滅があれば、長さ十間で二分四厘の縮小となる。かつ、重い鎖を引っ張るときに両端の環が自然に楕円形となり、これによって伸縮が生じる。しかし伸びはするが縮みはないので、時々検査してその平均値をとれば害はない。とはいえ、どうしても推算や作図の過程で細かい誤差が生じてしまう。そこで藤蔓（蘭人持渡りのものが良い）数本をつないで（三寸ほど入れ違いにし三ヶ所錐で穴をあけ金引縄を通し固く絡げる）用いると鉄鎖より軽く伸縮も少なく摩滅のおそれもない。また鯨のひれを幅五分ほどに挽き割つて数十本をつき合わせて使うと、朝夕日中と検査しても伸縮がない。実に「正直縄」というべきである。また周圍五、六寸の竹を長さ一丈三尺に切り、箍（たが）竹のように八分割して両端五寸ずつ入れ違いにつなぎ、適当な長さにして使うこともあった。これもまた正確で非常に便利であった。

磁石

一見盤ニ水盤逆盤等ノ器古来ヨリ種々有レトモ要スルニ盤ノ形ノミ長大ニシテ盤針ノ長ク甚短ク其幅最も廣キニハ方面ノ諸路ヲ計ルノ難レ且平地ニチハ或ハ可ナリニモ用ニベケレモ山陵峻嶒ノ地ニチハ盤ヲ居ルヲ易カルニシ從令居ハ得ルトモ平直ナラサレバ其眞ヲ計リ得ルヲ難シ素ヨリ粗キ器ヲ用テ日數ヲ費シ漸ク計リ得ル地圖ヲ引トテ組合ハ覺束ナシヲ、ニ於テ先王古今ヲ考ヘ當者ヲ年シ西洋曆書ノ代器ニ依テ便利精詳ノ諸器ヲ製ス

小方位盤一名秋サキ羅計ト云北ノ先ニ先ニ唇ニ明其形同形  
ニメ僅四寸許リアルカノ製作ニレテ地ノ不口クニ拍ハ  
ラデ自然ト口ヲ取ルモノナリ其斷ニテ其指南針針底  
針ニレテ有底ノ口ヲナサケノ長サ三寸ニ分テ展リトス  
來テ然セシテ有底ノ口ヲナサケノ長サ三寸ニ分テ展リトス  
針サキヨリ又口ニシテニ葉ノ隔チ々盡テ造リソレハ天度  
三百六十ヲモリ一周十二支ニシテ一定三十度ニアタル  
一處ノ有底ハ唇ノ先ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇  
ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇ニ唇  
位逆盤ニテ南ヲ向ニ當テ北ノ見通ヨリ南ノ見通ヲ覆テ

一方ニ自在ニ遊レ遊ム或ハ曉タリ見通ヌテリ其ツテ針  
 ノスワルヲ待テ南方ノ針サキニテ其方角ヲ計ルヘシキ  
 同等ニハ專ラ是ヲ用ユ  
 一  
 大中方位盤本盤北半ニ門形ニテ其心ノ所ヨリ遠日鏡ヲ  
 レカテ遠山ヲ計ルニハ最ツレヲ用ユコレハ半盤ニテ盤  
 ヲ南北ニ合セ日鏡ヲ廻シテ計ヤリ半円盤ハ大中方位  
 分ニ切リタルモノニシテ至テ便利況ニ各處前盤ノ目セ  
 リナリ  
 蓋針ニ依テテ志ムハ世人ノ知ルヲワカリ然レヲ朴



ノ木ハ鉄氣ヲ避ルトテ帯鉄ノヲナニテ用ヒルモノアリ  
コレハ其驗ヲ不知モノナリ羅針ヲ用ヒルトキ鉄トテ  
モ懷ニスベカラズ懷ニスレバ羅針ニ惑テ必差ヒアルモ  
ノナリモシ差ハサル羅針ハフルヒアリテ用ニ忌タザル  
ナリサルニヨリテ帯鉄ハ銅刀カ竹刀カヲ用ニベシサテ  
分同ノトキナリサキ合セ磁イサリヤツトテ鉄針ナドヲ  
持セヘシコレハ羅針ウケ針ノサキマクレテ羅針ノスワ  
リハヤキトナハ一日ニイク度モトギサホスベシトギシ  
項明テ鉄ノ刺レテ試ルヘシ針見オク穴ノトキハ音ノモ  
スモノニテ音ノスルウチハ未ダナリ磁度トギテセサチ  
ラサルトキニハウケ針ヲサキヒベシサキ磁子ヲサヘニシ  
ブミタル見通フハムルトモ目モリノ憂トナサマヌヨフ  
ニスベシガシムガト方違ハ合ヌモノナリ朝タトモニ  
見通フ改メベシ世ニ長崎製ノ羅針ヨロシキトテ遠方ヨ  
リ求シマテ用スルモノナリ其各ヲ見ルニウケ針ヲ長針  
ニテ造シムヘワケテマクレ早シソレヲモ知ラズ用スル  
ニハ真刀ヲ帯テ惑セヌハ理ナリ又早ク居ル羅針ヲ善  
ト称スルモノコレモマタ一同ノ誤ナリ羅針ハ遠ク居リ  
テイツマテ元針ノフルエルヨフニ見エルト最上トス

【大意】磁石（羅針、方位盤、方針とも言う）見盤、本盤、逆盤等の機器は古来より種々あるが、要するに盤の形のみ長大で羅針の長さが非常に短く、幅がきわめて広いので、方角を正確に測るのが困難である。平地では使えるかもしれないが山や坂、陰阻などでは盤を据えるのは難しいだろう。たとえ据えたとしても地面が平らでないと正確な測定はできない。そもそ

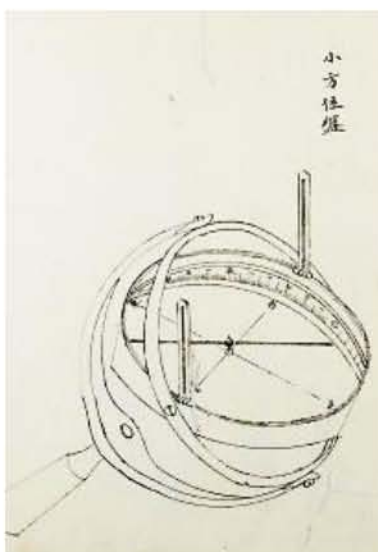
も複雑な機器を用いて日数を費やして測定できたとしても、図面を引く際にきちんと合うかどうか覚束ない。そこで先生は古今の資料を考究し、西洋の暦学書の機器を参考にして便利で正確な諸機器を製作した。

一、小方位盤、別名杖先羅針という。その形は円形で直径四寸ほど。彎窠（回転羅針）作りで地面の凹凸にかかわらず自然に水平を保つものである（真鍮製）。その指南針（朱色が南）の長さ三寸二分を限度とする。針先より少し（二、三厘で可）隔てて台を作り、それへ天度三百六十度の目盛をとる。一周で十二支なので一、二支が三十度にあたる。この小方位儀は逆盤であり、南を向こう側にして北の見通しから南の見通しを貫き、左右へ自在に廻して遠山あるいは梵天を見通すのである。そのまま針の揺れがおさまるのを待つて南方の針先でその方角を計ればよい。測量時には専らこれを用いた。

一、大中方位盤（本名を地平径儀という）も円形でその芯のところから遠眼鏡を仕掛けて遠山を計るのに最もこれを用いる。これは本盤であって、盤を南北に合わせ目鏡を廻して計る。半円盤は大中盤を半分にしたもので、いたって便利でよい。各対角線の目盛である。

羅針に鉄を近づけてはいけないことは、よく知られていることである。しかし朴（ほお）の木は鉄気を避けると言って帯刀のまま羅針を使う者がいるが、それは実際を知らないのだ。羅針を使う際に寸鉄でも懷にあれば、羅針が動いて必ず方角がずれるものである。もしずれない羅針があったら、それはくるいがある羅針であって役に立たない。したがって腰に差す刀は

銅刀か竹刀を用いるべきである。ところで、測量の際には小さい合わせ砥石、ヤスリ、ヤットコ、鋏、針などを携行するとよい。これは羅針の受け針の先がまくれ（めくれ）て羅針の据わりが早いとき、一日に幾度も研ぎ直すのである。研いだら硬い紙を刺して試す。針先がよく尖っているときは、刺しても音がしないものであつて、音がするうちはまだだめである。何度研いでも直らないときは、受け針を換えるべきである。また、ガラス押えに仕込んだ「見通し」を嵌めるときには目盛の台に対して歪ませるようにするといふ。少し歪んでいると方位が合うものだ。朝夕ともに見通しを検査するのがよい。世間では長崎製の羅針が良いと言つて遠方から取り寄せたまま使っている人がいる。その羅針を見ると、受け針を真鍮で作っているのだから「まくれ」が早い。それを知らずに使うのは当然の理である。また、早く静止する羅針を良いという者、これもまた同じ誤りである。羅針はなかなか静止せず、いつまでも針が震えているように見えるのが最上なのだ。

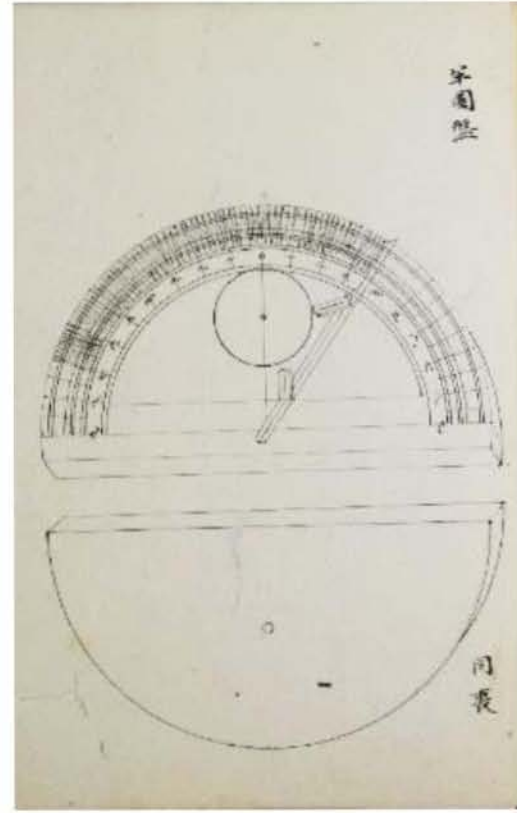


小方位盤



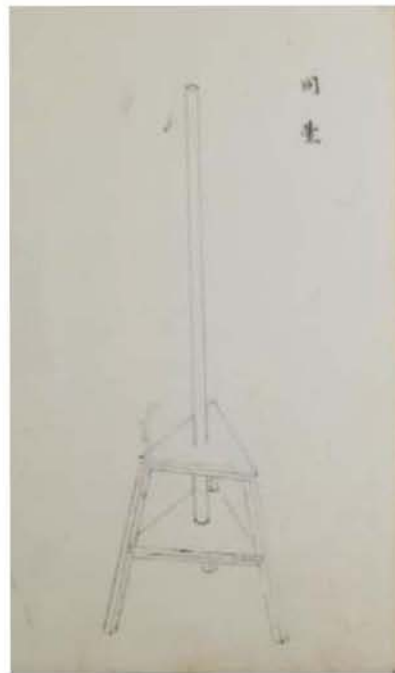


大中方位盤 目モリ半円盤下同

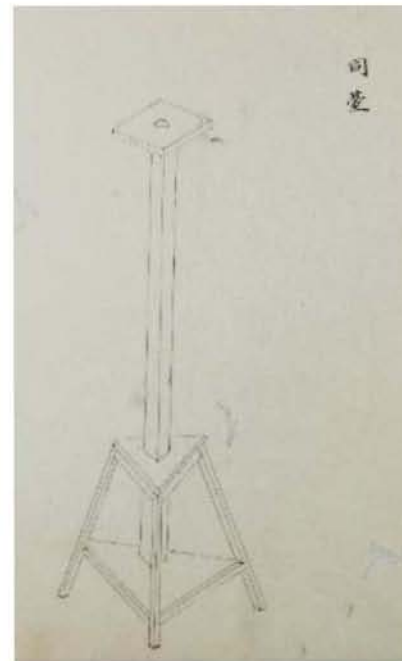


半円盤

同裏



大中方位盤の台



半円盤の台

【参考文献】

- 『伊能忠敬』 大谷亮吉  
 『伊能忠敬の科学的業績』 保柳睦美  
 『伊能図に学ぶ』 土屋巖 東京地学協会編 古今書院  
 『地理学評論』 50・(5) 土屋巖 日本地理学会編 朝倉書店  
 『藪内清著作集』 第三卷 天文学史 臨川書店  
 『中国古代天文学思想の研究』 前原あやの 関西大学



## 平山郡蔵宛て伊能忠敬書状

玉造 功

## 一 はじめに

大正十年に千葉県香取郡役所が刊行した『香取郡誌』には伊能忠敬が平山郡蔵に宛てた書状が二通、平山郡蔵の書状が一通紹介されている。忠敬の書状はいずれも第五次測量の直前の時期のもので、幕府事業となった第五次測量の準備の様子など興味深い内容があるので紹介したい。

この書状は『香取郡誌』では郡蔵の子孫の所蔵としているが、現存するか否かについては不明である。そのため『香取郡誌』という二次史料に依拠せざるを得ない。

『香取郡誌』は大正天皇即位の大典の記念事業として、千葉県下で編纂された十二の郡誌の一つである。全国的にも郡誌編纂事業が進められていた時期にあたる。なお、『香取郡誌』は国会図書館デジタルコレクションや千葉県立図書館の菜の花ライブラリーで公開されている。

『香取郡誌』所収の書状の翻刻は、図1のように句読を切っておらず読みやすいものではないので、淡青色の背景色の部分に訓読し

て紹介するとともに、淡黄色の背景色の部分に大意を示した。

## 一 平山郡蔵宛て書状 その一

利介方へ御状今日相届き、披見致し候。いよいよ御揃ご清安珍重の御事に候。此方異無く、ご安慮給わるべく候。

然らば、貴子取急ぎ御出府、御手伝い成され候様、度々申し遣わし候所、檀林地図仕立て並びに桑原三万図等にて、急に御出府成されかね御差支の段、仰せ遣わされ承知致し候。桑原仕残しは、御出府にても、間に合い申すべく候えども、檀林地図にはお困りなさるべく候。しかしながら、この度の遠国御用は、御銘々弟子へも御手當下され候儀故、御出府御延引にては浅草へ対し甚だ気の毒。浅草高橋公、間氏よりも度々御尋ねに付き、大いに困り入り申し候。さりながら三四ヶ年も相かかり申し候事、檀林地図も御残しなされ兼ね申すべく候はば、昼夜に御片付け成され、是非に当正月二十五、六日迄にも御出府なされるべく候。

下拙佐原下向御暇願ひ、今日中差し出すべく候も、二十日後出立発足と存じ候や。佐原下向仰せ付けられ候はば、早速御地に申し遣わすべく候。

図1 香取郡誌

利介方江御状今日相届致被見候愈御揃清安珍重の御事に候此方無異御安慮可給候然は貴子取急ぎ御出府御手傳被成候様度々申遣候所檀林地圖仕立並に桑原三万圖等にて急に御出府被成兼御差支之段被仰遣致承知候桑原仕残は御出府にても間に合可申候得共檀林地圖には御こまり可被成候

国立国会図書館デジタルコレクション

利介方へ手紙が今日届いたので拝見しました。皆様ますますご健勝とのことお慶び申し上げます。こちらにも変わりなくご安心ください。

さて、貴方様には取急ぎ御出府し御手伝いなされますよう、度々申し上げてきましたが、檀林地図仕立てと、桑原氏から依頼された「三万図」等があり、急には出府できないとのことと承知しました。桑原氏から依頼された仕事の仕残しは、御出府してからでも、間に合うとおもいますが、檀林地図にはお困りのことと思います。しかしながら、この度の遠国御用は、内弟子へも御手当が出来ますので、御出府が延びてしまつては浅草天文方に対し立場が苦しくなります。浅草天文方の高橋景保様や、後見の間重富氏からも度々御尋ねがあり、大いに困っています。そうはいっても今回の測量は三四ヶ年もかかることですので、檀林地図も残したままに出来ないのであれば、昼夜に御片付け成され、是非にこの正月二十五、六日迄にも御出府なさってください。

私も佐原へ下向する御暇願ひを今日中に提出しますが、二十日以降の出立になると思っています。佐原下向が許可されれば、早速御地南中村に連絡します。

※一通目の書状は、江戸の忠敬から香取郡南中村の郷里に帰っている郡蔵に宛てたものである。

※平山郡蔵が作成していた「檀林地図」とは香取郡多古町の日蓮宗の古刹日本寺に開かれた中村檀林の地図ということであろう。中村檀林は日蓮宗の関東三大檀林の一つで



最盛期には千人近い学僧がいたといわれる。大谷亮吉は『伊能忠敬』七五五頁に日本寺の境内実測図が平山家に現存していると記している。ただし現存してるかどうかは不明である。

※「桑原三万図」は不詳。時期的には文化元年八月に「日本東半部沿海地図」を上呈したのちに、桑原隆朝が郡蔵に作成を依頼した地図ということになる。桑原を通して依頼する人物としては若年寄堀田正敦の可能性が高い。

国立国会図書館蔵の「伊能日本実測小図一」は堀田正敦の旧蔵、文化元年上呈小図の副本である。「三万図」が「三分図」の誤記誤読ということであれば、一里を三分に縮尺した小図となり平仄が合うのであるが、原文書で確認できないのが残念である。

※内弟子への手当については、大谷亮吉によると、高橋景保御用日記に一ヶ月に付き金二両三分との記載があるという。

※この書状においても、西国・四国・九州・壱岐・対馬迄の西国筋一円海辺測量を「三四ヶ年も相かかり」と見積もっていたことが分る。実際に西国測量を終えたのは九年後の文化十一年のことであった。

※幕臣は公用や墓参などを除いて外泊は出来なかったもので、前年九月に御家人に登用された忠敬は佐原に帰るにあたって「御暇願」を申請する必要があった。

一、権兵衛と旧冬より申し込み候今一人右両人の儀は先日申し遣わし候佐原儀助などの儀も御座候間、今日の儀には申し遣わしかね候。先ずは当てにならぬものと思し召され候。それとも自分協合いの内にて入用も候はば、近々申し遣わすべく候。

一、道中発足の儀は来二月二十二日頃と存じ候。当春は三四ヶ年長測量の出府に候え、出立前混雑にこれ無きように致し置き候。出立前五日ばかりは何にもせぬ様に静かに致し、出立申したく候。これにより少々も早く御出府、測器御差図、測量などの仲間打合せも致し申したく候。

一、村松町一件につき手少、支度にも差支え申すべくにつき、御母堂様御上せくだされべく候由、大いに忝く存じ候。もはや縫女一兩人相頼み、その外白木屋にて仕立て申すべく候あいだ、どうか間に合わせ申すべく候。御安意下さるべく候。御深志御母堂様に宜しく頼み入り奉り候。

一、権兵衛と旧冬から申し込んでいる今一人の二人のことは、先日もお伝えした佐原の儀助などのこともあるので、今日のところははっきりとは言えません。先ずは当てにならぬものと思つて下さい。それとも自分のほかに雇うことがあれば、近々連絡します。

一、測量の出発は来二月二十二日頃と思つています。当春は三四ヶ年の長期間の測量のための出府なので、出発前に混乱しないよ

うにしておきます。出発前の五日ばかりは何もしないで静かにして出発したい。このため少しでも早く御出府なされ、測量器具の指示、測量隊員などとの打合せもしたいと思ひます。

一、村松町一件のため人手が足らず、支度にも差支えがあるところ、御母堂様が上京なされるとのこと、大いにかたじけなく存じます。もはや裁縫する女性を一人二人頼み、その外に白木屋で仕立て、なんとか間に合わせたいと思ひます。御安心下さい。御深志御母堂様に宜しくお頼み申し上げます。

※第五次測量は内弟子と天文方下役との混成であるだけに、「測器御差図、測量などの仲間打合せ」など、経験豊富な内弟子リーダーの郡蔵にかかる期待は大きい。

※「村松町一件」は不詳。「小網町一件」であれば、測量の準備を支えてくれたはずの盛右衛門・稲夫婦を勘当したことを意味するのであるが。

「手少、支度にも差支え」という文面から、文化八年十二月十七日付の妙薫宛の書状で、忠敬が「朝暮之丹誠、旅支度ノ心配」について繰返し感謝し、「此度ハ衣服も十分」と書き送っていることが想起される。

※忠敬の嫡孫の忠誨が文政六年四月十日の日記に「白木屋は先祖より永々取引いたし候」と記しているように、伊能家は呉服商の白木屋の得意先であった。



正月十六日

## 勘解由

尚々 大作儀承知、其の代りは佐原儀助と存じ候。これも今一応かけ合ひ下されるべく候。何れにも、絵図急に御急ぎ御片付け、一日も早く御出府、何角御世話成されるべく候。御延引相成り候ほど、浅草に対し、大いに氣に相成り候。以上

一、寛平・伊兵衛兩人について、こちらから連絡し次第出府させるとのこと、承知しました。今日、佐原村の横川岸に在住の伊能七左衛門帶刀と中宿に在住の伊能平右衛門道喜が出府したので相談したところ、佐原に下向するにあたっては、利介の外に荷物運びの人足として二三人を江戸で雇い入れ、木下河岸で佐原からの者と合流し、そこから舟で佐原へ下り、小野川の川口から迎えの人足と呼ぶことになりました。佐原

正月十六日

## 勘解由

尚々 大作のことは承知しました。その代りは佐原儀助とします。これも今一応掛け合ってください。何れにしても地図作りを急いで片付け、一日も早く出府して、なにかと測量隊の準備の世話をして下さい。遅れるほど、浅草厩局に対し、大いに心配になります。以上

※ 小坂寛平は多古藩領民。内弟子扱いで第五次測量に参加した。測量日記によると測量業務とともに荷物宰領も担当している。第五次測量から帰府後に郡蔵とともに破門された。

※ 佐藤伊兵衛は第五次測量当初は下僕であったが、供侍の門谷清次郎が市野金助と共に大坂から江戸に帰ってからは供侍として測量を手伝った。測量日記ではそれまでの「伊兵衛」から「佐藤」に表記が変わる。

※ 忠敬の佐原下向のルートは図2のように江戸から行徳船で小名木川・新川を行徳へ、行徳河岸で上陸し木下街道を木下へ、木下



河岸から木下茶船で佐原へ向うものであり、江戸と佐原を結ぶ最短時間の経路となる。

※『香取郡誌』ではこの書状を「文化元年正月十六日付」としているのは誤りで、第五次測量直前の文化二年正月十六日付の書状である。



## 二 平山郡蔵宛て書状 その二

一筆啓上致し候。いよいよ御堅固成されるべく御座珍重に存じ候。我等異無く、二十三日朝四ツ時當着、昼後より牧野・寺宿廟参致し、二十四日、本宿・新宿諸親類知音相回り、天王・諏訪参詣。二十五日香取参詣、津宮へ相回り候。二十六日南中村へ罷越し、暮合に帰宅致し候。中村表御母堂様には、二十四日に佐原に御越し、二十五日御帰家に御座候。白升・吉田兩人、二十六日に中村へ罷り出で候様申し合わせ、昨日中村へ罷り越し、承合い候ところ、白升は親元遠国不承知につき変替に相成り候。吉田は人柄・手跡など一覽致し候。是は出府に御談し、その上にて、何れとも勘弁致すべき趣き申し残し候。

一、佐原にも弟子侍い、中にても、相望み候ものもこれ有り候。是は篤と相糺し、追つて出府に御申し申すべく候。

一筆啓上致します。いよいよ御健勝のことと存じます。私も変わりありません。二十三日朝四ツ時に佐原につき、昼後から牧野村の観福寺と寺宿の浄国寺に墓参し、二十四日には本宿と新宿の親類や知人を挨拶まわりし、天王社と諏訪社に参詣しました。二十五日には香取神宮へ参詣し、津宮村へ廻りました。二十六日には南中村の平山家へ出かけ、夕暮れ時に佐原に帰宅しました。南中村の御母堂様には、二十四日に佐原に御越しいただき、二十五日に御帰りになされました。

白升・吉田の兩人については、二十六日に

南中村へ来るように申し合わせました。昨日南中村へ来たので話を詰めたところ、白升は親元が遠国に出かけることを承知しないので変更となりました。吉田については人柄や文字の書きぶりなどを一通り確認しました。吉田については出府してから相談し、その上で採否を判断するといっておきました。

一、佐原にも弟子がおり、その中にも測量隊に参加希望の者もいます。これについてもよく吟味し、追って出府したときにお話しします。

※二通目の書状は、佐原に戻った忠敬から江戸に出府した郡蔵、忠敬の庶子秀蔵、伊能家の帳元締めであり裏方として測量隊を支えた大川治兵衛の三名に宛てたものである。

※「牧野」は図3の牧野村の①観福寺のこと、伊能三郎右衛門家の菩提寺である。

※「寺宿」は図3の②の日蓮宗の浄国寺のこと、忠敬の妻ミチの母タミの墓がある。

※「天王」は図3の③の牛頭天王社のことで、小野川東側の本宿の鎮守であり、現在の八坂神社である。

※「諏訪」は図3の④の諏訪大明神のこと。諏訪神社は小野川西側の新宿の鎮守である。

※津宮村には友人の久保木清淵が住む。

図4 佐原と南中村の位置関係





一、鎖縄四通り御仕立て成され候様、先日申し遣わし候。鎖の○は大きい方が、折り候にも引き候にも宜し候様に覚え申し候。弥三郎方諸器、二十日頃迄に出来候様御心添え成されるべく候。

ネジ道具も仕立て候様、又は御手練の様になさるべく候。四丁の杖先羅鍼出来候はば、駒形みの屋にて硝子一面に二枚ずつすりこませ申し候様になさるべく候。その外、長持ち両がけ、象限儀入り明ヶ荷など御三人仰せ合せられ、早く出来候様、合羽トウユなども御仕立てなさるべく候。我等合羽は大いに短く覚え申し候。十分に長く、秀蔵仕様よりも二寸も長く仰せ付けらるべく候。

一、鎖縄を四通り作製するように、先日指示しました。鎖の○は大きい方が、折っても引いても良いように思います。大野弥三郎が作製する測量器具は二十日頃までに出来るよう注意して下さい。ネジ道具も作製し、又熟練するようにして下さい。四丁の杖先羅鍼が出来上がったら、駒形的美濃屋でガラスを一面に二枚ずつすりこませるようにして下さい。その外、長持ち両がけや象限儀を入れる明荷など、御三人で御相談して早く出来るようにして下さい。桐油合羽なども仕立てておいて下さい。私の合羽は大いに短く感じます。十分に長く、秀蔵の仕様よりも二寸も長くさせてください。

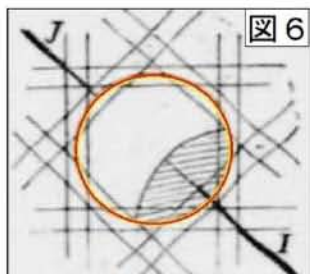
※第五次測量から幕府の事業になったとはいえ、測量器具の作成から長持ちや明荷にいたるまで、経験豊富な忠敬側の主導で準備されたことがわかる。

※「ネジ道具」は不詳。忠敬の測量器具の中でネジによる調整が大きな役割を果たすのは図5の測蝕定分儀である。日食や月食を観測する際に望遠鏡の接眼部に装着した。

図5  
千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵



図6のように、中央に太陽や月が位置するようにし、ネジを回して2本の針の位置を調整し、日食などの満ち欠けの様子を確認した。



大谷亮吉『伊能忠敬』に加筆

※「駒形みの屋」は浅草駒形町的美濃屋平六という御眼鏡所のことであろう。文政七年に刊行された『江戸買物独案内』には図7のように掲載されており、輸入品を扱っている。

図7『江戸買物独案内』



国立国会図書館デジタルコレクション

※「合羽トウユ」は和紙に桐油を引いた油紙を使って仕立てた合羽で、防水性が高い。

図8 『人倫訓蒙図彙』から合羽師



国立国会図書館デジタルコレクション



一、寛平・伊兵衛給金の儀、三ヶ年分借用申し候趣き、かねて御相談なされ候由、御袋様・御伯母様御漸に御座候。内弟子奉公人は一ヶ年に致し、暮れに佐原より相渡し候様にと存じ候えども、貴殿右の趣き、抛ん所なく御かけ合ひの様に承り候。左候えは、是は貴子の御引請けものに御座候。さて貴子・秀藏その外とも、浅草より一ヶ年ずつ相渡し候様に仰せ付けられ候。御承知に存じ候えども、念のため申し進め候。然しながら、一ヶ年の御當の外、少々の儀、また致したくもこれ有るべく候。これ出府の上、御漸申し入るべく候。

一、御母堂様、来月十日頃、飛脚と御一同に御出府の積りに御座候。御母堂様御出府に候えば、貴子御立ち帰り及ばず候筋につき、あらかた御相談取極め申し候。これも貴面に申し聞くべく候。

一、我等出立の儀、天気なれば二十九日出立、不天気なれば朔日未明立ちに相なり申し候。何れ二日暮れ合い着の都合に御座候。なお貴面に申し入るべく候。以上

正月二十七日

勘解由

平山藤右衛門殿

伊能秀藏殿

大川治兵衛殿

猶よし女へも宜しく

一、寛平と伊兵衛の給金については、三ヶ年分前払いということかねて御相談なされたと御袋様や御伯母様のお話にありました。内弟子や奉公人は一ヶ年分前払いにし、暮れに佐原より渡したいと考えていました。あなたが三ヶ年分前払いをやむを得ず取決めたとうかがいました。そういうことで、寛平と伊兵衛はあなたが身元保証人となります。

さてあなたと秀藏その外のものも、浅草暦局からは給金は一ヶ年ずつ渡すといわれています。御承知のこととは思いますが念のため申し添えます。然しながら、一ヶ年の給金の外にも少々支給したいと思えます。このことは出府の上、御相談します。

一、御母堂様は来月十日頃に飛脚と御一緒に御出府のおつもりです。御母堂様が御出府になればあなたは南中村に立ち帰るには及ばなくなるので、あらかた御相談し取決めます。これもお目にかかってお話しします。

一、私の出発は、天気であれば二十九日出発、天気が悪ければ一日の未明に出発することになります。どちらにしても、二日の暮れに江戸に到着する状況です。お目にかかってお話ししましょう。以上

正月二十七日

勘解由

平山藤右衛門殿

伊能秀藏殿

大川治兵衛殿

猶、よし女へも宜しく

※ 第五次測量の仲間奉公人の給金について

は、早稲田大学図書館所蔵の大川治兵衛宛の伊能忠敬書簡（文化四年六月十一日付）にも記されている。この書状では第六次四国測量に向けて仲間奉公人の採用と給金について協議している。その前提として第五次測量の給金が次のように示されている。去る丑年（文化二年）の南中村の仲間三人の給金は一ヶ年金三両、支度金一両二分、

わらじ・煙草代合せて四両二分であった。第六次測量ではそれ以外に日々の働きぶりによっては月々少々でも褒美を出したいとしている。さらに支払方法について、給金の前貸しは少なくし、江戸風にしたいと述べている。

この『香取郡誌』所収の書状によると、忠敬としては浅草暦局と同様に一年分ずつ前渡しするつもりであったが、結果として郡蔵が南中村で集めた三人の仲間奉公人については三ヶ年分前払いとなってしまった。それを踏まえて、第六次測量では江戸風つまり浅草暦局と同様にしたいというのである。

早稲田大学図書館所蔵の大川治兵衛宛書簡は早稲田大学図書館のHPの古典籍総合データベースで公開されている。『伊能忠敬未公開書簡集』に全文が翻刻され、『会報』三六号の安藤由紀子「大川治兵衛宛文化四年六月十一日付け書簡X5」に関係部分の写真、翻刻、訳文が紹介されている。

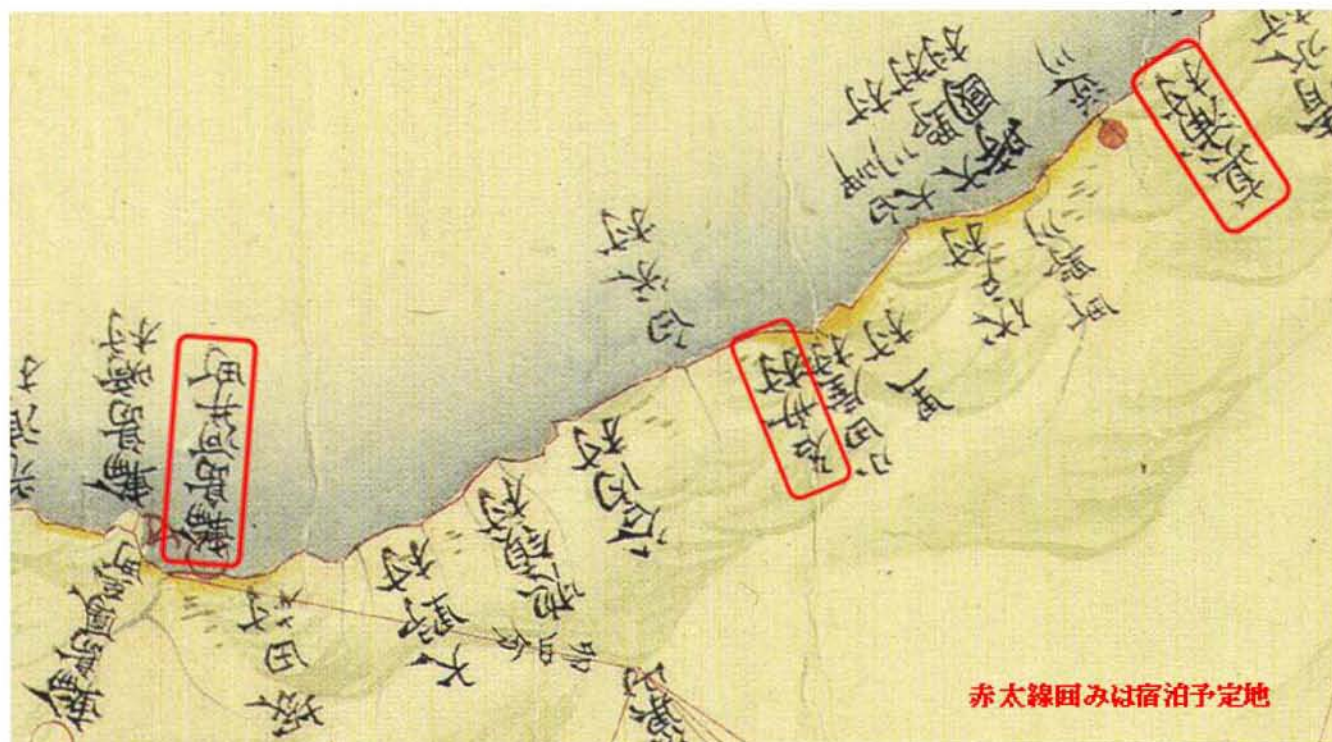
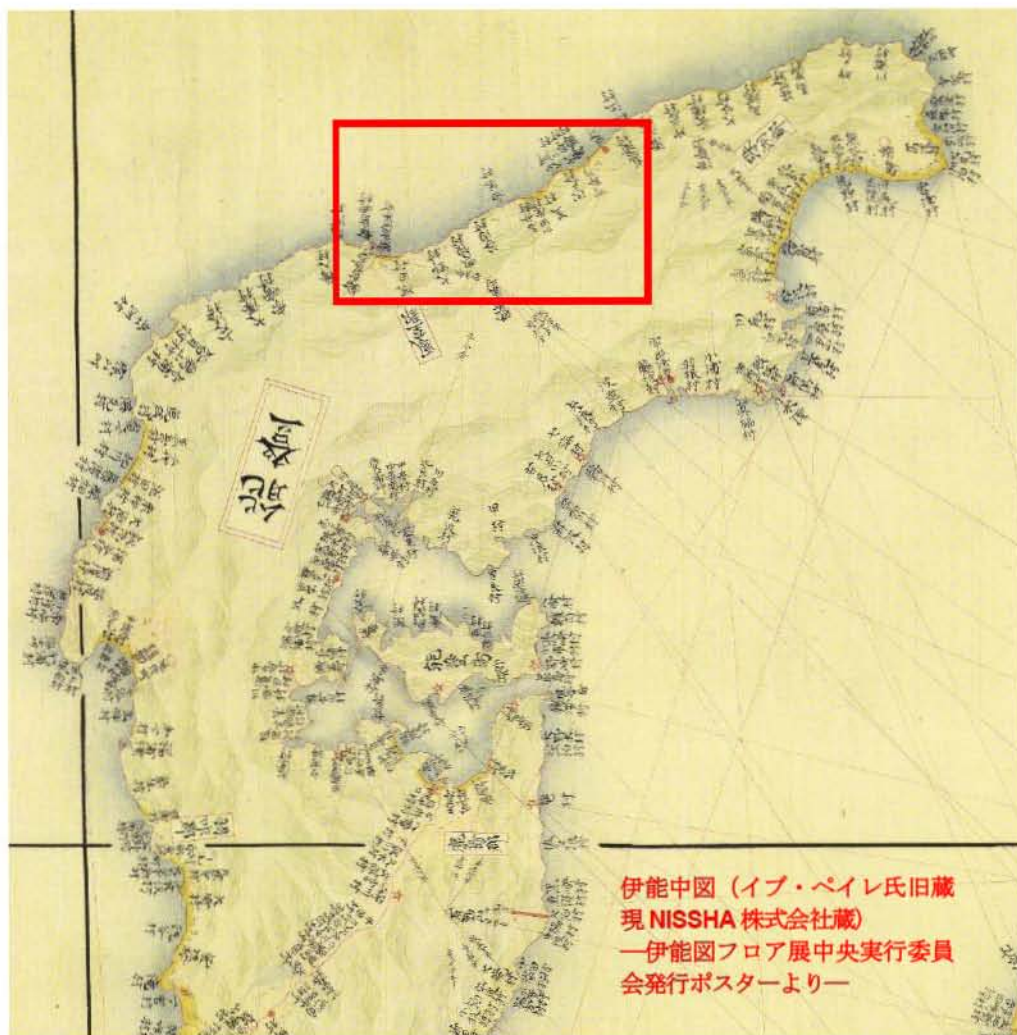


# 史料紹介「天文方御役人巡行巻 稲舟様方御触留帳」

奥能登に測量隊を迎えるにあたって八度の御触を出した十村

河崎 倫代

石川県輪島市鳳至町住吉神社の「住吉神社文書」の中に、伊能忠敬測量隊に関する文書が十点ある。今回はその中の「天文方御役人巡行巻 稲舟様方御触留帳」を紹介し、「幕府御用」測量隊を迎える直前の緊迫した様子を追ってみた。





享和三年

天文方御役人御巡行巻  
稲舟様方御触留帳

亥七月 鳳至町仮役所

一度めの御触

天文方御役人今浜二而御手分ケ有之、外浦江者  
平山郡藏殿等三人巡行、弥当十日釵地泊り之旨  
申来候間、休泊り所用意方之義、先達而申渡候  
通り、夫々指支不申様可被相心得候、尚更聞合  
之者指遣置候間、罷歸り次第夫々可申渡候、

一、道案内役人并先払・測量手伝人足・荷物人足  
等別紙帳面之相廻候間、日限相決シ次第、休泊  
り所江相詰可被申候、尤人足之義、髪・月代等  
不見苦様ニ支度致相出候様、可被申渡候、

一、輪嶋大川尻仮橋弥入用之旨申来候間、夫々致  
手当可被申候、

一、輪嶋・名舟二而駕籠曳挺・馬曳足用意可被致  
置候、是ハ決而入用与申二而者無之候得共、為貯  
用可被拵置候、

一、輪嶋崎・名舟二而舟三艘宛、外てんま式艘宛  
用意致可被置候、多分渚通之様子ニ相聞候間、  
輪嶋崎・鴨浦并大野方白米迄渚通之道形等輕ク  
手入可有之候、捍立拵申二不申候、

一、村役人布羽織と申談候得共、口郡塵浜村役人

絹羽織・袴・半股立を取、足中二而出迎候旨、聞  
合之者方申送り候間、其用意可有之、尚更前宿  
之様子追而可申渡候、

一、休泊所宿為見分手代指出候間、用意出来次第

案内可有之候、

右之通被得其意、夫々指支不申様可被相心得候、  
尚追々可申渡候、披見之後早々相廻シ落着方可  
被相返候、以上、

亥七月九日

笠原藤太

輪嶋崎・鳳至・河井・塚田・久手川・稲舟・大  
野・惣領・谷内・白米・のた・名舟・尊利地・  
小田屋・里・浪田

右村々肝煎・組合頭中

天文方伊能勘解由殿御越之節手配

一、先払

河井町 喜助

但輪嶋御泊り方真浦迄相勤可申事

一、道案内役人

河井町肝煎 弥三郎

同断

谷内村肝煎 与三右衛門

但輪嶋方惣領村迄

道案内役人

鳳至町組合頭 佐次兵衛

輪嶋崎村組合頭 四郎兵衛

但惣領村方名舟村迄

里村肝煎 勘右衛門

浪田村肝煎 甚四郎

但名舟村方大川村迄

測量手伝人足

西脇村 理右衛門

河井町 市兵衛

鳳至町 惣次郎

同 町 平右衛門

輪嶋崎村 伝藏

惣領村 九郎右衛門

六人

(追筆)

「平右衛門儀、惣領村方相帰ル、  
替り人孫八郎俵、名舟迄行、」

(追筆)

「伊せや源七

善右衛門内三太

林屋七郎右衛門

鳳至町八人

内、七郎右衛門・宗次郎、真浦迄行、

残り六人、名舟村方相帰ル、」

(追筆)

「追懸増し人 立野や久次郎

はなノ次助

下ノ伝九郎」

但輪嶋方名舟村迄

測量手伝人足

西脇村 理右衛門

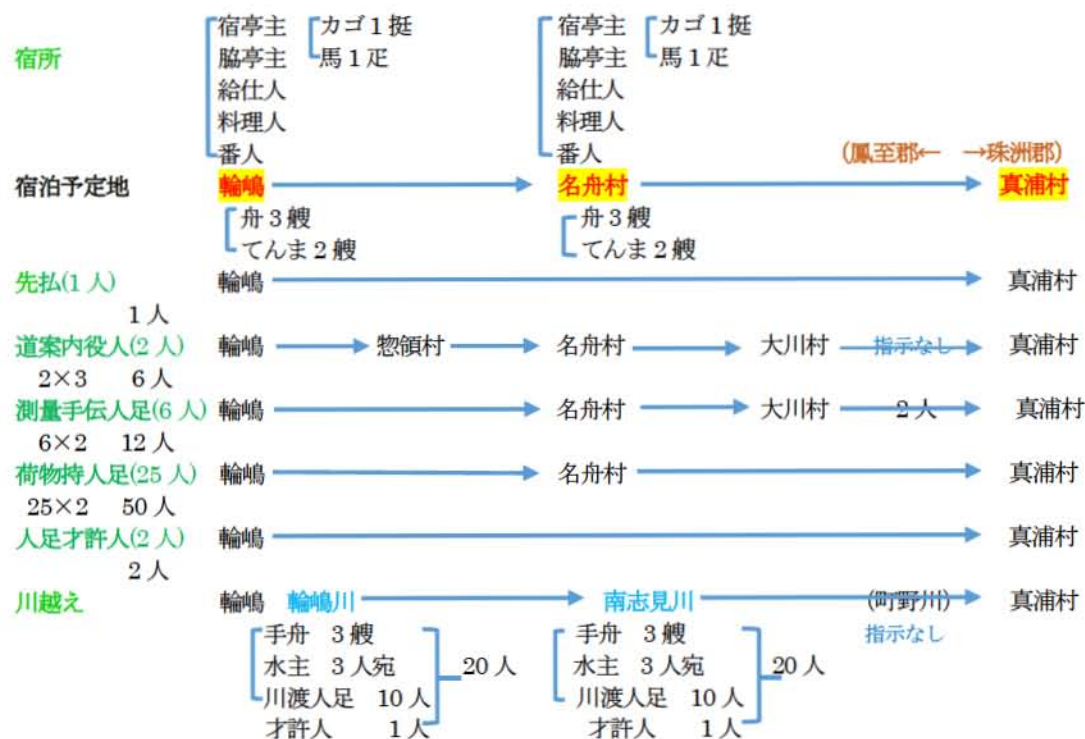
谷内村 与兵衛

名舟村 清四郎

小田屋村 長次郎



※「稲舟様へ御触留帳」に指示された手配人足等を表にした。大川村へ真浦村の道案内役人・測量手伝人足の手配と町野川の手舟等の手配がな  
い。大川村までが加賀藩領、時国村は幕府御預地だった。ただし、測量  
手伝人足は2人出している。町野川は奥能登で最大の流域面積・長さを  
誇る川であり、『測量日記』にも、「能州一ノ川」と記されている。



さと村 与兵衛  
名舟村 十三郎  
六人  
但名舟村方大川村迄、

測量道具持人足  
一、三人 鳳至町  
但輪嶋方名舟村迄、  
一、三人 里村  
但名舟村方真浦村迄、

輪嶋方名舟迄相勤可申事  
輪嶋詰荷物持人足  
一、四人 惣領村  
一、四人 大野村  
一、三人 稲舟村  
一、四人 久手川村  
一、貳人 塚田村  
一、八人 鳳至町  
貳拾五人

内、  
拾七八人斗御役人御入用、但駕籠入用之  
節者惣領村之人足を用也可申事、残り分  
貯用、  
右人足才許人 塚田村 次郎左衛門  
大野村 宗左衛門  
名舟方真浦迄相勤可申事、

名舟詰荷物持人足

- 一、六人
- 一、三人
- 一、四人
- 一、四人
- 一、四人
- 一、四人
- 武拾五人

内、

十七八人斗御役人御入用、但かこ入用之節八小田屋村之人足ヲ出可申事、残り分貯用、

右人足才許人

小田屋村 長兵衛  
 尊利地村 次郎兵衛伴

小田屋村  
 里村  
 渋田村  
 尊利地村  
 白米村  
 谷内村

〔解説①〕「稲舟様」とは、鳳至郡の十村（大庄屋）笠原家のことで、稲舟村（輪島市稲舟町）に居を構えて、代々「藤太」と称した。石川県支部で数年前に跡地を訪れたが、かつての屋敷跡は藪となっていた。

羽咋郡塵浜辺りまで測量隊の様子を問い合わせ、先払・道案内役・人足・カゴ・馬等の手配、宿所の準備を進めさせていたことが分かる史料である。







※笠原家墓地には立派な墓石が立ち並んでいたが、二〇〇七年三月の能登半島地震で倒壊し、その後復元されることなく、草に埋もれていた。

### 是より二度めの御触

測量御用口郡聞合并馬組取扱方之儀、廻文有之ニ付左ニ記候事、

一、川之仮橋之様子身請候所、鉄くさり引申通筋ニ懸不申候而者相弁シ不申、左候得者都而不手廻之様ニ見請候ニ付、釧地川・阿岸川者残り候故、仮橋懸不申段、膝江懸り申川筋者舟橋と而申事といはし候者可然段申来候、

但輪嶋川・南志見川共舟二而も可然哉、勘弁可有之候、

一、手舟三艘、石碇式つ宛、慥成水主三人宛、

才許人 輪嶋崎村 藤兵衛  
名舟村 甚九郎

但布羽織着用、

一、惣而岩石等二而山道と申義者相弁シ不申、往来難成所者舟二而鉄くさりを引申様子ニ候、

一、口郡二而者何茂相尋申儀無之、見当ニ可成高山并村名者村毎相尋申由ニ候、

一、御通筋村毎役人相出し不申、村中締り可仕事一、先払

但脚半・甲懸、杖を持、道案内役人方四五拾

間斗先ニ立、旅人等不作法無之様除置可申事、道案内役人

但装束等、先達而之通、脇指帶可申事、

一、泊り・昼村役人

但先達而之通り、

一、宿亭主

但右同断、半股立・足中二而迎送共先ニ立可申事、

脇亭主

一、脇亭主

但惟子袴二而物毎相弁、慥成者相立可申事、

一、給仕人袴

一、御宿床ニ刀懸

一、かいげ新出来

一、泊所宿始終夜高灯燈

一、宿隣家店屏風囲・番人、先達而之通り、

御通り之節者、前江出、平伏可仕事、夜中高灯燈

老張、不寝之番可仕事、

一、宿駕籠式挺用意、馬者入用無之事

一、川渡人足拾人斗

但才許人老人、布羽織・脚半・甲懸・脇指帶可申事、

一、測量手伝人足之儀、舟二而通路之所者舟二為乗置可申事

一、米相場白米老升二付六拾文

一、金六拾三匁四分

一、錢拾貫五百文

一、口郡直段、

但釧地二而者米相場前宿直段方者老文通り高下可仕旨申来候、

一、御宿式台前盛砂可仕事

一、御宿近辺空地之儀、平山郡蔵殿手合二而八入用無之事

一、御預地足輕宿、老軒人数三人

塵浜献立

五日夕

向 指身(ぼら・白藻・より天・辛子酢)

汁 すまし(巻きす・ミやうかの子)

平(玉子・あんかけ・わさび)

焼物(一塩鯛) 御飯 香之物

同 夜食八寸二

平(かき貝じぶ・山椒之粉) 小皿(鰯付やき)

御めし 香之物

後席 西瓜

但式ふ□□ 如此

六日朝

向 指身(けし酢・伊勢鯉・三嶋のり・ひしき) 汁(かき貝・青柚・大こんおろし)

平(かまほこ・くわい・京麴) 焼物(鰯筒切)

香之もの

以上、

右者、釧地村理助口郡二而見聞之事、右之通り申来候間、夫々用意可有之候、尚前宿聞合帰り次第可申渡候、披見之後早々相廻シ落着可被相返候、以上、

七月十日

笠原藤太



輪嶋崎・鳳至・河井・塚田・いな舟・大の・惣領・谷内・白米・名舟・小田屋・里・洪田  
右村々肝煎・組合頭中

七月六日 大念寺新村泊り

同 七日 福浦

同 八日 富木

同 九日 笹波

同 十日 釧地江御移之図

右之通り申来候得共、七日・八日之雨天ニ而逗留難斗由、雨天或者海荒ニ而手舟立不申節者、逗留有之由、

同 十一日 道下

同 十二日 皆月

同 十三日 赤崎

同 十四日 輪嶋

同 十五日 名舟

右之通り二候、日限延ちみ追而可申渡事、

〔解説②〕鉄くさりを曳いて沿岸を測量するので、

特に川越えに配慮している。服装や宿のしつらえ、献立などは口郡（ここでは羽咋郡）からの情報を参考にし、支隊なので天文測量用の空き地は不要としている。また、宿泊にかかる米の相場や金銭の相場にも触れている。

### 三度めの御触

測量方御役人、今十日釧地昼、黒嶋泊二相成、一日ぢ々まり申旨申来候間、夫々用意方指支不

申様可被相心得候、以上、

七月十日 笠原藤太

河井・鳳至・惣領・名舟

右村々肝煎・組合頭中

追而通筋村方江者最寄々を以可被申伝候、以上、

〔解説③〕測量の進展で、十日釧地泊の予定が縮まり黒嶋村泊になった。差支えないように用意を。

### 四度めの御触

覚

一、明十一日黒嶋村出立、海辺通り致測量致し、左之泊り順ニ罷越候条、浦付之村々案内致し、御用指支無之様、且宿用意可給候、以上、

伊能勘解由門人 平山郡蔵 印

七月十日 黒嶋村方

七月十一日 泊り皆月村

同 十二日 泊り赤崎村

同 十三日 泊り輪嶋湊

右村々御役人中

追而申入候、右海辺通難処之義ニ候得ハ、大風雨之節測量相成兼候間、及滞留、天気次第出立いたし候、以上、

〔解説④〕支隊の平山郡蔵からの泊触である。予定より一日ずつ早まっている。

### 五度めの御触

覚

一、式つ とうひん

但式升入位茶入テ、

一、五つ 茶碗

一、壺つ 茶づき

外二、

一、三枚

うすまくり

右、明後十四日、天文方御役人中輪嶋出立、名舟迄御越被成候道中入用ニ候間、慥成人足ニ為持、右御役人之少し跡方付添参候様ニ可被致用意候、以上、

七月十二日

鳳至町組合頭中 笠原藤太

鳳至町組合頭中

〔解説⑤〕現在の八月下旬の屋外作業なので、お茶と敷物を用意させた。

### 六度めの御触

天文方御役人只今御昼所鵜入村江着候様子ニ候間、立見遣置可被申候、尤今之内御越ニ候間、鵜入江立見可被遣候、少も油断有之間敷候、以上、

七月十三日

笠原藤太 両町肝煎・組合頭中

〔解説⑥〕測量隊は、輪嶋の手前、鵜入村に到着したようなので、立見を遣わし、油断なきように。

### 七度めの御触

申談御用有之候間、此状着次第早速拙子旅宿迄可



被罷出候、披見後可被相返候、以上、

七月十三日

稲舟 藤太

鳳至・輪嶋湊

右村々肝煎・組合頭中

追而両所共組合頭之内老人可被罷出候、以上、

〔解説⑦〕 申し伝えたいことがあるので、この書状

受け取り次第すぐに、私の宿所まで来るように。  
笠原藤太の宿所、伝えたい内容は不明である。

加賀藩は「百姓身分」の伊能忠敏に対しては

「軽き扱い」で良しとして、藩士はもちろん十  
村も挨拶に出さなかった。しかし、十村たちは  
宿所に入りして、自ら測量隊の言動を掌握し、  
案内役の村役人たちに細かい指図を出していた。

〔八度めの御触〕

天文方御役人弥明十五日朝七時半輪嶋町御出立  
候間、兼而申渡置候通り、夫々懸り合之人々輪  
嶋町止宿角太兵衛方迄、無油断為相揃可被申候、  
一、先達而申渡置候役付之人々、是又七時半為揃  
可被申候、披見之後先々急速相廻シ留可被相返  
候、

七月十四日申刻

稲舟村 藤太

塚田・河井・鳳至・海士・輪嶋崎

右村々肝煎・組合頭中

追而輪嶋崎江申入候手舟用意可有之候、兼而申  
渡し置候通り、少も油断有之間敷候、以上、

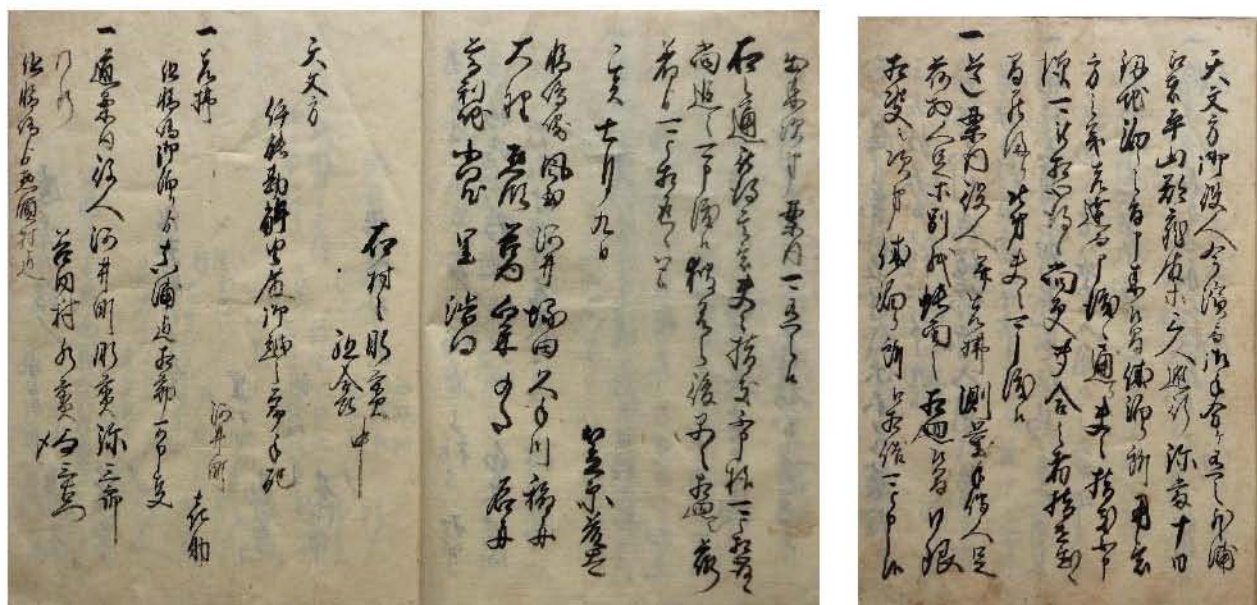
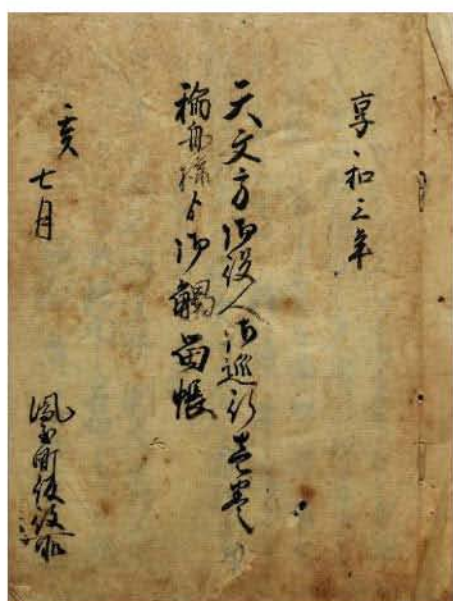
〔解説⑧〕 いよいよ明十五日七時半（五時頃）、測量

隊は輪嶋を出立するので、係りは止宿先の角太

兵衛方に出揃うように。先達で申し渡した役  
付きの人々も七時半に揃うこと。少しも油断  
があつてはならない。

おわりに

今回の史料は、『加能史料研究』5号（一九九  
三年）に紹介したのだが、改めて人足の手配状  
況などを分析してみた。輪島市河井町から珠洲  
市真浦町までおよそ二〇キロメートル、丸二日  
間の測量に、延べ九〇人が配置された。「貯用」  
人足や手舟の用意など、実際は使用されなかつ  
たものもあった。しかし、十村は手落ちがない  
ように万全の準備をし、何度も何度も御触を出  
して「油断なきように」と念押ししている。残  
念なのは、測量後の報告書がないことである。  
あんなに緊迫して準備したからには、測量作業  
は万事スムーズに進行し、引き継ぎの真浦村で  
は若干の感謝の言葉もいただいたと思いたい。



「天文方御役人御巡行巻 稲舟様方御触留帳(部分)」(輪島市住吉神社文書 撮影：室山孝氏)



## 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十二回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第八次測量】（九州第二次）久留米・島原 自 文化9年10月10日 至 文化9年11月10日

11 *				10 *				宿泊日・旧暦 文化9年10月	宿泊地 (西暦) (1812)	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
止宿中食 【支隊】				【支隊】昼休 【支隊】									
福嶋村宮野町				上野町									
同 八女市				同 久留米市									
大庄屋才助 油屋助七				田川儀七									
薩摩街道盛徳村、福嶋街道追分繫石より 石人入口を歴て石人前まで測る。入口より 前津村、鴻ノ池村字庚申堂、福嶋村古 松町を歴て矢部道を宮野町を歴て唐人 町人家限りに打止。古松町より花宗川を 渡り酒井田村を歴て柳瀬村界川、本名矢 部川を渡り北田村境まで測る。				大隈村より柳川街道測、津福村、安武本 村、大善寺村字橋本を歴て高良玉垂社へ 打上、宮本川神幸橋渡、橋杭石柱一本、 傘橋という。石華表惣門楼門まで測。宇 橋本より上野町制札を歴て測所打上。そ れより無測一里余行、長峰石人石櫃一 覧。									
一八八				一八八									



14			13 *	12 *	宿泊日・旧暦
(17)	昼休	小休	(16)	【支隊】	(西暦)
目 柳川城下瀬高町二丁	北町	新船津町	目 柳川城下瀬高町二丁	瀬高町	宿泊地
同 柳川市	同 柳川市	同 柳川市	同 柳川市	同 瀬高町	現・市町村名
本陣別当相浦専内 用聞古賀茂三郎 油屋伊三郎	用達堤九左衛門	別当中村元蔵	本陣別当相浦専内 用聞古賀茂三郎 油屋伊三郎	鉄屋茂治平 平島屋喜惣右衛門	宿泊宅
逗留測。瀬高門前より柳川市中測、新町、細工町、辻町を歴て大手打上辻ノ門橋手前まで測る。辻町より中町を歴て上町木戸、井手橋渡繋ぐ。新船津町木戸外より柳川村沖端道追分(重測)、それより沖端道を枝光村、古賀村字渡場を歴て古賀村浜武村界に打止。古賀村より字孫六渡、矢留町、市中池ノ端組南町、吉富村、弥四郎村道追分を歴て測所打上。南町より北町制札前に終る。それより無測。			一木村枝新田より川縁に添、小保村住吉町を歴て住吉渡、石塚渡。住吉町より小保町止宿測所を歴て幡保村茶屋に繋ぎ終る、それより無測にて柳川城下。 【支隊】瀬高町上庄村字出口柳川街道追分碑より下久末村字三津橋、下百町村を歴て藤吉村柳川城門、瀬高門口にて打止。恒星測定。		特記・天体観測
一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	大図番号
上木佐木村止宿入口より牟田口村字金屋町、矢加部村を歴て柳川村外町井手ノ橋に繋ぎ新船津町木戸、枝光村字三軒屋、大坂井村を歴て幡保村茶屋打止、それより無測にて小保町。恒星測定。			界川端より山下町、小田村、本吉村を歴て清水観音打上。本吉村より朝日村を歴て薩摩街道上小川村追分碑に繋ぐ。それより無測。		



16 *		15 *				宿泊日・旧暦
【支隊】 中食止宿	(19) 吉留村(吉富村)	【支隊】	【支隊】昼休	(18) 柳川城下瀬高町二丁目	昼休 中嶋村中島町	(西暦)
早米来村	同 柳川市	三池宿	同 みやま市	同 柳川市	同 柳川市	宿泊地
同 大牟田市	同 柳川市	同 大牟田市	同 みやま市	同 柳川市	同 柳川市	現・市町村名
一向宗勝光寺	庄屋重助 百姓次八	別当内田忠左衛門 三郎吉	一向宗光万寺	本陣別当相浦専内 用聞古賀茂三郎 油屋伊三郎	炭屋荒巻喜兵衛	宿泊宅
三池宿新町追分碑より田嶋村を歴て横洲村飛地先大牟田川土橋、それより大牟田村海辺を歴て諏訪村海辺諏訪川尻まで沿海測。これより街道を下二部村諏訪川舟渡、早米来村を歴て藤田村肥後国界、それより熊本領大嶋町海辺横切印に繋ぎ終る。それより無測、国界より沿海を諏訪村諏訪川尻に繋ぎ終る。	宮永村新田字釜屋より沿海順測、弥四郎村新田作出を歴て矢留村沖ノ端川尻。川向浜武村沿海打留。又矢留村川尻より左沖ノ端川に添打上、字矢留開川渡、古賀村浜武村界に繋ぎ終る。弥四郎村より止宿へ打上。南里格治へ江戸へ遣す御用状を相渡す。恒星測定。	柳川城下瀬高口より今古賀村土橋に繋ぎ、徳益村、上塩塚村を歴て中嶋村中嶋川舟渡し、川を渡り江浦村を歴て光万寺門前字北方、三池街道へ出、北新開村字三軒屋追分碑に繋ぐ。それより無測。	柳川城下瀬高口より今古賀村土橋に繋ぎ、徳益村、上塩塚村を歴て中嶋村中嶋川舟渡し、川を渡り江浦村を歴て光万寺門前字北方、三池街道へ出、北新開村字三軒屋追分碑に繋ぐ。それより無測。	柳川城下瀬高口より今古賀村土橋に繋ぎ、徳益村、上塩塚村を歴て中嶋村中嶋川舟渡し、川を渡り江浦村を歴て光万寺門前字北方、三池街道へ出、北新開村字三軒屋追分碑に繋ぐ。それより無測。	逗留測。今古賀村徳益村界三池街道板橋通追分より塩塚川添に四十町村、鷹ノ尾村を歴て血垣村字タ開、右塩塚川尻海辺へ出る。此より川向、宮永村新田字釜屋へ引渡す。川手前より沿海逆測、字弁天開という堤を測、海辺泥海、一里余遠干潟。中嶋村、右海辺終て瀬高川縁に添て川上へ測、字二重街道測残しに繋ぐ。八ツ半後まで休なし大に困窮。それより無測。	特記・天体観測
一九三	一八八	一九三	一八八	一八八	一八八	大図番号



19	18	17 *	宿泊日・旧暦	
(22)	(21)	【支隊】昼休 【支隊】昼休	(西暦)	
諸富津	小保町	大野嶋村	宿泊地	
佐賀県佐賀市	同 大川市	同 大川市	現・市町村名	
本陣大和屋善兵衛 紀伊国屋半兵衛 大和屋兵十	別当吉原正右衛門 一向宗小保山浄福寺	百姓六郎治	宿泊宅	
【後手】住吉町石塚渡より筑後川測。小保川を斜めに渡り向嶋村を歴て若津町へ打上る、向嶋村より筑後川一流になる所の先にて打止る。それより大中嶋へ渡り一周を測る。それより乗船。【先手】石塚村渡口船番測遠旗印より諸富村止宿測所前を歴て大堂村佐賀江川舟渡、蓮池町入口を歴て神崎町通曲角に終る。恒星測定。	柳川領大野嶋村、佐嘉領大詫間村界より左周、止宿入口を歴て測所打上。また止宿入口より柳川領佐嘉領界まで測。それより乗船。恒星測定【支隊】南新開村新田堤より江浦村を歴て嶋堀切村中嶋川渡口に繋ぎ終る。それより無測。	大牟田村海辺より大牟田川尻を歴て御料所柳川領界土橋まで打上げ。大牟田川尻より深倉村、黒崎村を歴て南新開村新田堤まで測。	特記・天体観測	
一八八	一八八	一八八	大図番号	



23 *			22		21	20		宿泊日・旧暦
【支隊】	(26)	昼休	(25)	【先手】昼休	(24)	(23)	【後手】昼休	(西暦)
郷司給村枝住江分	六角中郷村字六角町	山口村枝郷松	快方村枝久富	本庄町	住吉村	早津江村	大多久間村	宿泊地
同 小城市	同 白石町	同 江北町	同 佐賀市	同 佐賀市	同 佐賀市	同 佐賀市	同 佐賀市	現・市町村名
利右衛門 百姓松兵衛	三郎兵衛 本陣七兵衛	九兵衛	利右衛門 助十 本陣治右衛門	喜右衛門	利右衛門 清右衛門 半右衛門	貞兵衛 善治郎 本陣勝之丞	伊助	宿泊宅
恒安村より永田ケ里村枝弁才分、住江川舟渡し、郷司給村枝住江分六角道追分に繋ぐ。			郷司給村枝住江人家前六角川海辺川堤追分より川堤通を大戸村字深通を歴て中郷村地先六角通多良越長崎街道迄測る。伊万里六角追分、山口村枝郷松人家前より下小田村枝仏津、六角川舟渡中郷村に繋ぎ六角中郷村字六角町止宿前迄測る。恒星測定。		【後手】崎ケ江村渡場より犬井道村を歴て犬井道村小籠村界迄測る。【先手】犬井道村小籠村界より下飯盛村を歴て止宿打上測所迄測る。止宿入口より下飯盛村大野村界迄測る。恒星測定。		【後手】乗船大多久間島へ渡、筑後大野島、肥前大詫間界より左周、同断国界に繋ぐ。【先手】筑後川端渡場遠旗より石塚村、寺井村字浮盃を歴て用水川端を寺井本村へ打上、又川尻へ出。即用水巾十里漕にて渡り兼測遠術にて求む。それより枝弟子丸を歴て早津江村止宿測所迄打上。それより崎ケ江村船渡場打留。恒星測定。	
一九〇	一九〇	一九〇	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	大図番号



26	25		24 *		宿泊日・旧暦
(29)	(28)		【支隊】	(27)	(西暦)
音成浦村	鹿島村	昼休 塩田町枝原町	築切村	室島村	宿泊地
同 鹿島市	同 鹿島市	同 嬉野市	同 白石町	同 白石町	現・市町村名
百姓太兵衛 与右衛門 要八	本陣徳人屋忠右衛門 諸国屋茂平 小間物屋庄五郎	徳兵衛	百姓庄太郎 太平治	本陣百姓森右衛門 宇兵衛	宿泊宅
【後手】鹿島村止宿入口より横沢川、中牟田村、馬渡分村を歴て浜町、浜川尻迄測る。此より沿海、西葉浦村、塩屋浦村を歴て音成浦村海辺堤に打止。【先手】深浦村塩田川手前より塩田川を渡り井手方村、小船津村横沢川渡、神水川板橋を歴て八本木村、浜川渡、浜町街道に繋ぎ終る。御用状佐嘉より相届。	室島村止宿前より室島峠、深浦村枝百貫川堤脇を歴て枝長浜郡界塩田川舟渡、土井丸村字殿橋、塩田鹿島追分を歴て塩田道を塩田町枝原町の三辻、塩田嬉野街道追分迄測る。又字殿橋より鹿島村止宿入口を歴て止宿打上。【支隊】築切村海辺より戸ヶ里村廻里川を渡り室島村枝竜王を歴て深浦村塩田川手前沿海内止。それより塩田川縁を深浦番所字百貫、街道に繋ぎ終る。恒星測定。		六角道追分より沿海順測、二十路村を歴て築切村海辺迄測る。	六角町止宿前より吉村、辺田村を歴て稲佐神社へ打上る。辺田村より古賀村枝今橋を歴て室島村止宿前迄測る。恒星測定。	特記・天体観測
二〇一	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	大図番号



30 *				29 *		28 *			27	宿泊日・旧暦
【支隊】	【支隊】昼休	【支隊】小休	(3)	【支隊】	(2)	【支隊】	【支隊】昼休	(12, 1)	(30)	(西暦)
湯江村	長里村	小河原浦村女島	田古里村枝津浦	小河原浦村	亀浦村	田古里村枝津ノ浦	亀ノ浦	北多良村	音成浦村	宿泊地
同 諫早市	同 諫早市	長崎県諫早市	佐賀県太良町	長崎県諫早市	同 太良町	同 太良町	同 太良町	同 太良町	同 鹿島市	現・市町村名
五郎兵衛 宇兵衛 治郎右衛門	阿蘇社拝殿	女島大明神拝殿	本陣貞吉 宅助	百姓九郎助 次兵衛	百姓丈太夫 喜兵衛	百姓貞吉 宅助	百姓佐兵衛	本陣江右衛門 利右衛門	百姓太兵衛 与右衛門 要八	宿泊宅
小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 汐入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴て 湯江村湯江川尻渡り打止。				田古里村枝今里より遠武村字釜分、井崎 村枝築切兎島渡口を歴て兎島に渡り一 周測。又渡口より小河原浦村迄測る。		音成浦より道法凡六里無測。		音成浦村土手より矢ノ浦村、飯田村、北 多良村枝谷分止宿測所を歴て南多良村 迄測る。恒星測定。		特記・天体観測
二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	大図番号



4		3		2			1 *				文化9年11月 宿泊日・旧暦	(西暦) (1812)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
(7)	【先手】昼休	(6)	昼休	(5)	【支隊】昼休	昼休	【支隊】	【支隊】昼休	(12、4)	昼休								
愛津村	森山村枝田尻	森山村枝唐津 枝田尻	伊牟田村	諫早町田町	栄昌宿	船越村枝梅津	西長田村字宿分	東長田村枝正久寺	深海村	湯江村								
同 雲仙市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	長崎県諫早市								
本陣庄屋深浦九郎左衛門	百姓清次	本陣百姓和七 百姓九兵衛 九兵衛隠居	百姓清四郎	酒屋藤兵衛 酒屋宇兵衛 酒屋市兵衛	源右衛門	正左衛門	銀太郎 金太夫	百姓文左衛門	会所預庄屋喜右衛門 百姓太治兵衛	百姓五郎兵衛								
【後手】川床村打止より有喜村諫早長崎街道追分を歴て唐比村それより愛津村にて海辺街道と合測。是より沿海愛津村内字土井を歴て止宿へ打上、また西海辺へ横切、字釜床に打止。【先手】井牟田村より森山村枝田尻を歴て枝唐津、板谷川渡り愛津村にて合測。島原領主より被贈国産持参。恒星測定		【後手】船越村枝梅津人家前より川床村松原にて大雨に付打止。【先手】川内町村小野村界より伊牟田村内にて大雨不止打留。		無測一里半、小野村河内町村界海辺より河内町村小豆崎村界、渡口諫早入江端に繋ぐ。又船越村枝梅津より諫早町入口を歴て田町止宿へ打上、入口より新町三ツ辻にて合測。【支隊】西長田村枝宿分より小豆崎村迄沿海、本明川尻渡り打止。又小豆崎村より本明川縁打上。諫早岡町、栄昌道島原道追分を歴て栄昌道を栄田村枝栄昌宿、長崎街道大村街道追分迄測る。栄昌道島原道追分より島原道を本明川を渡り下町三辻を歴て新町にて手分へ合測。			湯江村より小江村枝打越、大田尾村字観音崎、深海村、東長田村枝正久寺を歴て西長田村字宿分迄測る。				四里余無測。恒星測定。							
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇一								



7		6				5			宿泊日・旧暦
(10)	【後手】昼休	(9)	【先手】昼休	【後手】昼休	【後手】小休	(8)	【先手】昼休	【後手】昼休	(西暦)
島原城下古町内堀町 内中町	島原村今村名字新湊	島原城下古町内堀町 内中町	三会村中原名	湯江本村池田名	神代町	西郷村栗林名	伊福村枝松江名	山田村牛口名	宿泊地
同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 雲仙市	同 雲仙市	同 雲仙市	同 雲仙市	現・市町村名
本陣町年寄中村孫右衛門 町乙名古賀源左衛門 町乙名木田伝左衛門	船問屋若松屋政治郎	本陣町年寄中村孫右衛門 町乙名古賀源左衛門 町乙名木田伝左衛門	庄屋出田栄五郎	庄屋菅宗之允	別当半之丞	庄屋宮崎五兵衛	庄屋本多権右衛門	林田唯武	宿泊宅
逗留測。【後手門谷他3名】三会村海辺 字下町より海辺市中追分を歴て有馬町 内新町大手前に至。それより止宿本陣測 所前に至り三ツ辻を歴て今村名字湊船着 場に至る。今村名は大変に人家損亡、此 湊は新に人家出来なり。字湊より沿海測 字新湊迄測る。又字湊より沿海逆測、島 渡口を歴て汐入橋を渡り有馬町内船津 人家前に打止。それより汐入測量、汐入 橋奥より手前に繋終る。 【先手永井他3名】有馬町内新町湊島渡 口より湊島に渡り一周測。その他中小 島、馬島、恵美須島、平島、岡高山島一 周測。それより乗船帰宿。恒星測定。		【後手】西郷村字船津より神代町、土黒 村枝下原字塩屋、浜田川尻渡、多比良村 枝船津名を歴て湯江村枝釘崎名迄測。 【先手】枝釘崎名より東空閑村枝浜口 名、三ノ沢村小原名字半田を歴て三会村 中原名字下町迄測る。恒星測定。				【後手】愛津村字土井口より野井村枝船 津名を歴て山田村枝牛口名字船津に繋 ぐ。それより三ツ島へ渡海、大島、中島、 沖島を測る。【先手】枝牛口名字船津よ り夏峰村枝サヤ崎、伊福村枝松江名、西 郷村字船津を歴て止宿打上。恒星測定。			特記・天体観測
一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	二〇二	二〇二	大図番号



宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10	(13)	島原城下古町内堀町 内中町	同 島原市	本陣町年寄中村孫右衛門 町乙名古賀源左衛門 町乙名木田伝左衛門	逗留測。【後手坂部他4名】市中海辺追分より沿海測、洲鼻に至り入江渡口、また洲鼻より入江を有馬町内片町を歴て新町大手前に繋ぐ。片町より船蔵前を歴て高島鼻を回り入江渡口亀蔵山鼻に繋ぐ。新町大手前より有馬町葉町、古町内桜町を歴て島原本村城後を測る。杉谷村馬場名を歴て山寺名坪浦人家脇にて打止。【先手永井他3名】島原村属、寛政四子年湧出新島測。長島、草島、沖島、沖高島、埋瀬、中島小島、磯高島、中島大島、串島、出外レ島、茂七島、木場島、出口島、堂崎島、横島、無名島、出口石島。それより乗船帰宿。島原候より国産を被贈。恒星測定。	一九六
9	(12)	同	同	同	逗留測。【先手永井他3名】島原村枝今村名字新湊より沿海順測、字塚山、安徳村字出山、他地方測量繫点を歴て字南入江に打止。それより乗船帰宿。【先手門谷他3名】島原村字界山地方より安徳村枝新現島を測る。水島、ヘタ山島、杵島、沖ノ杵島、中ノ小島、中ノ南島、上ノ島、下ノ島、中ノ島、岡ノ島、松島、伊勢島、大島、惣兵衛島。それより乗船帰宿。	一九六
8	(11)	島原城下古町内堀町 内中町	同 島原市	本陣町年寄中村孫右衛門 町乙名古賀源左衛門 町乙名木田伝左衛門	逗留測。【後手坂部他4名】市中海辺追分より沿海測、洲鼻に至り入江渡口、また洲鼻より入江を有馬町内片町を歴て新町大手前に繋ぐ。片町より船蔵前を歴て高島鼻を回り入江渡口亀蔵山鼻に繋ぐ。新町大手前より有馬町葉町、古町内桜町を歴て島原本村城後を測る。杉谷村馬場名を歴て山寺名坪浦人家脇にて打止。【先手永井他3名】島原村属、寛政四子年湧出新島測。長島、草島、沖島、沖高島、埋瀬、中島小島、磯高島、中島大島、串島、出外レ島、茂七島、木場島、出口島、堂崎島、横島、無名島、出口石島。それより乗船帰宿。島原候より国産を被贈。恒星測定。	一九六
	【後手】小休	杉谷村馬場名	同 島原市	庄屋宮崎七郎左衛門	逗留測。【後手坂部他4名】市中海辺追分より沿海測、洲鼻に至り入江渡口、また洲鼻より入江を有馬町内片町を歴て新町大手前に繋ぐ。片町より船蔵前を歴て高島鼻を回り入江渡口亀蔵山鼻に繋ぐ。新町大手前より有馬町葉町、古町内桜町を歴て島原本村城後を測る。杉谷村馬場名を歴て山寺名坪浦人家脇にて打止。【先手永井他3名】島原村属、寛政四子年湧出新島測。長島、草島、沖島、沖高島、埋瀬、中島小島、磯高島、中島大島、串島、出外レ島、茂七島、木場島、出口島、堂崎島、横島、無名島、出口石島。それより乗船帰宿。島原候より国産を被贈。恒星測定。	一九六
	【後手】小休 安徳村	同	同 島原市	庄屋大松只右衛門	逗留測。【後手坂部他4名】島原城下古町ノ内堀町三ツ辻より街道測、今村名を歴て中木場村下村名、街道浜道追分へ埋抗を残、浜道を測る。寛政四癸子年、大麥の後の荒地界なり。道より左は小松生焼石原、右は無障平畑一面なり。海辺へ出て北ノ名字救崎を歴て從此沿海逆測、竜宮島渡口を歴て字南入江に繋ぐ。竜宮島へ渡、先手と合測。【先手門谷他3名】安徳村内新成島々を測る。大島より渡、南島、中ノ島、天草島、南島、北島、横島、天草の南島、湊島、竜宮島回り合測。両手とも乗船帰宿。江戸書状渡す。	一九六



## 土佐の伊能測量1 甲浦と赤岡編

福田 仁

測量協力者の子孫だった！

「うちのご先祖の家に、伊能忠敬が泊まったらしいよ」

親戚筋から、そんな話を聞いたのは3年前。笑って聞き流したが、少しだけ気になって後日、ネットをのぞいた。「伊能忠敬e史料館」で検索したら、本当に先祖の名前が出てきたので驚いた。筆者の母方は「上岡（かみおか）」姓。土佐の西端に近い大津村（現土佐清水市大津）の上岡庄屋から江戸期に分家した。元タレントの上岡龍太郎氏も同族である。

忠敬の大津宿泊は文化5（1808）年6月8日。忠敬日記には「本陣＝大津郷浦庄屋代、上岡弁之丞」と記されている。上岡庄屋本家に問い合わせたところ、伊能隊受け入れに関する言い伝えは皆無だった。

筆者は「高知新聞」に勤務。歴史に関して多くの素人だが、わが先祖とのつながりに深く思いをはせ、忠敬没後200年を迎えた昨年、一連の企画を紙面で展開した。第1弾で伊能隊の宿泊先一覧を掲載。この後、読者から「一覧表にある〇〇屋は、わが家の屋号」「△△庄屋は、うちの先祖です」など、さまざまな情報を頂くこととなった。

企画のメインとなる連載「伊能図を巡る」（全8回、5～12月）では、東洋町から宿毛市まで、土佐における伊能隊の全宿泊先を回った。

測線、つまり海岸線を厳密にたどることは現実的に不可能なので、「自転車を利用し、最も海岸寄りの舗装路を走行する」ことを原則とした。8回とも見開き連続2ページ（ワイド版）の中央に伊能図（大図、中図）を大きく据えた。

「大図」は「InoPediaをつくる会」が作製した「平成の復元伊能大図」を提供していただいた。「中図」は許可手続きを行い、徳島大学附属図書館の「大日本沿海図稿 南海」を掲載。同図書館ホームページでは、その「高精度」画像データを無料で公開している。本稿を読み進めるに当たって、パソコンやスマホで同図をご覧いただければ、四国の地理の概要をご理解いただけるかと思う。

忠敬の名前は、もちろん高知県内でも広く知られている。ただ一般的に、彼の業績に関する知識は、教科書に記述されたわずかな数行の範囲を出ない。かくいう筆者も3年前までそうだった。紙面をみた読者からは「伊能図がこれほど美しいものだったとは」「歴史に残る測量と天体観測が、私の自宅近くでも行われた事実を知り感動した」「江戸時代を身近に感じた」といった反響が寄せられた。

土佐の伊能測量については、忠敬本人の日記のほか、測量隊員の柴山伝左衛門、伊能隊に随行した土佐藩役人、奥宮正樹の日記が残されている。3人はほぼ同じ行程をたどりながらも、視点が微妙に異なるところが面白い。読み比べることによって、土佐の伊能測量が立体的に浮かび上がる。

前置きが長くなったが以下、昨年の自転車旅を振り返る。「御用 測量方」と染め抜いた自

作の旗をリュックに張り付けて、東から西へ。走行距離は、通算でおよそ720kmに達した。

## 【東洋町】

徳島との県境を高知県側へ越えると、東洋町甲浦（かんのうら）の小さな港町に出る。忠敬が土佐入りした文化5年4月19日の日記に「土州（土佐）の入口番所の地を甲ノ浦の東股と云」と記した。その跡地に今日、「甲浦東股番所跡」の碑がある。

忠敬日記によると甲浦での本陣は「超願寺」で、「この夜曇る。雲間に測る」とある。南に開けた小さな谷間に、今は無人のお堂と墓地があるのみ。すぐ東に脇宿の「万福寺」があり、住職にお聞きしたが、歴史的な経緯については詳細不明とのこと。郷土史家、原田英祐さん（東洋町野根）によると、これら2寺の位置は、伊能測量の時代から変わっていないとみられる。



「東股番所」跡の碑



本陣となった「超願寺」

土佐藩役人、奥宮正樹の日記（4月3日）には、「この度測量の用にてつかはるる人足四百人ばかり」が甲浦西方の河内村に派遣され待機したとある。測量隊受け入れの規模の一端が分かる。土佐に入った伊能隊は、





ゴロゴロ海岸のゴロゴロ石



「海の駅」から望む「野部の鼻」

まず甲浦で1泊。翌4月20日朝から測量に取りかかり、間もなくトラブルが発生する。以下、奥宮日記を現代語訳した。

野部（のぶ）の鼻で、測量隊の人々が、われわれ土佐藩の役人に対して激怒した。「これは幕府直轄事業である。事前に通達しておいたのに、測量用の道を付けていないのはなぜか？ これでは先に進めない」。われわれは説明を試みた。「このような（海岸線ぎりぎりで険しい）場所を通行なさらるとは予想もできず、道はこちら側（陸寄り）に設けてあります」

と。全く聞き入れてもらえなかった。

原田さんが、野部の鼻に案内してくれた。南の国道脇から海岸に降りる小道があるが、少し進めば岩だらけで、もう先に進めない。

甲浦―室戸間の国道55号は、おおむね直線的に海岸に沿っている。原田さんによると、昔の道は、海岸からいったん海と逆方向の谷沿いに上り、そこから別の谷に降りるといった、迂回（うかい）を重ねるルートが多かったという。それほど急傾斜なのだ。国道を自転車で行くと、右手に連なる急傾斜の山地が、左手の海へ「すんと」と落ちていく印象を

受ける。

東洋町野根の海岸沿いに、「ゴロゴロ」という地名がある。周辺に人家はない。国道脇に、お遍路さんらが利用する「ゴロゴロ休憩所」がある。再び奥宮日記より引用する。

「ころころ石」など、あやしき名つきたる地もあり。鞠（まり）の大ききしたる丸石（まろいし）の、波に磨かれて、いと美しきが、差し引き波に鳴る音の「ころころ」という。

忠敬も目にしたはずの「ゴロゴロ石」は、現在の海岸でも数多くみられる。摩耗が進んで昔よりは幾分、小さくなったのだろうか？ 周辺を自転車で走行中、左下、つまり海岸からかすかに地鳴りのような重低音が聞こえた。のぞき込むと、波打ち際の「ころころ石」が「差し引き波に鳴る音」なのだった。

野根の宿泊先は忠敬日記によると本陣「五郎左衛門」、脇「忠三郎」。地元では本陣「野根郷庄屋・川村家」、脇宿「野根浦庄屋・安岡家」との言い伝えがある。川村家は現在の野根郵便局、安岡家は隣接する野根地区公民館の位置にそれぞれあった。



ゴロゴロ海岸を通る国道55号

### 【室戸市】

佐喜浜（現室戸市佐喜浜町）での伊能隊の宿泊先は、忠敬日記によると本陣・脇宿とも「井筒屋」。一方、奥宮日記には「御泊り大庄屋・寺田六兵衛」とある。国道をわずかに西

に入った小道の脇に、昭和52年に建てられた「伊能忠敬緯度観測之处」の石碑がある。位置は、寺田庄屋の敷地入り口。5月3日の忠敬日記の記述から、寺田庄屋（六郎右衛門）はここ佐喜浜から高知城下まで長期にわたり「付添案内」を務めたことが分かる。

伊能隊は、土佐入り初日に藩役人から「土佐国海辺測量危険の儀」を告げられた。筆者は今回の寄稿に当たり、徳島県側の一部（伊座利―穴喰）を車で通行した。地形は急峻かつ複雑に入り組んでおり、「陰難」の度合いは土佐の東海岸（甲浦―室戸岬）を上回る。島々も多い。伊能隊はこうした阿波の難所を次々と越え、雨にも苦しめられた末に土佐に入った。慣れない土佐藩側の対応に、つい、いらだったのだろうか。なお奥宮ら現場の献身的な対応によって、以後の土佐測量はおおむね円滑に進んでいる。

室戸岬から西は、山地と海岸の間に平地があり、地形的な様相はそれまでとは違ってくる。室津の本陣「津照寺（しんしょうじ）」は四国霊場第25番札所。甲浦―高知間の伊能測量ルートは、おおざっぱにいつて

「四国八十八カ所」の遍路道とほぼ重なっている。

羽根（はね）現室戸市羽根町）の止宿は「代増屋（よますや）」紙面をみた子孫の松本博子さん（同町）から連絡を頂いた。「土



室戸・佐喜浜の「緯度観測之处」石碑



佐藩主や伊能忠敬が宿泊した家だと、幼少時に聞かされました。やつぱり母が言っていた通り」。松本邸は地区で最も大きかったが、昭和36年の台風で高波をかぶって流失し、同じ場所建て替えられたという。羽根村史は松本家について「代増屋と号し回船を持ち、豊富な木材を上方に運んでおり」と記している。



「岡御殿」の裏庭

### 【田野町、安芸市】

田野の本陣・脇宿は岡家。今日、岡邸は「岡御殿」として知られる観光スポットで、内部の見学も可能。現存の建物は伊能測量の36年後に建て替えられた。

郷土史家、山本武雄さん(室戸市羽根町)が「土佐史談」219号(平成14年)で紹介した、「北川郷西谷村名本新井来助日記」を以下に引用させていただく。

海の際へ六十間あるといふ紐を引き、所々へ印の竹を立て、何やらいう事分からず、合点いかず。夜は米屋(岡家の屋号)の裏庭にて台をすへて北の星を見る。誰も合点いかず。これは日本の地図を見て絵図を書くということなり(文字を一部読みやすく改変)

ここ岡邸で、伊能隊は天測を公開した。近隣から集まった人々は興味津々で見守ったが、忠敬らが手際よく進める作業の意味については、さっぱり理解できなかった。土佐のあちこちで、また全国で、このような光景がみられたのだろうか。



升屋の現存する蔵



「享和元年」と書かれた棟札

安芸(安喜)の脇宿は「升屋幸平」。子孫の須藤純子さん(同市本町2丁目)から「升屋はうちの屋号です」と連絡をいただいた。伊能隊受け入れについては言い伝えがなく、高知新聞の企画で初めて知ったという。

升屋は酒造業で栄えた。本町1丁目の「スウィングビル」を含む広大な一画が、かつて升屋の敷地だった。現存する蔵の一つは、伊能測量の時代には既に存在していたのではないかと須藤さんは推測する。隣接する蔵は老朽化が著しく

近年、解体された。その際に発見された棟札に「享和元(1801)年」と書かれていた。つまり伊能隊が通過した時には築7年で存在した。須藤さんが案内してくれた浄貞寺(同市西浜)の墓石には「須藤幸平」とあり、文政4(1821)年に60歳で死去。「升屋幸平」と同一人物とみられる。升屋の酒の銘柄は「松がゑ」。安芸出身の三菱財閥創業者、あの岩崎弥太郎も愛飲したという。

### 【香南市】

手結(てい)周辺(香南市夜須町)では、忠敬と地元勢の何気ない問答から、藩上層部を動揺させる「アワビ騒動」に発展した。藩の機密



赤岡の本陣「長木屋」

事項を含め、伊能測量の裏話が充実しているのも、奥宮日記の魅力だ。アワビ騒動については、後の回で詳しく触れることにしよう。

なお奥宮日記は高知市の大久保朝子氏らが翻刻され戸村茂昭氏が84、86号で全文を紹介

しておられる。

赤岡(香南市)での本陣・脇宿は「長木屋」。ろうそくの製造販売で栄えた。子孫の池田亜弥香さん一家では、忠敬宿泊について代々語り継いできた。忠敬が泊まったと思われる古い建物は、40年近く前に撤去したという。旧街道に面して現存する建物は、築250〜260年と伝わる。伊能測量当時には既に存在したようだ。今日の赤岡の景観を象徴する、重厚な建築物だ。赤岡小学校の南に、香南市教委が平成19年に設置した「伊能忠敬緯度観測記念碑」がある。赤岡町史によると、もとは道路を隔てた東側に、



伊能測量の旧記念碑があった場

測量地を示す「標準点石」(青石)が置かれていた。明治末、全国測量を実施した陸軍が青石の代わりに御影石を設置。それが戦後の道路舗装の際に撤去され、行方が分からなくなった。伊能隊に関連する高知県内の石碑は室戸・佐喜浜と、こ





赤岡「平島屋」の跡地。

こ赤岡の2カ所である。町史によると、伊能隊の「従者」が「平島屋」に分宿した。詩人で郷土史に詳しい野村土佐夫さんによると、平島屋は地元住民の間で「伊能隊ゆかりの旅館」として知られていたが、昭和50年ごろ取り壊さ

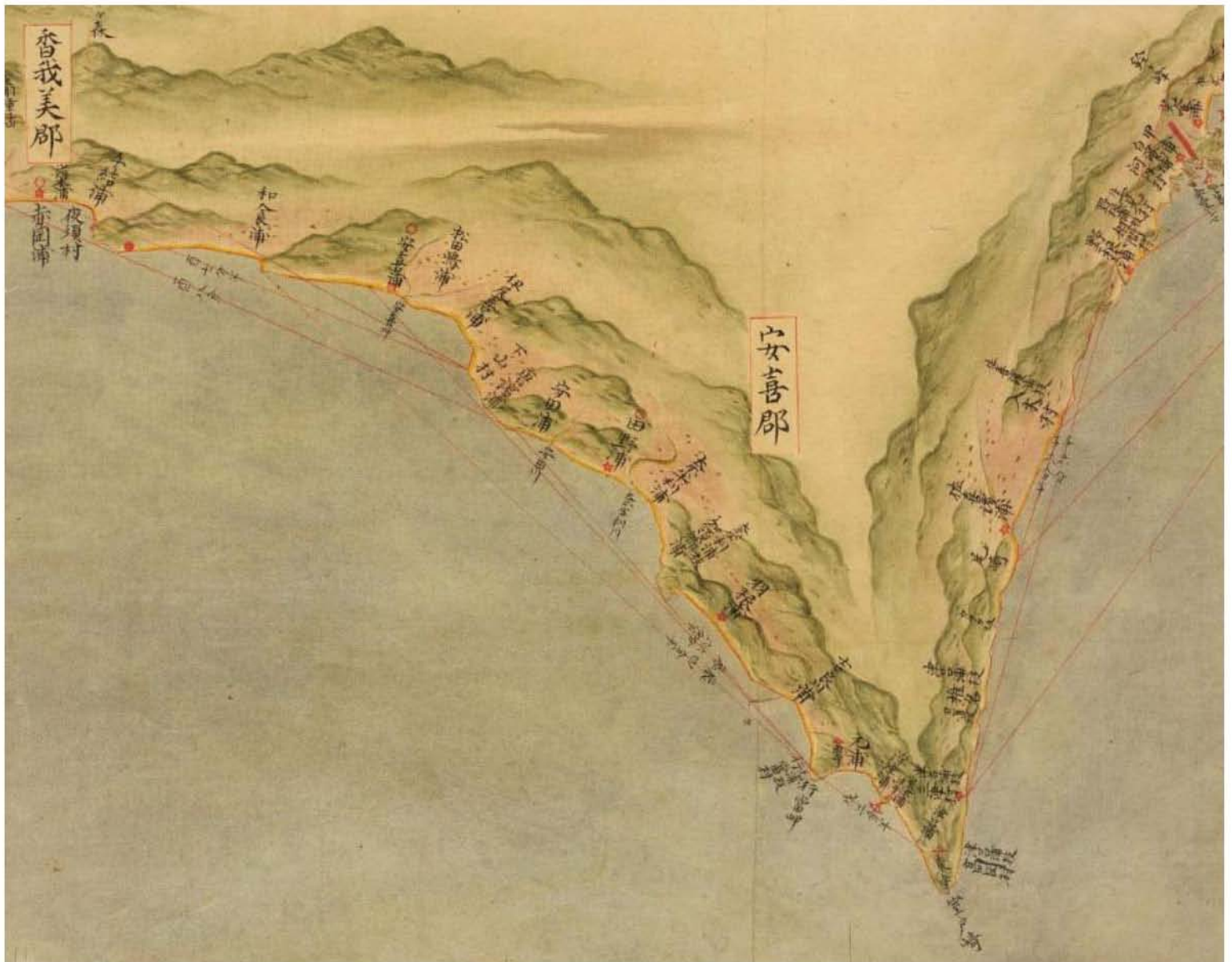
れた。

近所の「こんにやく屋の登志（とし）おばば」（明治生まれ、故人）から、野村さんはこんな話を聞いた。

「浦人たちが珍しがって、（伊能隊の）後について行った」「平島屋に見物人が集まった」「器具類を」運搬してくれと頼まれたので、皆で面白がって運んだ」

野村さんによると、西へ約3キロ離れた物部（ものべ）川の河口まで、赤岡の住民たちが伊能隊の後を付けたという話も伝わっている。野村さんは「昔の人の話やき、確証はない。けれど赤岡では、そんなことが言い伝えられてきた。浦人は伊能忠敬が何者かも知らんが、なにさま測量が珍しかったがじやろう」と推し量る。

伊能測量に関する地元側の記録や言い伝えは、高知県に関しては（奥宮日記は別格として）意外に少ない。最大の例外がここ赤岡町。商都として栄えただけに、好奇心旺盛、かつ生活に余裕のある人々が多かった、ということだろうか。（続く）



伊能中図：「大日本沿海図稿 南海」部分（室戸周辺）

徳島大学附属図書館蔵



## 主な地点の緯度・経度 (伊能隊の計測値と地理院地図を対比)

場 所	北 緯 (伊能隊の計測値)	北 緯 (地理院地図)	東 経 (電子国土 Web)
「甲浦東股番所跡」碑		33度33分 0.50秒	134度18分 4.43秒
甲浦脇宿「万福寺」		33度32分56.43秒	134度17分48.02秒
甲浦本陣「超願寺」	33度33分半	33度32分58.56秒	134度17分44.46秒
野部の鼻		33度32分15.74秒	134度17分31.14秒
野根郷庄屋・川村家跡(野根郵便局)	33度31分	33度30分17.40秒	134度16分 3.85秒
国道55号ゴロゴロ休憩所		33度29分12.27秒	134度15分28.45秒
佐喜浜「緯度観測之处」碑	33度24分半	33度23分38.34秒	134度12分22.22秒
室津本陣「津照寺」		33度17分18.14秒	134度 8分53.50秒
羽根「代増屋」跡	33度22分	33度21分42.64秒	134度 3分49.71秒
田野「岡御殿」	33度26分半	33度25分36.35秒	134度 0分33.84秒
安芸脇宿「升屋」現存の蔵 (安芸の本陣の現在地は不明)		33度29分58.93秒	133度54分32.25秒
赤岡分宿「平島屋」跡		33度32分28.56秒	133度43分36.84秒
赤岡・旧測量記念石があった場所	33度33分	33度32分28.59秒	133度43分33.15秒
赤岡・平成の伊能測量記念碑		33度32分28.77秒	133度43分32.63秒
赤岡本陣「長木屋」		33度32分31.07秒	133度43分21.99秒

## 「高知新聞」ネットで閲覧可能です。

高知新聞「忠敬没後200年記念」企画の各記事を、高知新聞HPでご覧いただけます。

「伊能忠敬土佐を測る」(1月5日朝刊)、連載「伊能測量 土佐の足跡」全5回(5月)、「伊能図を巡る」全8回(5～12月)など。

会員登録が必要です。無料会員は毎月10本まで記事閲覧可能(新聞購読者の場合は同20本まで)。

「高知新聞 Plus」(有料登録)では、全ての記事の全文と、紙面イメージもご覧いただけます。

詳細は高知新聞HPか、お客様窓口まで フリーダイヤル (0120・3154・54)

※ 浅学をかえりみず投稿させていただいております。

お気づきの点は筆者へメールでご指摘いただければ幸いです。 [ioribaiwa@live.jp](mailto:ioribaiwa@live.jp)



## 伊能図フロア展に魅せられて

伊能忠敬研究会 馬場良平

### 一、歴史街道との出会い

私が初めて『街道』に興味を抱いたのは、地元の地方銀行に入行してから間もない、昭和四十六年（一九七一年）一月より、週刊朝日で連載が始まった司馬遼太郎の『楽浪の志賀』に始まる『街道をゆく』を読み、琵琶湖周辺の歴史や文化に魅力を感じ「歴史のロマンを感じる『街道』に深い興味を覚えたことに始まります。『近江』というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでも、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである。……冒頭のこの書出しによって、私は近江の国、琵琶湖周辺に異常なほどの興味を覚えました。

しかし、当時は高度成長期、仕事を終えて家に帰るのはプロ野球ニュースが終る頃で、二十歳代の後半にただ一度『楽浪の志賀』に魅せられて『湖西のみち』の風景を追って、近江・琵琶湖周辺の街道を散策しただけで、興味ある『街道歩き』を継続的にする余裕はない時代でした。

そんな私がふたたび、『街道歩き』に興味を持ち始めたのは、ちょうど五十歳になる数ヶ月前、職業人としての先行きが見え始めた平成十二年（二



司馬遼太郎の「街道をゆく」ほか参考図書

〇〇〇年）二月、『歴史街道を歩く会』を主宰する河島悦子氏の「唐津街道を歩く会」に参加してからです。

歩く仲間との素晴らしい出会いもあり、私は唐津街道と並行して多良海道を歩き、その後、長崎街道も歩きました。時には平戸街道にも足を運びました。

そのような中、古街道愛好者から長崎街道と唐津街道を結ぶ塚崎往還（唐津往還）を歩こうと云う機運が高まり、平成十四年（二〇〇二年）十月『中世の風景が広がる歴史道』をキャッチフレーズに「塚崎・唐津往還を歩く会」を発足しています。

### 二、伊能図との出会い

平成十二年（二〇〇〇年）「唐津街道を歩く会」に参加した当時、九州では長崎街道を中心とした参考図書が発行されていましたが、九州での「街道歩き」のバイブル書的存在は、伊能忠敬研究会会員であられる河島悦子氏が執筆・発行された「伊能図で甦る古の夢 長崎街道」「大里から博多へそして唐津へ 唐津街道」の二冊があげられます。河島悦子氏が『疎開して、いじめ』に泣いた幼い日、土地の古老に教わった「殿さん道」を辿り始めて五十余年が過ぎました」とあとがきで記されていますが、自身の五十年來の古街道調査を基に、伊能忠敬の足跡を辿ることで出来たもので、伊能忠敬測量日記や街道を通った旅人の日記や紀行文なども盛り込まれており、一万分の一という地図が街道を歩く者にとってはいがたい使いやすい参考図書であります。拙宅は長崎街道沿いにありますが、河島悦子氏の「伊能図で甦る古の夢 長崎街道」を手にして歩かれる人々を数多く見かけ

たものです。

平成十四年（二〇〇二年）に発足した私たちの「塚崎・唐津往還を歩く会」は、例会資料として、一万分の一の地図とそれに対応した説明資料を配布しています。第二回目の例会からは、『伊能忠敬測量日記』の中の地元測量部分も配布し、それを踏襲しながら今日まで継続して来ています。

平成十六年（二〇〇四年）九月には、街道を紹介して知り合った福岡の「図書出版の工房」の遠藤薫氏の案内で伊能測量隊の足跡を辿る道探しに参加しました。この



浜崎海岸の松並木として残る伊能道

時、遠藤薫氏が用意して下さった伊能大図の写しと現在の地図を符合させて歩くと、伊能測量隊の測量道が現在の地図と見劣りしない正確さで残っており、その測量技術の高さをあらた

めて感じました。また、随所に古道の面影を残す草道や石造物が残っており、新たな発見をした感動で胸が高鳴ったものです。特に浜崎海岸沿いの伊能道には感激して、地元佐賀新聞の投稿欄「ひろば 私の主張」に「伊能図で行く藩政期の道」と題して投稿し、松並木として残る浜崎海岸の伊能道の保存を呼びかけました。

平成十六年（二〇〇四年）十一月、私にとって大きな転機となるイベントが福岡市で行われました。「アメリカ伊能大図里帰りフロア展」です。河島悦子氏や遠藤薫氏のお誘いを受けて会場に足



を運んだところ、その大きさ、美しさ、正確さに圧倒されてしまいました。その上、河島悦子氏のご推薦により来賓として会場にお見えになつてい



アメリカ伊能大図、博多・福岡周辺



里帰りフロア展を見入る河島悦子氏

た渡辺一郎伊能忠敬研究会代表（当時）より伊能忠敬研究会への入会許可を得て、福岡の國重正樹氏、遠藤薫氏そして佐賀の私の三名が入会することになったのです。

この時の伊能大図との出会い、そして伊能忠敬研究会入会は、その後の私の活動に良い意味で大きく影響を与えるものでした。しばらくして渡辺一郎夫妻が九州の旅をされた時、伊能忠敬研究会九州支部の歓迎会が行われ、その席で近く展開される伊能大図フロア展に準備中の伊能大図第九十号の部分図をいただき、大変感激し、ますます伊能図の魅力に惹かれるようになったのです。

### 三、完全復元伊能図全国巡回フロア展

佐賀県域に張り巡らされた江戸時代の主な街道や往還は、基本的には戦国時代に利用されていた街道や往還を継承、整備したものと考えられてい

ます。この佐賀県域の主な街道や往還、そして海岸線を縦横に歩き廻り、大きな足跡を残した人物が伊能忠敬です。

「塚崎・唐津往還を歩く会」の例会は、唐津から塚崎（武雄市）までの塚崎往還（塚崎から唐津へ向かつては唐津往還と呼ぶ）を中心に、主に佐賀県内西部地区に繋がる街道や往還などを歩いていましたが、沿道の人びとの支えや街道や往還歩きに興味を持たれる人々の後押しを受けながら、佐賀県全域の歴史街道に足を延ばして来しました。

「塚崎・唐津往還を歩く会」を継続していく中で、伊能図に出会い、そして何よりも各地に繋がる街道や往還を歩いていくと必ず伊能忠敬が足跡を残していることを強く意識するようになり、おのずと伊能忠敬に興味を抱きました。

伊能忠敬に対する興味が大きくなり始めた時期に大きなニュースが入って来しました。

各地で発見された伊能図を最新のコンピュータグラフィックで色彩を復元、伊能忠敬が創った美しい伊能図を巨大なフロアに広げ、実際に地図の上を歩くことが出来る体感型の「完全復元伊能図全国巡回フロア展」が平成二十一年（二〇〇九年）四月東京・深川会場を皮切りに始まったというニュースでした。

当時、伊能忠敬研究会事務局より「完全復元伊能図全国巡回フロア展開催基金」募金趣意書なるものが送られて来て、大いに賛同して少額ではあるが寄付した処、フロア展招待券をいただきました。趣意書に「二〇〇年前の日本はどのような姿で、どのような地名で呼ばれていたのか。完全復元図を身近に観て、触れて、学んでいただくことにより、大いなるエネルギーを感じただけにと

思います。明日を担う青少年にはぜひ観せてあげたいと念願しています。」とありました。また、フロア展開催地として、全都道府県各一ヶ所以上での開催を目標とし、終了予定は平成二十三年（二〇一一年）十二月と記してありました。

この趣意書を読み、私の胸のなかで「何とか佐賀県で開催できないものか、伊能忠敬測量隊の肥前国測量から二〇〇年の節目に是非開催したいものだ。」と熱いものが湧いて来しました。

平成二十一年（二〇〇九年）十一月十五日、佐賀県立図書館の多々良友博先生が関与した「二〇〇年前の佐賀を歩こう！〜十六畳大の地図初公開〜」と題した「BOOKマルシェ佐賀二〇〇九」の一環として、江戸

期の肥前国一円の伊能大図（アメリカ大図）が公開・展示されました。この時、地図の上を歩いて、二〇〇年前と変わらぬ地名や正確な伊能図に感動され、喜ばれている来場者を見て、日本全国を体感出来る「フロア展を佐賀で！」という思いを強く持ちました。



200年前の佐賀を歩こう！会場風景

### 四、九州での巡回フロア展

平成二十二年（二〇一〇年）九州で初の巡回フロア展が福岡で開催されることになり、真夏の太陽が照り付ける七月三十日〜八月一日までの三日間、福岡市の中村学園大学で福岡県土地家屋調査



士会の主催で開かれました。

会場での案内役を伊能忠敬研究会九州支部のメンバーにより交代でやることになったっており、私も半日、フロア展会場で来場者と共に伊能図を堪能することが出来ました。「フロア展を佐賀で！」とようやく重い腰を上げるきつかけになったフロア展でした。この時、案内役の目印としていただいた「伊能忠敬研究会」の黄色い帽子が、その後、大いに役立つのでした。



平成22年7月30日～8月1日福岡会場

佐賀県での開催を市町村や教育関係などと呼び掛けるため、まず一人で動き初めました。まもなく平成二十二年(二〇一〇年)八月三十一日には、忙しい日程を割いて伊能忠敬研究会代表(当時)渡辺一郎氏が佐賀に来て下さいました。佐賀開催への行動開始です。平成二十四年(二〇一二年)八月三日～五日まで開催された「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 佐賀」については、伊能忠敬研究会二〇一二年第六十六号「各地のニュース」にて「佐賀フロア展が開かれました」と題して、渡辺一郎氏より詳しい報告がなされておりますので、ここでは割愛いたします。佐賀会場での巡回フロア展は、全国で二十番目の開催でした。

平成二十二年(二〇一〇年)七月全国で七会場

目となった福岡市での開催後、九州・沖縄地区では、平成二十三年(二〇一一年)十月福岡県八女市、平成二十四年(二〇一二年)八月の佐賀市、平成二十五年(二〇一三年)十一月には沖縄県那覇市と鹿児島県指宿市、平成二十六年(二〇一四年)には福岡県飯塚市で開催されて来しました。指宿市では、フロア展とあわせて開催された「沖縄・鹿児島文化交流祭」に中央実行委員会のメンバーと御一緒に参加させて頂いた。琉球舞踊と薩摩郷土芸能を堪能しました。



指宿会場「沖縄・鹿児島文化交流祭」に参加

この間、私の歴史街道歩きの師匠である河島悦子氏とは、沖縄を除く各地の会場に足を運びました。来場されるお客様が伊能図に描かれたふるさとの地名や川、山などをご覧になり、感激される様子を嬉しく思いながら、あらためて伊能忠敬の偉業と大いなるエネギーを感得しつつ、会場案内の手伝いをさせて頂きました。

#### 五、全国二十八番目のフロア展 in 唐津

来場者とのそうしたやり取りの中から、もう一度佐賀の人に伊能図を見てもらいたい、伊能図の上を歩いて、ふるさとの変わらぬ姿を見ていただきたいという思いが生まれてきて、唐津市での開催に向けた行動を実行するようになりました。折しも、平成二十五年(二〇一三年)四月『中世の

風景が広がる歴史道から佐賀の歴史街道を歩く「塚崎・唐津往還を歩く会」』が十周年一〇〇回目の歩く会を迎える節目に伊能忠敬研究会名誉代表渡辺一郎先生の十周年記念特別講演会を計画していましたので、渡辺先生にはご無理を言って、この日程に合わせて唐津市での講演会、そして、唐津市長への陳情を引き受けていただきました。当時の渡辺先生の日程表を見ると四月二十日(土)八時一〇分東京羽田発、一〇時五分長崎空港着、長崎空港のある大村市から武雄まで約五〇km移動、十五時から講演会、一八時三〇分から歩く会十周年懇親会参加、宿泊。四月二十一日(日)起床朝食後、唐津市へ約四〇km移動、一四時から講演会、その後からつ塾関係者との会食、宿泊。四月二十二日(月)起床朝食後、九時唐津市長にフ



長崎へ移動中、桃川の郷土史家と渡辺氏

ロア展唐津開催陳情。一〇時から長崎市へ約一二〇km移動、長崎市の入江正利様、宮川雅一様などフロア展長崎開催の件で意見交換、一七時長崎市から長崎空港のある大村市へ約三〇km移動し、一九時長崎空港発、二〇時四〇分東京羽田着。という三日間強行スケジュールを熟していただき、結果、坂井市長から「子どもたちに見せてあげなさい」と快諾をもらって唐津開催が決まりました。担当部署からは冠がないと説得力がないからしばらく公表は控えてということでしたが、いずれにしても市



長の言葉は重いものがあります。涙が出るほど嬉しかったです。長崎市役所へは以前、入江正利様と一度、フロア展開催のお願いで訪問していましたが、担当者段階での話にとどまり、実現出来ておりません。やはり、担当者の資質、力量が問われると思われまふ。佐賀市や唐津市の場合には担当者として窓口になられた都市デザイン課の武藤英海係長（当時）や文化振興課の坂口政江課長（当時）は趣旨をよく理解していただき、トップへの意見具申をして下さいました。ありがたいことでした。

唐津市合併十周年記念事業として採択された「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 唐津」は平成二十七年（二〇一五年）二月二十七日より三月一日まで三日間、唐津市文化体育館で開催されました。合併十周年記念事業ということで、私の得意分野である歴史街道を歩くことを提案して、フロア展を前にして「伊能測量隊の足跡をたどる歴史探訪ウォーク」を行うことにしました。



伊能ウォーク・呼子地区弁天島にて記念写真

合併前八市町村で二〇〇年前に伊能忠敬測量隊が実際に測量した各地域の道を歩くことで、正確な地図を残した伊能忠敬測量隊の功績と二〇〇年前と変わらぬ姿で息づく郷土・唐津を見直す機会になり、フロア展開催時には、会場に足を運んでいただき、伊能図を堪能してもらいたいとの思いで計画しました。数多くの参加者を得て、好評で

あったと満足しています。

フロア展一日目、唐津市内の小学六年生は、バスを使って小学校ごとに決められた時間に入れ替わり立ち替わり会場に入り、伊能図の上を、関心をもつて見て回り、走り回ったり、歩測大会に参加したりして楽しんでいました。二日目、三日目は子どもたちと一緒に家族連れで来場される姿や最後の開催地という文句に引かれて福岡県や長崎県から来られた伊能ファンなどで会場は終日満員の状態が続きました。主催者である唐津市が作成したフロア展仕様の「伊能大図」唐津地区を五種類に分けて作成したクリアファイルが来場者に配られて好評でした。また、地元の松浦史談会は『伊能忠敬日記』に詳しく記された鏡神社の「楊柳観音像」のレプリカを展示・解説されました。渡辺一郎名誉代表には健康状態に不安を抱えながらも特別講演会をしていただきました。また、木谷道宣氏のご紹介で「琉球国之図」も展示することが出来、話題は豊富にありました。



唐津市内小学6年生はバスで会場へ

巡回フロア展最後の開催地として、唐津市役所はじめ地元の測量業界関係の方々、土地家屋調査士のメンバーの方々、不動産鑑定士協会や商工会議所の会員企業などのご協力を得ることが出来ました。伊能忠敬研究会九州支部の会員の方々も応援に駆けつけてくださいました。



楊柳観音像を舞台に唐津フロア展会場

来場者は当初目標をはるかに上回る六、〇八〇名と多くの方々に来ていただきました。老若男女それぞれが伊能忠敬の生き方や伊能図の大きさ、測量隊の苦労や努力など、伊能忠敬の魅力や語りかけているものを感じ取っていただけました。全国巡回フロア展の最後の会場として唐津で開催出来たことは、私の人生でも最高の出来事として輝き続けるものと思っています。

#### 六.「全国巡回フロア展」終了後の動向

「全国巡回フロア展」は、全国二十八番目の唐津会場が最後の開催地となり、二十八会場合計で十一万二千人を超す来場者にご覧いただきその役目を終えています。これまで使用されて来た中型トラック一台に及ぶ資材一式は、伊能忠敬ゆかりの香取市に移され、管理されることになりました。伊能忠敬研究第八十号（二〇一六年）の各地のニュース欄によりますと、平成二十八年（二〇一六年）八月六日（土）と七日（日）の二日間にわたり専修大学生田キャンパスで「伊能忠敬の原寸大復元大図フロア展」が開催されているようです。その後、香取市では「伊能忠敬没後二〇〇年記念事業」の一環として、平成二十九年度、「伊能大図パネル全国派遣事業」を実施することになり、「全国巡回フロア展」で使われて来た「伊能大図の原





鹿島市「伊能大図パネル展」

す。この地区にお住まいの方は、伊能大図を間近に見る機会を得て、そのスケール

の大きさを体感され、郷土の二〇〇余年前の姿に思いを馳せられたことでしょう。

私の住んでいる佐賀県では、鹿島鍋島藩初代藩主鍋島忠茂公のゆかりの地である香取市と友好都市協定を締結した鹿島市に一年間貸出しが行われています。鹿島市での「伊能大図パネル展」は平成二十九年（二〇一七年）六月十七日（土）～十八日（日）、九月三十日（土）～十月一日（日）、十一月十一日（土）～十二日（日）の三回に分けて、鹿島市内三ヶ所で開催されました。

いずれの会場でも原寸大の中国西部、四国西部、九州部分五十九枚のパネルによる「伊能大図パネル展」、「江戸から明治時代の測量機器の展示」、伊能忠敬記念館の山口眞輝学芸員らによる「伊能忠敬講演会」、ワンカラシンなど当時の測量道具を使った「伊能忠敬の測量体験」等の内容で、伊能大図を「歩いてみよう」「聞いてみよう」「作ってみよう」、「日本の歴史をつくった地図を見る最後のチ

ヤンス!!」「伊能忠敬でつながる鹿島と香取の不思議な縁」と呼びかけ、多くの市民が伊能図の偉大さ、伊能忠敬の偉業に感心されていました。

この間、十一月五日（日）には近くの杵島郡江北町で行われた「ビッキーフれあい祭り」に貸出しが行われ、「伊能大図パネル展」が開催され、見られた方々すべてが感嘆の声をあげられています。鹿島市への貸出期間終了前には、「全国巡回フロア展」の開催に意欲を示されていた「やきものの町・有田町」へ最後の開催を呼びかけた処、生涯学習の一環として「伊能大図パネル展」二〇〇年前の有田を歩こう」を決定され、有田町教育委員会・有田町公民館主催により、平成三十年三月九日（金）～十日（土）の二日間行われ、私はパネル展示説明を買って出て、「伊能忠敬研究会」の黄色い帽子をかぶって、会場を駆け巡りました。

この会場では町内小学校二校から四年生の授業の一環として、伊能図に触れる機会を作っていました。小学生が来場された際には、「紙芝居・伊能忠敬」で伊能忠敬の幼少期から地図づくりまでを紹介し、「やろうと決意したことを困難を克服しながら進む偉人の生き方」を感じ取ってもらえたものと思っています。



有田会場・紙芝居を見入る小学生

香取市では、伊能忠敬没後二〇〇年にあたる平成三十年（二〇一八年）五月二十日（日）、全国九

市町に貸出されていた「大図パネル」の帰着式を行い、伊能忠敬没後二〇〇年記念事業として「伊能大図全国パネル公開展」を五月二十五日（金）まで開催し、日本全国を一般公開しました。

## 七．終わりに

最後になりましたが、全国各地の皆さまに体感型の巡回フロア展により伊能図の素晴らしさ、伊能忠敬の人となりを通して、多くの感動を与えていただいた「完全復元伊能図全国巡回フロア展中央実行委員会」の堀野正勝事務局長ほかメンバーの方々に深く感謝いたします。

また、伊能忠敬没後二〇〇年記念事業の一環「伊能大図・パネル全国派遣事業」により、全国各地の方々に、伊能図を間近に見て、楽しんで、そのスケールの大きさを体感できる機会を提供していただいた香取市に対して敬意を表します。

伊能図に魅せられて入った世界ですが、「伊能忠敬肥前国測量から二〇〇年」、「完全復元伊能図全国巡回フロア展」、そして「伊能忠敬没後二〇〇年」と大きなイベントは終わりましたが、偉大な伊能忠敬の研究は道半ばです。これからも伊能忠敬の魅力や測量隊の足跡調査など伊能研究は続けてゆきたいと思っています。今日この頃です。



紙芝居・伊能忠敬



完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 唐津会場設営から撤去まで

体育館ではフロアパネル搬入作業



中型トラックで資材到着



フロアへ伊能図配置作業



屋外では会場案内板設置



第一目オープニングセレモニー



会場設営完了・事前打ち合わせ



フロア展終了後、解散式



三日目終了後、撤去・トラックへ





## 石川県支部ニュース

### 加賀藩測量の足跡をたどる (越中その二) 室山 孝 河崎倫代

はじめに

前号に引き続き、伊能測量隊の越中  
休泊地をたどる現地探訪の二回目である。この探訪も、竹内慎一郎氏の『地図の記憶―伊能忠敬・越中測量記』(以下『地図の記憶』とする)を道標に休泊地の現状を確認することが多かったが、昨年測量隊に関する地元史料が再発見されたこともあり、新たな知見も加えることができた。

今回は、測量隊が享和三年八月朔日(一八〇三年九月十六日)に能登国から越中に入り、同月五日に富山城下を出て滑川宿に向かうまでの行程(越中測量の前半)で、氷見町(氷見市)・放生津町(射水市)・東岩瀬町(富山市)・富山城下(富山市)と辿った。

探訪は四月十四日(日)、参加者は河崎・相良・室山の三名で、さらに今回は富山県小矢部市で郷土の古文書を研究している小矢部郷土史会のメンバーである、牧野潤・佐野欣司・松田昭治の三氏のご協力により、住宅地図のコピーなど、地元ならではの事前準備をしていただき、当日も同行していただいた。

この日の朝、氷見市の商業施設「番屋街」で小矢部組と合流した。上空は晴れていたものの富山湾の向こうに雪を頂く立山連峰を仰ぐことはできなかった。その後、次第に曇ってきて弱い雨が降り出したが、富山市中心部で探訪を終える頃まで、フィールドワークを妨げられなかったのは幸いだった。

#### 一、氷見町・富山屋吉左衛門(8/2)

八月朔日、測量隊は能登国鹿島郡庵村を出立し、能登半島の東側付け根に当たるいわゆる灘浦沿岸を、佐々波村・黒崎村・東浜村・大泊村(以上加賀藩御預地、石川県七尾市)と南下。国境を越えて越中国射水郡に入り、脇村、中波村、中田村、姿村(以上加賀藩領、富山県氷見市)まで測量を済ませ、そこから船で東浜村に戻り、庄屋田畑太兵衛方に宿泊した。その夜は大曇りで子の刻(夜中の十二時)から度々降雨があり、天文測量は出来なかった。

なお、『地図の記憶』によれば、忠敬の先触れの覚書に、庵村から追加先触を出したことが記されており、当初は東浜村まで予定し、進捗すれば宇波村あたりまで二日越しで測量したいので、手伝い人足や船の用意をするよう述べている。

翌二日の未明八ツ半(三時頃)雨が



伊能中図：氷見～富山城下(『伊能図大全』より)

止んだため、平山郡蔵らは船で姿村へ向かい、夜明けとともに測量を開始。忠敬は持病(痰、喘息)のため暫く東浜村の宿に留まり、六ツ半(七時頃)

乗船して姿村に赴いた。そこで加納村(氷見市)の十村扇沢兵衛(十村上役である無組扶持人十村扇沢権六の息子)の出迎えと挨拶を受けている。



測量は姿村から大境村、小境村、脇方村、宇波村、泊村、小杉村、薪田村、阿尾村、間嶋新村（稲積村内）、池田新村（加納村内）（以上加賀藩領、氷見市）と進み、九ツ半後（午後一時過ぎ）氷見町に到着し、中町の富山屋吉左衛門方に止宿した。この夜は曇っていたが、わずかの晴間に天文測量を行っていた。当時の氷見町は家数千六、七百軒、また二千軒ともある。

加賀藩の役人高島厚定（今石動町等支配）の「職事日記」（金沢市立玉川図書館加越能文庫）に、町肝煎の加納屋平蔵・園屋理助と宿主の富山屋吉左衛門が羽織袴で町端まで出迎えたこと、氷見町の北部を富山湾にそそぐ上庄川に架かる北ノ橋の川口から浜通りの窪村境まで、鉄鎖を使用して測量し、肝煎兩人はその後に付き従ったことが書かれている。

宿所の富山屋吉左衛門方について、『地図の記憶』では現在の比美町の目抜き通り、県道415号線に面した岩崎自転車商会をその跡地としている。この家は間口は狭いものの奥行きは裏の通りまで続き、間口の広い隣家の田中薬局の奥は蔵になっている。当時の富山屋の敷地規模はわからないが、田中薬局の敷地を含む広い間口だったのかもしれない。

なお、高島の「職事日記」に富山屋での食事の献立や木銭証文の写し



富山屋跡地とされる比美町・岩崎自転車商会

が載っている。昼食の「糸うどん」は氷見の名物で、現在も「氷見の細うどん」として伝統が続いている。木銭証文では、「上様（伊能忠敬） 30文、御下人17文」、「白米4升、1升58文」として計算している。

## 二、放生津町・柴屋彦兵衛（8/3）

三日の朝六ツ後（六時過ぎ）測量隊は氷見町を出立し、窪村、島村（以上、氷見市）、太田村、国分村、伏木村（以上、高岡市）と順調に進んだ。『測量日記』に伏木村は「能き川湊ナリ」と注記され、伊能大図では伏木村と次の六渡寺村（射水市）の間に「射水川」が太く描かれている。この射水川は現在の小矢部川と庄川が少し上流の古府村（高岡市）の上手と対岸の吉久村（同

### 【8月2・3日 氷見町での食事】

落付 糸うどん 猪口（したし）  
向（おろし柚・塩なんばん・おろし大根）  
夕食 向 刺身（伊勢鮑）御飯  
平（すだれ麩・白身かまぼこ・大根うけ）焼物（一塩鯛）  
御汁（切魚、初茸）  
香之物（奈良漬・茄子漬）  
朝食 向（鯛色付 白みそ）御飯 御茶  
平（卵とじなど）小皿（香の物）  
御汁（寄せ豆腐・葉付にんじん）

「高島厚定職事日記」より

市）の南で合流して大きな流れとなり、大河口を形成したもので、湊はその地形を利用し、現在でも漁港として知られている。

伏木はかつて越中国府の所在地であり、射水川の名は『万葉集』にも詠われている。新元号「令和」の典故となった「梅花の宴」を催した大伴旅人を父とする、大伴家持が国司として赴任していた。また六渡寺の渡しは、『義経記』においては、源義経一行がここを渡る際に、役人の目を免れるため弁慶が主君義経を打擲した舞台とされている。現在では、六渡寺の東側に庄川の新たな河口が造成され、かつての射水川河口は小矢部川河口となっている。測量隊は射水川を六渡寺村側へ船で渡った。六渡寺村の注記に「此間二三ヶ村アリ、海二丁」とあり、海から二丁（約217メートル）ばかり上流を

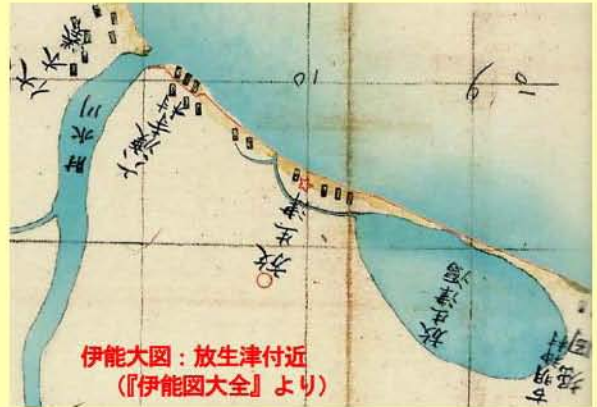
渡ったようだ。

六渡寺村からまもなく放生津町（射水市）であるが、測量はその先、放生津潟の向こうにある明神村・海老江村（加賀藩領、射水市）まで済ませ、戻って放生津町に八ツ（午後二時）頃到着し、宿所の山王町柴屋彦兵衛方に入った。この夜は曇っていたが、雲間に少し天文測量ができた。なお、伊能大図に、古明神村から能登石動山に方位線が描かれており、この日、古明神村の海岸で諸山の方位測量を行ったことがわかる。

放生津の町中を東西に縦断するように流れる内川（放生津内川）は、かつて町の東方にあった放生津潟から奈呉の浦（伏木から放生津にかけての富山湾沿岸の古称）に注いでいた。湾岸流が運んだ射水川の土砂によって形成された砂州が入江を塞いでできた放生津潟は、現在富山新港として開発され姿を消したが、伊能大図には潟と内川がしっかりと描かれている。現在、内川は放生津観光の中心として遊覧船が往来している。

山王町柴屋彦兵衛方は、内川の北岸、現在の姫野病院付近であり、対岸にある観光拠点「川の駅新湊」から写真に収めた。その近くに設置された案内板「内川さんぽまっぶ」には、姫野病院の説明に「江戸時代、全国測量していた伊能忠敬と、越中の伊能忠敬ともい





われる和算・測量家石黒信由が  
った宿(柴屋)の跡」とあった(忠敬  
と信由の出会いについては後述)。

柴屋彦兵衛は材木商で海運業も営  
んでいた。寛政八年(一七九六)より  
算用聞という町年寄に次ぐ町役人とな  
り、米仲人・波除貯用銀才許・魚場  
主附などの役職を兼務した。文化十四  
年(一八一七)には町年寄となってい  
る『放生津町年寄柴屋文庫目録』解  
説。

柴屋の子孫は、現在金沢市在住との  
ことである。古文書は射水市新湊博物  
館(整理済三四五点、未整理一万点以  
上)・金沢市立玉川図書館近世史料館  
(一二五三点)・富山県立図書館(二五  
〇点)に分かれて所蔵されている。そ



右：姫野病院(柴屋跡地)と内川と探訪参加者(右端はボランティアガイド大伴さん)

上：案内板「内川さんぽまっぷ」の解説文

のうち新湊博物館に平成二十八年(二  
〇一六)に寄贈された柴屋文書(未整  
理分)の中から、昨年四月、伊能測量  
隊に関わる史料が再発見され、新聞報  
道されるなど話題となった。その中に

#### 【7月27・28日 所口町和倉屋での食事】

落着 御所菓子・百合根  
夕食 御汁(白味噌小ふかし・角干竹・青柚) 活盛(きす)  
向(はり大根・熊茸・花海苔) 御飯 焼物(一塩小鯛)  
香物(味噌漬大根・早漬茄子) 平(きくらげ・山の芋)  
夜食 小皿(もみ鯖・花かつお) 御飯 平(豆腐・松茸)  
香物(祇園漬)  
朝食 向(鯛切焼物) 御汁(白味噌 京菜) 御飯  
香物(木漬瓜) 平(千かぶら・むし貝・大千竹)  
昼食 御汁(白味噌)立貝・青ミ 向(ぼら刺身) 御飯  
猪口(煮酒・わさび) 香物(酢漬大根)  
焼物(一塩小鯛) 平(糸かも瓜・巻干瓢)  
夕食 うきふ

「柴屋文書」より

#### 【8月3・4日 放生津町柴屋での食事】

落着 御所落雁  
夕食 御汁(ふかしずし・松茸・はり牛房)  
なます(鯛・大根・きくらげ) 京花海苔  
はり生姜 御飯 香物(奈良漬瓜・塩茄  
子) 平(きんこ・ほどき卵・わさび)  
焼物(一塩鯛)  
夜食 御飯 大猪口(けしあい・かも瓜・干蒟  
蒻)  
持碗(くり茸・くず生姜)  
しめもの(人参・煎りごま)  
朝食 御汁(白味噌 大根・巻きす)  
向(くち焼物) 香物(葉付大根)  
平(すだれ麩・松茸・ねいも)

「柴屋文書」より

柴屋が能登所口町(七尾市)の宿所(阿  
良町和倉屋四郎右衛門)に問い合わせ  
た献立や注意事項、測量隊を迎えるた  
めに種々の品物を買付けた買上帳、

柴屋での献立、木銭証文案もあった。  
因みに、博物館隣の道の駅「カモン  
パーク新湊」では、レストランの夏の  
メニューに測量隊が食べた柴屋の献  
立を模した御膳が期間限定で提供さ  
れていた。

所口町からの注意事項を見ると、  
・宿の門口井溝から戸際まで砂を引い  
ておくこと、門の戸の両脇に長い手桶  
を二つ用意すること

・忠敬殿の御膳の碗は黒塗りの縁金入  
り、外の者は総黒塗り碗でよい。

・床には懸物を掛ける、次の間には衣  
桁を用意する、忠敬殿は夜具は持参す  
るが蚊帳を一張用意する、家来中には  
木綿の夜具を用意する。

・酒は出してはならず、家来中は格別  
である。

・朝は早く起床され、暗い中で燭台を  
点して朝食を召し上がる、遅くなると  
ことのほか機嫌がよくない、忠敬殿の  
御飯は格別に白く十分柔らかくする、  
料理にすまし(汁)と酒は出さないよ  
う。

などが申し送りとして記されていた。  
おそらく柴屋でもこれらに気を配っ  
たことであろう。

上に所口町和倉屋と放生津町柴屋  
の献立を紹介した。到着直後に出す落  
着の御菓子に「御所落雁」とあり、高  
瀬重雄著『越中の絵図―文化史への抒  
情』(以下『越中の絵図』)や『地図の



記憶』は、越中井波町の名産である「御所落雁」(今も名物である)のこととするが、果たして井波からわざわざ取り寄せたものだろうか。和倉屋の献立の「落着」には「御所菓子 百合根」とある。「御所菓子」とは「御所(おんところ、その土地)の菓子」の意ではないだろうか。なお、柴屋の「木銭証文」では、「上様(伊能忠敬) 35文、御下一人17文」、「白米4升、一升51文」として計算している。

#### 【伊能測量隊と石黒信由】

石黒信由(一七六〇〜一八三六)は射水郡高木村(射水市)の肝煎の家に生まれた和算・測量家で、加賀藩に仕えて加賀・能登・越中三国の正確な地図を作成した。和算問題集『算学鉤致』(三巻、文政二年刊)は代表的著書である。

『測量日記』にも「**此町に八幡宮あり**」と記された放生津八幡宮に、信由が天明三年(一七八三)に奉納した算額があるとの情報を、「川の駅新湊」のボランティアガイド大伴せつ子さん(同宮宮司の母)から得た。早速一同で八幡宮に参詣し、算額を拝見した。しかし残念ながら信由の奉納したものには以前に盗難に遭い、今は『算学鉤致』に掲載されていた図から復元し、昭和四十二年(一九六七)に再奉納されたものが掲げられていた。『越中の

絵図』によれば、信由は二十三歳から十五年間、富山城下の算学者中田高寛(一七三九〜一八〇三)のもとに通って関流の算学を学び、その奥義を究めて高弟となったという。

一方、天文・暦学・測量術については、同じ越中の城端(南砺市)に生まれた西村太冲篤行(一七六七〜一八三五)に学んだ。太冲は大坂の麻田剛立に学んだ天文暦学者(高橋至時や間重富と同門)である。寛政十一年(一七九九)藩校明倫堂講師として金沢に出府した頃に信由が弟子入りし、書籍の貸借などを頼み出ている。信由は測量用具・技術の改良に努め、それに基づき加賀藩領内を実測した。天保三年(一八三三)に「加越能三州測量図籍」(12冊)を著し、藩に提出している。忠敬の北国測量を知った太冲は、加賀藩領測量の手伝いを忠敬に申し出た。『測量日記』享和三年五月二十一日条に高橋至時の紹介状とともに太冲の忠敬あての書状が載っている。しかし加賀藩は測量隊への警戒からそれを認めなかった(『加賀藩史料』享和三年六月十五日条)。藩は忠敬との接触を防ぐため、太冲らを病氣と称して城端に禁足し、忠敬との通信・面会も禁じていた。

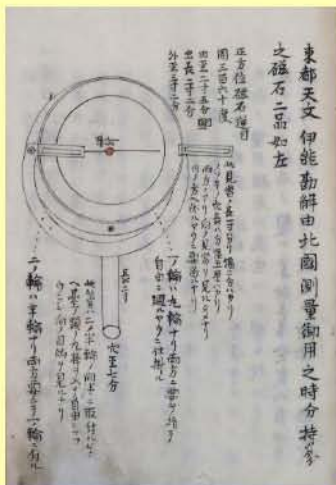
そうした中で石黒信由が測量隊に接触することができたのである。その背景としては、『越中の絵図』によれば、

信由は寛政七年(一七九五)に「射水郡縄張役」、伊能測量隊の来る前年享和二年には「潟廻分間絵図下調役」となっており、伊能測量隊が来た頃、放生津周辺で測量に当たっていたことが挙げられる。『地図の記憶』では、太冲は信由に、新田開発や干拓事業に忠敬の測量技術の見聞が必要であると藩に嘆願するよう仕向け、藩も消極的ながらこれを許したのではないかと、大胆な推理を展開している。

忠敬と信由の出会いについては、信由に迷惑がかかってはいけななどの配慮から『測量日記』に記載しなかったが、信由は前年の享和二年に測量用具について図解した「測遠用器之巻」の中に、増補する形で忠敬との出会いについて記録していた。その冒頭に、

東都天文伊能勘解由北国測量御用之時分持参之磁石二品如左、

とあって、忠敬が使用していた「彎窠羅鍼(ワンカラシン)」に衝撃を受けた



「測遠用器之巻」(射水市新湊博物館 高樹文庫)

のか、その実測図を示している。信由はのちにこれからヒントを得て改良工夫した「強盗(がんどう)式磁石盤・磁石台」を作った。

忠敬との出会いについては文末に、  
亥(享和三年)八月三日、放生津四十物町柴屋彦兵衛方止宿、其夜雲暗シ、各座敷ノ庭ニ天文ノ道具ヲ飾リ所ヲ、我モ見物イタシケリ、

とあり、柴屋で天文測量を見物している。「四十物町」とあるが、山王町の隣町であり、信由の勘違いであろう。

磁石の説明に、

右二品ノ内前ノ逆目磁石ハ弟子中コレヲ用ヒ、后ノ順目磁石ハ先生コレヲ用ヒ視ルナリ、右二品ノ磁石ノ製ハ享和三年癸亥八月四日、放生津浦測量ノ時、伊能氏ニ対面ノ上熟覽スル所ナリ、

とある。また象限儀について、よく工夫されたものと感想を述べ、そのあと伊能先生ト我如何ナル因縁ヤアルラン、古明神村ヨリ婦負郡四方町マテ同道シテ、暫ク地理天文算学ノ事ヲ隔意ナク遊談シテ、互ニ名残り別レケリ、

とあって、翌四日、古明神村(射水市堀岡古明神)から婦負郡四方町(富山藩領、富山市)まで、距離にして約六kmを測量隊に同道し、忠敬と地理・天文・算学について意見を交わし、別れに際し名残を惜しんだことが明記さ



れている。

石黒信由の遺した多くの資料は、現在射水市新湊博物館の高樹文庫(重要文化財)に保管されるが、我々は同博物館野積正吉氏のご協力により「測遠用器之巻」を撮影させていただいた。

### 三、東岩瀬・大村屋与四右衛門

(8/4中食、8/5朝食)

四日、早朝七ツ(四時)頃より半時ばかり(約一時間)降雨があつたが、測量隊は六ツ半(七時頃)放生津町を出発した。『測量日記』に記載はないが、放生津潟を過ぎた古明神村から忠敬は信由と共に歩いた。前日測量を済ませた海老江村を通り富山藩領の婦負郡飛地である練合村(射水市)に入り、この日の測量が始まった。先に引用した信由の『測遠用器之巻』に逆目磁石・順目磁石とあるのは、信由が測量を実見した時のものだったのである。測量は打出本郷村(加賀藩領)、打出村(以下、富山藩領)、四方町(以上、富山市)と進み小休止した。

富山藩の十村であつた岡崎家(富山市)の「御触御用留」に、測量隊の四日朝の小休止は、「四方町彦左衛門方」とあり、また十村の花崎村伝左衛門と大泉村太右衛門が伊能測量隊の担当責任者として対応し、四日は四方新町の九右衛門方に結めて西岩瀬町端ま

で出迎えること等が書かれている。

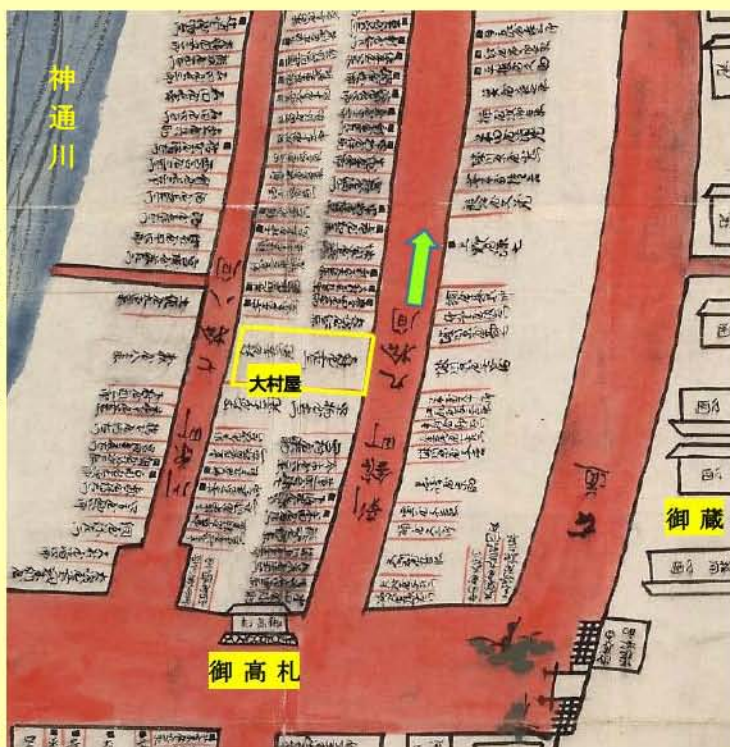
『測量日記』を見ると、富山藩領に入り村々の石高・家数が書かれていることに気が付く。加賀藩では、忠敬が村高・家数などを尋ねても答えないよう指示していたものの、支藩の大聖寺藩と富山藩では村高・家数については答えていたようである。因みに四方町は、「高四百六十七石七斗、家四百七軒」とある。ここは漁業が盛んであつたが、当時富山藩の大坂廻米の積み出し港となり町場化していたという。彦左衛門方で、忠敬は信由と別れの挨拶をし、また藩境に忠敬を出迎えた二人の十

村とも挨拶を交わしたのである。

四方町からすぐに西岩瀬村(現在、富山市四方西岩瀬町)となる。ここはかつて神通川河口左岸の湊町として栄えていたが、万治三年(一六六〇)に神通川大洪水で大きな被害を受け、河道の主流も東へ遷



石黒信由が同道した四方町海岸付近(富山新港を望む)



上:「東岩瀬絵図」(筆者加筆)(富山県立図書館所蔵)

左:測量隊の屋・朝食所となつた大村家跡地付近

つたため、多くの船宿や民家百余軒が神通川対岸の東岩瀬へ引っ越したという。伊能大図では西岩瀬村のすぐ東に婦負郡(富山藩領)と新川郡(加賀藩領)の郡境が描かれるが、そこに記された川が神通川の古川である。

古川を超えると草島村で、測量隊は神通川河口近くを船で渡り、東岩瀬町に着き、ここで中食となつている。『測量日記』にこの日の中食宿は書かれていないが、おそらく翌五日にも朝食宿となる大村屋与四右衛門方であろう。東岩瀬は、神通川河口右岸に立地する湊町で、北前船の船主である多くの海商たちが集まっていた。加賀藩の大坂



右絵図の「新館町」通り

廻米積み出し港であり、藩主の参勤交代の際の宿場ともなった。

『地図の記憶』も引用する文政十一年(一八二八)の「東岩瀬絵図」(富山



県立図書館所蔵)をよく見ると、「古道」の東側は「御蔵」が建ち並ぶ広大な加賀藩敷地(現在、岩瀬小学校などがある岩瀬御蔵町)となっており、その西側に、「新館町」「川原町」の通りが平行して並び、加賀藩御蔵屋敷入り口の門から西へ神通川まで通る広い道の北側に、高札場が描かれている。川原町の家並みの裏側は神通川である。

大村屋与四右衛門の家は「新館町」通りに面し、間口は広く敷地は「川原町」通りまで続いており、「川原町」に面した奥は蔵になっている。「地図の記憶」によれば、大村屋は伝馬問屋を歴代勤めた家とのことであり、「東岩瀬絵図」に見える広い間口は、馬繋ぎ場を備えた伝馬問屋の特徴を示している。

現在、東岩瀬の古い町並みが残る大町通り(森家・馬場家など北前船廻船問屋の建物があり、東岩瀬のメインストリートである)から南に真っ直ぐつながる新町通りは、大町通りとともに道幅も広く「岩瀬まち歩き散策路」として整備されている。この新町通りがかつて大村屋が店を構えた「新館町」通りにあたり、大村屋の蔵があった「川原町」通りは、道幅も往時のままと思われ、多くが新町通りの家の勝手口や車庫・駐車場となっていた。

『地図の記憶』に「大村屋の跡」として写真が掲載された百塚商店は、現

在、主屋が古民家風の作りに変わっていったが、庭の築地塀や北隣りの建物はほぼその写真のままであった。話を聞こうと訪ねたが、留守のため叶わず、通りの前を写真に収めて辞去した。

測量隊は天候に恵まれた五日の朝『地図の記憶』では四日とするが、その日は雨があがった直後で見通しが利かなかったであろう、岩瀬浜で半円方位盤を据え、能登・加賀・越中・越後・信濃の山々の方位を測っている。『山島方位記』には、宮崎岬・駒岳・信州雪山・劔山・別山・立山・浄土山・有峰山・白山・城端山・荒山・石動山・百海山・輪嶋山・宝竜山・小木岬・二上山・宝達山の方位が記録される。

伊能中図を見ると、描かれた方位線は、東(信州山)、西(宝達山)、南(立山)、北(石動山)の五本である。

#### 四、富山城下一番町：大和屋嘉兵衛(8/4)

八月四日、東岩瀬で中食後、測量隊は神通川沿いの道を南下し富山城下へ向かった。千原崎村(神通川の渡し場があり、対岸の草島村と結んだ、真木村、上野新村、城河原村、中嶋村、栗嶋村(以上、加賀藩領)、藩領境の赤井川(神通川に流れ込む支流で、現在の「赤江川」。その後主流が南遷し、今

は城下町を流れるいち川と、かつての奥田村の南で合流する)を越え、奥田上新村(以下、富山藩領)、奥田下新村、奥田村、東田地方村と進んだ。途中、半円方位盤を立てて山々を測ったようで、伊能中図に東方(信州山)への方位線が描かれている。なお、十村岡崎家の『御触御用留』によれば、富山藩は測量隊の道案内等として、忠敬に附番代などの村役人を七名、隊員に同じく村役人等八名、二人の十村に附番代二人を指示しており、ほかに長持など荷物を運ぶ人々もいたであろうから、二〇名以上の人々が測量隊とともに移動したことになる。

次に、測量隊は富山城下町に入り、北新町、長町、先上り立町、砂町、東四十物町、袋町、中町、西町(正札所)、二番町、一番町と来て、同町下の大和屋嘉兵衛方に止宿した(次頁の絵図参照)。この日は大曇天であったが、夜になると晴間も見え、雲間に天文測量を行っていた。

この日の午後、東岩瀬から富山城下までおよそ二里半(約一〇km)を測量した測量隊は、『地図の記憶』によれば、宿の到着時刻は『測量日記』に書かれていないが、日没少し前の午後五時から日没直後の六時頃と推定している。また『測量日記』に町役人等の来訪者や渉外的なことについて書かれていないのは、夜の宿所で隊員は測量記録

の整理、忠敬らは象限儀を据えて天文測量を行うなど多忙を極めたためであろうと推測している。

大和屋の所在地については、富山藩が天保十二年(一八四二)に城下の町人町の各町毎の由来や家数・男女別人数・番所・橋・有力町人・寺社などを書き上げさせた基本記録「富山町方旧事調理」(富山県立図書館所蔵)が手がかりとなる『地図の記憶』に「富山町旧記」とあるのは誤り。これによると「老番町」に有力町人として、

一、江戸飛脚所式丁目中程北側、但し御提灯等相渡り、大和屋甚兵衛、右之もの御使者宿等数代相勤候付、諸役御免許、

と大和屋が書かれている。測量隊が宿泊した大和屋は「江戸飛脚所」を勤める御使者宿で、一番町の二丁目中程北側に所在しており、天保十二年には「大和屋甚兵衛」と代替わりしたことがわかる。一番町の位置を安政元年(一八五四)の「越中富山御城下絵図」(富山県立図書館所蔵)で示しておこう。同町の二丁目は隣の二番町寄りである。

大和屋の跡地については、『地図の記憶』が昭和十四年(一九三九)刊行『富山県史蹟名勝天然記念物調査報告』(十三輯)に掲載された「近世日本の英傑伊能忠敬先生の足蹟を検討す」を引用し、当時の「島倉洋品店」付近

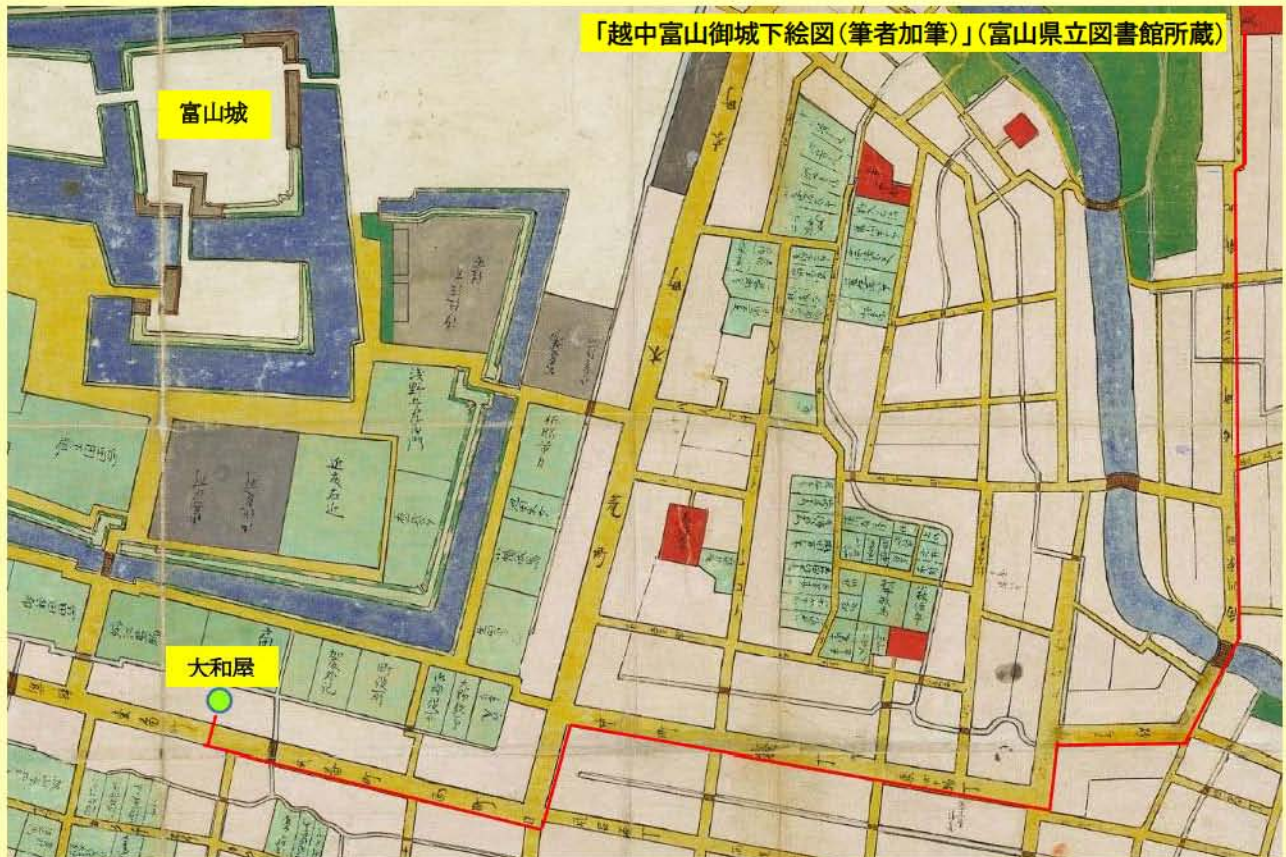


と推定している。またその「島倉洋品店」の位置については、大田栄太郎氏の考察から、現在の一番町交差点（近代に新設の国道41号線とかつての一番町の通りである県道6号線が交差）の北東角と推定され、昭和五十年代頃の「松屋洋品店」から道路路になつていくの辺りとしてその写真を示している。現在そこは「大和（だいわ）富山店」が入る「グランドプラザ」ビルになっている。

我々は富山市内随一の繁華街である総曲輪通り近くの駐車場に車を止め、歩いて交差点に向かった。かつての「大和屋」跡地は「大和富山店」の通用口となつていた。また西町交差点から越前町交差点にかけての県道6号線には、近年、丸の内方面と結ぶ市内電車の軌道が敷かれ、現代的なトラムが走っていた。交差点の横断歩道を渡り、一番町交差点を写真に収め、本日の探訪を終えた。



大和屋跡地：一番町交差点の大和富山店ビル付近



測量隊は、上絵図の北東から入り、—— に沿って測進して、一番町「大和屋」に止宿した。

おわりに

今回をもって、伊能測量隊の加賀藩領における休泊地探訪は一通り完結した。今後、石川県支部では、加賀・能登・越中（石川・富山両県）における伊能測量隊の足跡をまとめる企画を進めたいと思っている。「伊能忠敬没後二〇〇年記念誌」が都道府県別のページを設けたように、市町別のページを盛り込み、また史料編によって地域の重要史料も紹介したいと考えている。それにより、伊能測量隊が身近な地域にもやってきて足跡を遺したことを、地域の人々に知っていただきたいからである。

#### 【参考文献】

- ・高瀬重雄「越中の絵図―文化史への抒情」巧玄出版、一九七五年
- ・高瀬保（編）照古会（解説）『富山町づくし』天保十二年「富山町方旧事調理帳」桂書房、一九八九年
- ・竹内慎一郎『地図の記憶 伊能忠敬・越中測量記』桂書房、一九九九年
- ・河崎倫代「加賀藩天文暦学者西村太冲」(一)〜(三)『会誌』二八号〜三〇号、二〇〇二年
- ・金沢市立玉川図書館近世史料館（編）『放生津町年寄柴屋文庫目録』二〇一六年
- ・『伊能忠敬 日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年―前編』伊能忠敬研究会、二〇一八年



## 「伊能忠敬・五国の足跡フォーラム in 笹山領」開催される！

資料提供 兵庫県篠山市 加賀尾宏一氏

会員の加賀尾氏から表題のフォーラムについての資料提供を頂いた。その一部を紹介したい。

伊能忠敬笹山領探索の会新聞8号は前号87号で紹介されていたが、会員の玉造功氏から、「ネットで見つけたブログに「高齢者講座のこの1年を振り返って」と題する10回分のブログがあり、内容は兵庫県地域高齢者大学の丹波OBの方々が、丹波市内の伊能測量隊の足跡をたどり、シニア向け観光マップを作成し、地域貢献に繋げた記録で、会報で全国に紹介したい内容ではないかとの情報を頂いた。今回、たまたま河崎会員からも、同フォーラムの情報が寄せられ、加賀尾氏からは関連資料が送られてきた。

「伊能忠敬・五国の足跡フォーラム」は「伊能忠敬笹山領探索の会」が主催し、平成30年9月23日(日)・24日(月)の2日間にわたり篠山市で開催された。「兵庫県政150周年記念県民連携事業」として多くの支援・協賛・後援を得て行われたものである。

23日(日) 160名参加。



映画・伊能忠敬―子午線の夢―  
五国の活動報告、意見交換、交流会。

24日(月) 48名参加。

笹山領街道筋12地区に建てた標柱「伊能忠敬笹山領測量の道」をめぐるバスツアー。

「五国」とは兵庫県を構成する旧国名五国―摂津・播磨・丹波・但馬・淡路―のことである。フォーラムでは、これまで別個に活動してきた「五国」での諸活動が順次報告され、有意義な交流の場となった。本会員にとっても参考とすべきことが多く、主催者の許可を得て、概要を会報に転載させていただくことにした。

(編集部)

## 伊能忠敬但馬を測る

測量隊の見た

風景の復元に向けて

私が伊能忠敬に興味を持ったのは、平成6年に行われた、但馬の祭典で「但馬国分寺展」を担当した際、「測量日記」に国分寺跡の礎石のことが書かれているのを知り、伊能忠敬記念館で実見させていただき、感動したのがきっかけです。伊能忠敬や「大日本沿海輿地全図」は教科書等でも紹介され、よく知られています。しかし私たちの住んでいる村々や近くの街道を歩いて測量したことは殆ど知られていません。できればそのことを地域の人たちに知ってもらい、郷土への愛着や誇りを感じていただき、次のことを進めています。

①「測量日記」と「伊能大図」(国土地理院複製)をもとに明治時代の5万分の1の地形図に測量のルートを復元探索用の地図を作成。

② 測量隊が歩いた道を歩きながら、実際に見た風景や宿泊地等詳細を記録する。

③ 但馬測量時は、幕府直轄事業であったため地元の大支援助を受けていた。そのことは庄屋文書などからもわかり、新出の史料もあり、再調査を実施。



和田山町にある「右ハリマ左イセ追分碑」(測量の印として使用)



公民館講座での出石城下測量風景

④ 退職までは(今年3月末)、歴史講演会や市内の小学校、各地区に出前授業や出前講座として普及活動を実施。今後は、姫路城下から湯島(城崎温泉)までのルートを歩くことと、これまでの調査を基に伊能忠敬測量隊(地元支援含め)の功績を後世に伝えるため、解説書の刊行を目指します。(元豊岡市立歴史博物館長 加賀見 省一)



## 丹波の活動だより その1

### 忠敬丹波測量の跡を巡って学んだこと

私たちの取組は、兵庫県の高齢者向け大学院の活動でしたが、地元の観光資源の発掘をねらいとして始め、伊能忠敬の活動を題材にした。

忠敬は第8次測量の中で、1814年、今の丹波市内を歩き、各本陣に延べ9泊している。そのルートに沿って旧宿場町や山裾の旧道、寺社、史跡や石碑、古い峠道を实地検証することになり、事前の下調べや調査予定計画を練り上げて進めて行った。

① 測量の实地体験と測量具製作忠敬の測量に合わせた行動に倣い、出来るだけ当時の測量に倣うこととして、測量器具を自作し、距離や方位の測定の方法を検証した。

② 宿泊地や測量起点などの重要場所（忠敬測量時代）の旧跡や遺構を検証して廻った。そして当時の地域や産業の様子を憶測した。

③ 国境の峠道は行ける所まで登り、往時の行動に倣った。また、主要な寺社と境内の巨木等を見、地区の歴史を探究した。城下町や商家の史跡等を巡って地元の宝を確認した。

④ 江戸時代の物流は、運搬手段が人力や牛馬と高瀬舟であって、その産業遺跡（道標や牛馬の水飲み場や米や塩・乾物の荷上げ場跡の船座）を初見してきた。

### 発信したこと

活動記録を観光ガイドマップとした。



観光ガイドマップの一部分

① 忠敬の測量ルートを描き込み、観光者に分かりやすい観光案内図で、他には類を見ないものとした。

② シニア世代向きに、案内箇所を記載し、巡りながら、飲食や買物が楽しめる、ゆっくりできる所を取り上げた。裏面に写真、住所等を載せて、集客を高める工夫をした。

③ 県政150周年事業に応募して、観光マップを多刷し、近隣の観光案内所等に配布した。丹波市内での伊能の足跡が分かりやすく紹介できた。

④ 大学院の発表、小学校でのゲスト活動、新聞の記事（4社）等による情宣活動が強力にできた。伊能の活動を実演したことが効果的であった。

丹波市「8人8色」グループ



市内足跡調査

## 丹波の活動だより その2

ふるさと再発見、篠山の足跡「伊能忠敬篠山領測量の道」  
― 史実を後世に伝え、遺産を活かすために ―

ねらい

- 郷土の歴史文化を育み、生きた教材づくり
- ふるさとを愛する人材づくりにつなげる
- 人と人の出会いが新たな交流へと広がる



### Step 1 史実の掘り起し

篠山市内の街道を探索

● 活動の下調べ

（平成22年10月9日～平成23年2月末）

● 市内全域41回 延べ150km探索

● 今田市原～播州清水寺2.6km探索

### Step 2 伝え、広める

出前授業

● 地域団体14回

（平成24年7月8日～平成30年5月12日）

● 小学校8校12回

（平成24年7月10日～平成30年1月19日）

歴史ウォーク

● 地域団体8回

（平成24年9月10日～平成27年10月24日）

伊能忠敬ミニフロア展

● 伊能大図フロア展（国土地理院借用）

講演「伊能忠敬の全国測量と篠山領の測量道」星野由尚氏（元国土地理院長）

（平成26年3月29日～30日）

探索の会新聞

● 1号～4号（掘り起し広める）5号（4基設置）6号（8基設置）7号（交流促進）

（平成24年10月20日～平成30年1月1日）

### Step 3 後世に残る形づくり

● 標柱（石柱）

● 標柱4地区まちづくり協議会

4基除幕式（平成27年10月21日～27日）

● 標柱8地区まちづくり協議会と

7小学校8基除幕式

（平成28年10月28日～平成29年1月27日）

ふるさと教育

● イベント

「ふるさと再発見、歴史街道に学ぶ」

（7校、それぞれ

当時の街道を

歩測体験する）

（平成28年10月28日～

平成29年1月27日）

伊能忠敬篠山領測量ガイドブック

● 市内まちづくり協議会用、学校向補助教材用（平成29年4月）

● 市外歴史愛好家から入手方法について問合せ（平成30年1月15日）

Step 4 遺産の活用

交流促進

● 伊能忠敬ファンの仲間と市内を越えての広域交流

（平成29年11月24日、平成30年3月8日、14日、4月14日、5月9日、6月2日）

歴史街道ウォーキングマップ

● 標柱「伊能忠敬篠山領測量の道めぐり」ガイド

（平成30年2月）

伊能忠敬篠山領探索の会





## 播磨の活動だより その1

### 忠敬まかり通る播磨路

私達のグループは、県開催事業の「ふるさとひょうご創生塾」で構成され、地域リーダーを育成して、県内ネットワークを構築する創生マイスター資格を得たチームです。

伊能忠敬に取り組んだきっかけは、2005年に彼らが播磨の地に測量で足を踏み入れて200年になるのを縁に「測量日記」に基づき、その足跡を辿りながら、山河や路傍に忘れられつつある有形無形の遺産を歩くことによって、ふるさとの魅力を再発見し、其の成果を製本（1500部）にして記録に残し、後世にまで伝えることが出来ればとの思いで取り組みました。対象地域は、本のタイトルにもなりました「伊能忠敬の歩いた播磨みち」です。

#### 調査項目は

##### ① 伊能忠敬の足跡にまつわるご縁

文化2年10月より文化10年12月まで4回にわたり、彼らが測量日記に当時見聞きしたことや記述している内容を、我々の目線で見、それを今昔物語風に三現主義で観察してまとめた。

##### ② 石造物にまつわるご縁

播磨一帯は「石の宝殿」に代表されるよう石の特産地で石仏、道標、石棺等石に刻まれている地域遺産が多いことから記録に残すことにした。

##### ③ 出前授業で生き方学習のご縁

忠敬の生き方に共鳴し、生涯学習の元祖、人生二山説、中年の星として第二の人生の生き方の模範になる人物紹介として「出前授業」を行っています。気軽に声をかけてください、喜んで授業致します。

（自治会、公民館、老人会、コミセン、学校等です）  
ふるさとひょうご創生塾ご縁グループと同好会  
創生マイスター 高塚 洋



ラジオ関西・三上公也の番組出演



測量日記に基づき調査

参加者募集で播磨みちを歩く

講師を招きシンポジウムを開く

## 播磨の活動だより その2

### 加古川の輝く地域再発見

「伊能忠敬の歩いた播磨みちに学ぶ」編

ハートランドぐり石ネットは、自分が持っている知識、技能などを地域社会に役立てたいと考えている人と、それらのサービスを受けたい人を結びつけ、需給の関係を円滑にする住民活動サポートシステムづくりをめざしています。

ぐり石とは大きな石と石をつなぎ、重要な働きをする栗の実くらいな小石のことです。

石垣を支えるぐり石のごとく、地域のなかで必要とされるサービスをつなぐことで、地域のパワーアップを図りたいと願って活動しています。継続的に、「ボランティアの井戸端会議」を開催し、地域活動にかかわりたい人材の掘り起こしを図っています。従来のボランティアという概念にとどまらない、新しい働き方の創造につなげていきたいとの思いを強く持っています。

伊能忠敬は、全国に測量の足跡を残しておられますが、私たちの播磨地域にも、旅行で1回、測量で3回、訪れていることがわかっています。

播磨のどこを歩いたのでしょうか。その時の播磨地域はどんな風景や村であったのでしょうか。そのとき測量隊が見たものが、今はどうなっているのでしょうか。



そのことを研究されている高塚洋氏（ふるさとひょうご創生塾ご縁グループと同好会）と連携して、200年前の播磨地域の歴史や風習、暮らしを丹念に掘り起こされた成果を楽しく学ぶ機会を多くのひとびと地域住民に提供したいと考えています。

伊能忠敬と測量隊が当時見聞きしたことや記述している内容を実際に現地体験し、また、地域を再発見しながら多くのひとびとと交流していきたい。

東播磨地域ビジョン委員会  
ハートランドぐり石ネット



## 播磨の活動だより その3

### 「伊能忠敬・多可の道」プロジェクト活動報告

このプロジェクトは「伊能隊が多可町を通ったことを、多くの人に知ってもらいたい」という思いから、伊能忠敬没後200年の今年、町図書館と文化財部局の那珂ふれあい館が中心となり、2月に発足し、33名のスタッフと忠敬翁に関する学びを深めてきました。

一般の参加者もまじえた4月講座「測量機器を作ろう」では、伊能隊が使用していた「鉄鎖」「御用旗」「梵天」「象限儀」の4つを作成。中でも測量の要となる鉄鎖は、長さの違いが地図作りに影響するため、慎重に取り組みました。なお、この講座に先駆け、2名のスタッフが丹波市の伊能研究の先輩のもとで鉄鎖作りに必要な道具の作り方を伝授してもらい、それを複数台製作して下さっていたため、スムーズに作業を進めることができました。



また、5月講座「測量しながら歩く」では、雨の中、4月に作った鉄鎖や御用旗などを使い、伊能隊が歩いた町内の道の一部測量しながら歩きました。

事前に、スタッフの1人である現役の測量士さんが、測量地域へのピン打ちや、あらかじめ完成図を作製して下さっていたため、当日は、実測による地図作りの喜びも味わうことができました。



このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。

締めくくりとなった6月のフォーラムでは、忠敬翁の生き方を振り返りながら、プロジェクトの活動報告などを行い、あらためて忠敬翁の偉業を参加者全員で確かめることができました。

これをもってプロジェクトは終了となりましたが、関わられた皆様が、今後、多可町と忠敬翁とのつながりを伝える先達になってくださればと願っています。

「伊能忠敬・多可の道」プロジェクト



## 摂津の活動だより

### 伊能忠敬、三田測量の道を辿る

「歴史文化財ネットワークさん」では、年に数回、郷土の歴史を探索する「歴史ウォーク」を実施している。

今年は伊能忠敬没後200年に当たり、5月30日、第一回、伊能忠敬三田測量の道を辿る」という企画を実施した。

伊能忠敬の測量隊は三田市（旧三田藩）には1811年（3泊・天体観測1回・三本峠より上相野から広野村・三田中心地を通り湯山町へ）と1814年（2泊・草野から藍本町經由広野村まで）に2度訪れている。

実測による日本で初めての精度の高い日本地図を完成し、偉大な足跡を残した実績は、いまだに多くの人に感銘を与え現在に語り継がれていることは、当地でも変わらない。

開催当日は、雨の中にもかかわらず、50名弱参加があり、忠敬の根強い人気と関心の深さに驚かされた。



ルートはJR藍本駅周辺の日出坂峠（いまは高速道路が通り閉鎖）へ至る街道筋の宿泊地や忠敬も手を合わせたであろう酒滴神社・その他、周辺の歴史的建造物を見学。

また、篠山市との国境の記念石碑、そして篠山市草野地区の忠敬・測量の標柱（篠山市伊能忠敬登山探索の会建立まで足を伸ばした。その標柱から南方の三田側を望むと、日出坂峠が際立って見える。古くから交通の要所酒造りの杜氏も、また忠敬もこの峠を越している。往時が偲ばれる。

伊能忠敬を通して参加者には新たな歴史・地理発見の気づきが心に刻まれたであろう。



次回、11月中旬を予定。上相野の宿泊と天体観測をしたところを主に辿る。時代の流れとともに当時の街並みが今はないところもある。宿泊されたであろう場所は跡形もなくなっている。場所の特定もままならない。街道筋も見学用には適さない部分もあるかもしれない。そんな中を伊能忠敬の困難な測量の苦勞を感じながら歩いていきたい。

往時の足跡の感動を参加の皆様と共々味わいたいと思っています。

NPO法人

歴史文化財ネットワークさんだ



## 淡路の活動だより

### 淡路島における

### 「伊能忠敬研究」の 現状と今後の動向

文化5年（1808）3月4日、午後一時過ぎに舞子の浜を船出した伊能忠敬一行は、北の風に恵まれ順風のうちにほとんどなく淡路国北端の岩屋浦に着いた。この後、3月16日まで大阪湾沿いの東浦海岸と沼島を測量したあとと四国へ渡った。11月11日に再び四国から淡路島南の福良浦に渡り、島の中央部・中街道沿いと播磨灘に面した西浦海岸を二手に分かれて測量し、11月19日には島を離れ兵庫へ向かった。

淡路島における「伊能忠敬に関する研究」の蓄積は多くはない。その原因は、伊能忠敬来島時の様子を伝える地方文書の残存数の少なさである。

淡路地方史研究会の会員が島内の市町史や自費出版本の中で触れてはいるが、「伊能忠敬測量日記」を中心に若干の地方文書を利用した簡略なものである。

ただ、最近淡路地方史研究会の中に、新しい動向も生まれている。伊能忠敬の淡路測量への対応として藩から「人馬割本」を命じられ、来島時の人馬の手配などを勤め、終始随行したのが、柳沢村組頭庄屋廣田直道であった。直道は和算や町見術（測量術）を研究していた在野の知識人である。

新しい動向は、島内の伊能・廣田の新史料を探索しながら、和算学者廣田直道の視点から、淡路島での伊能忠敬の具体的な足跡を明らかにしようとするものであり、「人馬割本」を勤めた廣田直道の子孫である本研究会の会員が研究を進めており、今後の成果が期待されるところである。

淡路地方史研究会 会長 海部伸雄



忠敬来島頃の福良浦（「淡路浦々図巻」個人蔵）



忠敬来島頃の岩屋浦（「淡路浦々図巻」個人蔵）

### 会津藩校日新館、 日新館天文台遺跡訪問記

伊能忠敬研究会東北支部長

松宮 輝明

日本天文学会が今年創設した日本天文遺産に、会津藩校日新館天文台遺構と超新星や日食などの天文現象を書き留めた藤原定家の日記「明月記」が平成31年3月13日「日本天文遺産」に認定されました。

会津藩校日新館天文台は伊能忠敬が第3次測量で会津街道、若松城下七日町で天体観測を行った翌年の享和3年（1803）に日新館とほ

約6.5Mと伝わっています。（要旨福島民報）

天文台の設立には、貞享暦の生みの親・渋川春海、諏方神社、会津藩主・保科正之公の「会津暦」が出发点とされます。

日新館は戊辰戦争で焼失し、現存するのは会津若松城趾西側に残る天文台遺構のみです。天体観測の史料は残っていません。

ぼ同時期に建設されました。江戸時代の天文台遺構としては国内唯一と云われています。

遺構の基底部は22M四方、上部は10M四方、高さ、

#### 日本天文遺産

### 日新館天文台跡を認定

学会が初 江戸の遺構唯一現存



日本天文遺産に認定された会津藩校日新館天文台跡

### 福島民報

2019（平成31）年  
3月14日  
木曜日

発行所  
福島民報社  
福島県福島市  
電話 0249-221-1111  
FAX 0249-221-1112  
0249-221-1113  
0249-221-1114  
0249-221-1115  
0249-221-1116  
0249-221-1117  
0249-221-1118  
0249-221-1119  
0249-221-1120  
0249-221-1121  
0249-221-1122  
0249-221-1123  
0249-221-1124  
0249-221-1125  
0249-221-1126  
0249-221-1127  
0249-221-1128  
0249-221-1129  
0249-221-1130  
0249-221-1131  
0249-221-1132  
0249-221-1133  
0249-221-1134  
0249-221-1135  
0249-221-1136  
0249-221-1137  
0249-221-1138  
0249-221-1139  
0249-221-1140  
0249-221-1141  
0249-221-1142  
0249-221-1143  
0249-221-1144  
0249-221-1145  
0249-221-1146  
0249-221-1147  
0249-221-1148  
0249-221-1149  
0249-221-1150  
0249-221-1151  
0249-221-1152  
0249-221-1153  
0249-221-1154  
0249-221-1155  
0249-221-1156  
0249-221-1157  
0249-221-1158  
0249-221-1159  
0249-221-1160  
0249-221-1161  
0249-221-1162  
0249-221-1163  
0249-221-1164  
0249-221-1165  
0249-221-1166  
0249-221-1167  
0249-221-1168  
0249-221-1169  
0249-221-1170  
0249-221-1171  
0249-221-1172  
0249-221-1173  
0249-221-1174  
0249-221-1175  
0249-221-1176  
0249-221-1177  
0249-221-1178  
0249-221-1179  
0249-221-1180  
0249-221-1181  
0249-221-1182  
0249-221-1183  
0249-221-1184  
0249-221-1185  
0249-221-1186  
0249-221-1187  
0249-221-1188  
0249-221-1189  
0249-221-1190  
0249-221-1191  
0249-221-1192  
0249-221-1193  
0249-221-1194  
0249-221-1195  
0249-221-1196  
0249-221-1197  
0249-221-1198  
0249-221-1199  
0249-221-1200



日本一のふくしまをつくる





日新館正面



天文台遺構の前で日新館長、宗像精先生（左）と筆者

会津街道の天体観測  
 三代村（郡山市湖南町）  
 伊能忠敬は福島県内16か所に泊まり里程の測量をしています。  
 「東都以北及蝦夷地北極出地度方位裡測量」によると三代村本陣二瓶又右衛門屋敷で享和2年（1802年）6月24日（陽暦7月23日）9個の星座を観測しています。  
 江戸時代、当時の星座名は中国語で記載されています。  
 日新館天文台は、天体観測機器、天体観測の技術など、伊能忠敬の天体測量、幕府天文方（浅草）の指導があったものと思われれます。

日新館は昭和62年、会津若松市河東町に完全復元されました。  
 （敷地8万坪、学舎、天文台、孔子像、馬場、射撃場、水練場）  
 去る平成31年3月18日、日新館を訪問しました。  
 会津藩校日新館長、宗像精先生、会津若松市教育委員会文化課文化財グループ主査近藤真佐夫先生に面会し、伊能忠敬関連の史料を提供いたしました。  
 会津若松市広報5月号に、伊能忠敬会津城下測量と日新館天文台との関係が掲載されました。



日新館全景、天文台頂上より



日新館水練場（プール）



孔子礼拝堂（昌平黌と同じ大きさ）



日新館校舎内天球儀（模型）



## 新入会員自己紹介

兵庫県豊岡市 加賀見省一



出身は兵庫県加古川市で、大学で考古学を専攻しました。卒業後、同県城崎郡日高町（現豊岡市）教育委員会に文化財担当として就職し、昨年三月末で退職をしました。時間ができたので、興味を持っていた伊能忠敬のことを調べたいと思い、伊能忠敬研究会に入会させていただきました。

私が伊能忠敬に興味を持ったきっかけは、平成六年度に奈良時代に建立された但馬国分寺の発掘調査成果の展示を担当した時です。伊能忠敬の『測量日記』の文化十一年正月十九日に「国分村（左国分寺旧跡田地中に柱の礎石三ツあり）」と但馬国分寺跡の礎石の記述があります。また同日「山本村右田中に法花寺尼寺旧跡あり。柱礎セツあり」と書かれていることを知ったことです。展示及び図録に『測量日記』の写真掲載さ

せていただきたいと思い、伊能忠敬記念館にお邪魔し、伊能忠敬の直筆を見て大きな感動を受けました。

また、同展示で神戸市立博物館所蔵の伊能小図（レプリカ）を借用した際に、沿岸部だけでなく内陸部特に姫路城下から湯島（現豊岡市城崎町湯島）までの内陸部の測量が詳細に行われて繋がれていること、自宅前を測量していたことも知り、大変驚いたのは是非地域の人たちに伝えていきたいと思うようになりました。伊能忠敬の但馬測量は二度行われています。

最初は第五次測量の時で、文化三年八月二十日に因幡国から但馬国に入り、海岸線を測量しながら、湯島に滞在し、田山川『測量日記』では丸山川と表記、さらに下流域を豊岡川と呼んでいたことがわかります。下流域を測量しています。

二度目は第八次調査で、文化十一年正月を姫路城下西中町で迎え、同月三日に出石藩の役人の御用聞きを受け、翌四日に姫路城下を出立して、無測で文化八年三月三日に書写山円教寺から姫路城下大黒町迄を測量した際に東中島村（現姫路市白国）の出石街道と増井道の追分に残した㊤印から、伊能忠敬を隊長とする本隊が丹波街道、永井甚左衛門を隊長とする別手が但馬街道とに分かれて測

量を行っています。

今年に入り、数回姫路城下と出石街道と増井道の追分付近の現地を調査し、㊤の位置を確認しました。これからは、文化三年に湯島の湯之前橋前に残した㊤印に繋ぎ、さらに出石城下を経て丹波、丹後の両国へ測量を進めた街道や風景を「伊能図」「測量日記」「山島方位記」などから復元を試みると共に、地元に残る古文書から伊能測量隊の測量を支えた人たちの様子を調べたいと思っています。



写真1 えびす橋

写真1は、但馬街道を測量した別手が正月十二日に朝来郡内の竹田城跡の麓を測量した際に渡った石橋です。『測量日記』には「竹田町、字新町、小溝石橋二間。右夷松というあり」と書かれています。この橋は今も「えびす橋」と呼ばれ地元の方たちに大切に守られています。



写真2 道標

写真2は、同日、和田山村（現朝来市和田山町）にある「右はりま左いせ道」の道標（追分碑）に㊤印を残します。そして、同月十四日に丹波街道を測量した本隊がこの㊤印に繋いだ道標です。

できれば今後、伊能測量隊の但馬測量の調査成果を『伊能忠敬研究』でご紹介できればと思っています。先学のみなさま方のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。



法花寺旧寺の柱礎（最下段の石）



## 2019年度定期総会

6月2日(日)に東京深川の富岡八幡宮で会員43名が出席して2019年度定期総会が開催された。

議題は、2018年度事業報告、決算報告及び監査報告、2019年度事業計画、予算案、会則の変更、役員選出で、全ての議案が承認された。

新理事には、菱山剛秀(代表)、河崎倫代(副代表)、前田幸子(事務局長)、新沢義博、高安克己、玉造功、宮内敏、山本公之の8名、監事には清水靖夫氏が選出された。

顧問は新たに伊能楯雄、伊能洋氏、特別顧問は鈴木純子、星埜由尚の各氏に就任いただき、理事会に助言をいただくことになった。

### 理事の会務分担

会員担当 (河崎倫代)

総務担当 (前田幸子、山本公之)

編集担当 (高安克己、玉造 功、菱山剛秀、宮内 敏)

行事担当 (新沢義博)

その他、会則の変更は、これまであいまいだった特別会員と名誉顧問・顧問の位置づけを明確化するためのものであった。

改定後の会則はホームページに掲載しているので確認いただきたい。



懇親会に届いた四国・九州からの風

総会後の懇親会では各地の会員から近況報告や地域での取り組みが紹介された。その中で特に目を引いたのは、昨年9回にわたって連載された、高知新聞の見聞き2ページの迫力だった。

この記事の担当記者で当会会員でもある福田仁氏が、今号から連載

を始めたのでお読みいただきたい。

ここでは、福岡県田川郡2町の自治体広報紙を紹介し、身近なところでのどんな活動ができるか、ともに考えるきっかけにしたい。

### 一、福智町広報「FUKUCHI」 (2018年11月号)

「没後二百年 伊能忠敬の生き様と偉業に迫る」と題した、12ページにわたる特集である。忠敬の人物像、測量機器、田川地区を記した『測量日記』等を紹介し、田川郷土研究会会長で当会会員である中野直毅氏が「努力積み重ねる忠敬の価値観を次代へ伝えたい」と語っている。

自治体広報紙らしく、忠敬の「一身二生」にちなみ、「人生の途中で一念発起し、次のステージへと歩みを進める」町民を紹介し、「カラダづくりに効果大、今から始める伊能ウォーキング」を勧めている。当会会員の奥永渚さんが愛犬とともにウォーキングモデルを務めている。



### 二、大任町広報「おおとう」 (2019年2月号)

『測量日記』の「下今任村十輪院にて小休、宝蓋松あり」という一文に町との「縁」を見い出して、特集が組まれた。忠敬が記した宝蓋松は約50年前に枯れてしまったが、1923年の写真には樹高十数メートルのみごとな松が写っている。

また、図書室では没後200年にちなんで「伊能忠敬特集コーナー」が設けられ、町民に利用を呼びかけている。



### ♥新コーナーの原稿募集♥

「伊能忠敬と私」、「伊能忠敬との出会い」という内容(タイトルは自由)で、原稿を募集します。原稿の長さは、本文・写真を含めて1ページとします。今号最後ページの投稿要領に従って投稿してください。皆さまのご協力をお願いします。



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくことがあります。

### ②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。手書きの場合は、原稿用紙に楷書で記載してください。  
・写真 一般的にJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無解像度な場合があります。わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。手書きの場合は、そのまま印刷原稿となるよう製図したものをお送りください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kaho@inoh-ken.org](mailto:kaho@inoh-ken.org)

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第89号)は2019年10月発行 原稿×切は8月30日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

### 四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org) (留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

郵便振替口座 00150-607216100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

### 伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館「Inopedia(イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典  
<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料  
<http://members.jcom.home.ne.jp/i-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料  
<http://www.titrim.or.jp/~koko>

編集後記 ◇今号は令和での初号となった。改元祝賀ムードもあって、後半は天候にも恵まれ、一〇連休はこの観光地でも大混雑だったという◇年に数度しか来ない孫たちは、それを察知してか今年是我が家を選んでくれた。突然、普段の日常は戦場と化し、あつちが痛いこ

つちが痛いなど言っていられない。帰った後は疲れと幸せ感が微妙に混在して、まどろむばかりだ。老いや世代交代を嫌でも実感させられる◇編集作業での悩みの種は慢性的原稿不足だ。今もそれは解消されていないが新入会員の投稿が目立ってきている。どしどし投稿していただき、新風を吹き込んでもらえたらと願う◇会誌は会員の発表の場であり会員相互の交流の場です。先ずは上段の投稿要領をご覧ください、めんどろがらず、身近な話題の投稿から始められては如何だろうか。会誌デビューをお待ちしています。(S・M)